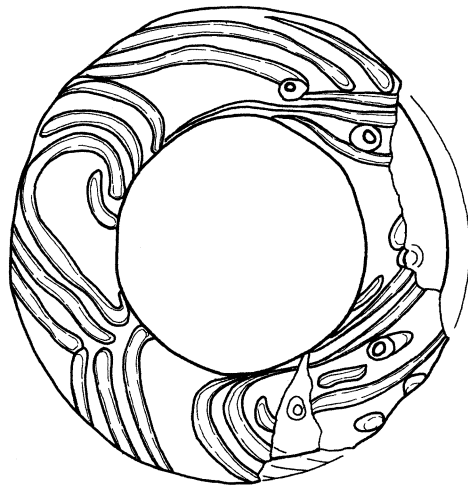


一般地方道 志柄・宮ヶ原・福山線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

いず み びら
出 水 平 遺 跡



2002年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

本報告書は、一般地方道志柄宮ヶ原福山線の改良事業に伴って、鹿児島県教育委員会が平成11年度に実施した出水平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

文化財は現代に生きる私たちが、子孫へと守り伝えるべき貴重な財産です。とりわけ、埋蔵文化財は一度破壊したら二度と元の状態に戻すことができないという性質を持っており、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調和を図ることは、今後ともますます重要な課題といえます。

出水平遺跡では道路工事中に遺物の発見が報告されました。その取扱いについて関係者の間で緊急に協議が行われ、工事を一時中断して記録保存のための緊急発掘調査が実施されることになりました。

調査の結果、縄文時代早期を中心とする各種の遺物が出土し、八合原台地における先人たちの足跡を垣間見る資料を得ることができました。

本報告書が文化財保護意識の高揚と学術研究のために広く利用されることを願っております。

最後になりましたが、文化財保護の趣旨を理解され、発掘調査に御協力いただいた県土木部（大隅土木事務所）を始めとする工事関係者各位、発掘調査に従事された地元の皆様、整理作業に従事された皆様に感謝の意を表します。

平成14年 3月

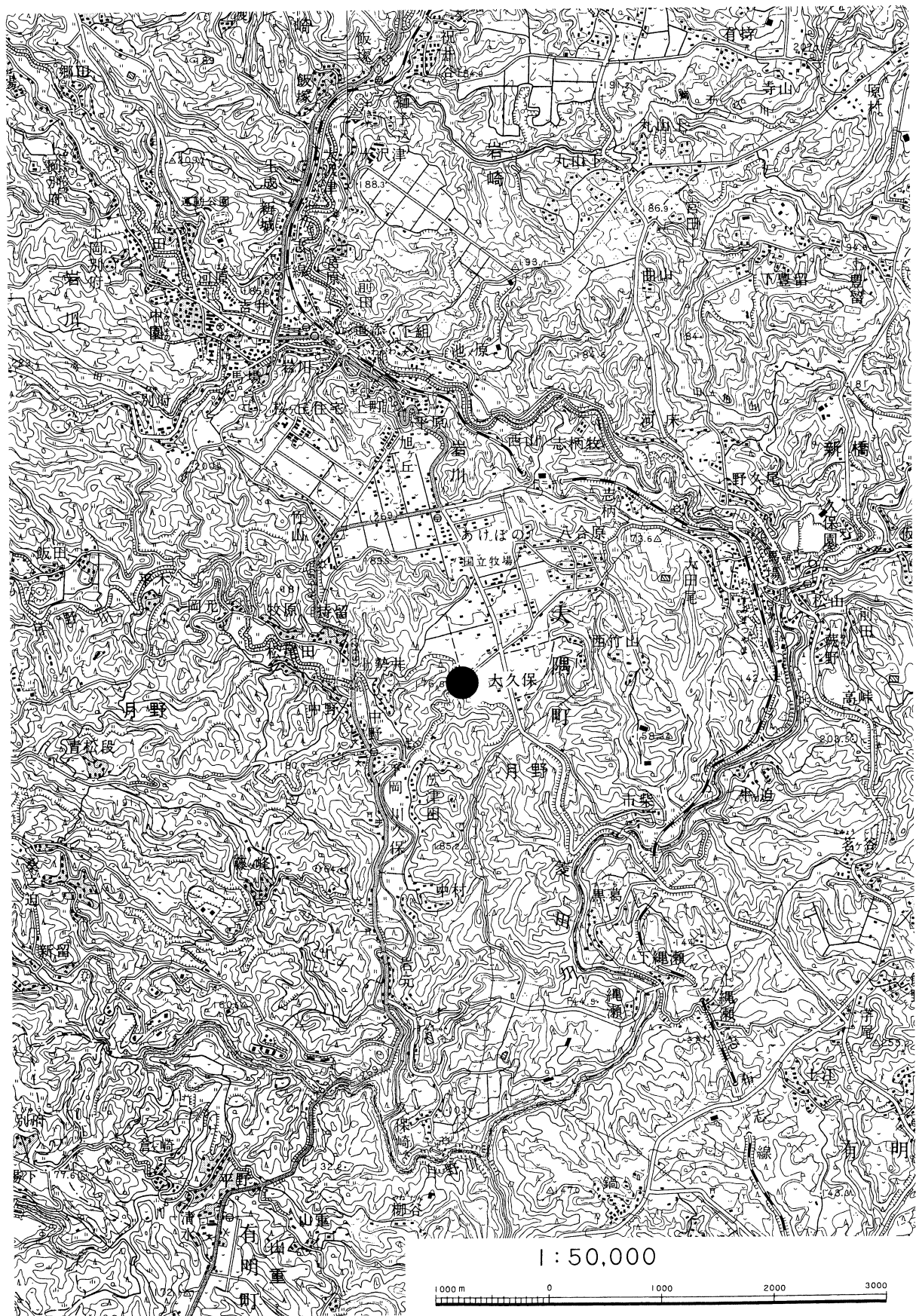
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井 上 明 文

例 言

- 1 本報告書は、一般地方道志柄宮ヶ原福山線の道路改良事業に伴う出水平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県曾於郡大隅町大字月野字上大久保3360番地ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課（大隅土木事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。
- 4 発掘調査事業は平成11年6月1日から同年7月31日にかけて実施し、報告書作成事業は平成13年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく。
- 8 発掘調査及び現場における図面の作成・写真の撮影は、倉元良文と児玉健一郎が行った。
- 9 石器の実測・トレースの大部分を(株)埋蔵文化財環境研究所に委託した。
- 10 遺構内から出土した炭化物の¹⁴C年代測定を(株)古環境研究所に委託した。
- 11 遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事鶴田静彦、同文化財研究員福永修一、同横手浩二郎が行った。
- 12 本書の執筆・編集は児玉が行った。
- 13 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

報 告 書 抄 録

ふりがな	いずみびらいせき							
書名	出水平遺跡							
副書名	一般地方道 志柄・宮ヶ原・福山線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	43							
編著者名	児玉健一郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 TEL 0995-65-8787							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いずみびらいせき 出水平遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおぐんおお 曾於郡大 すみりけおおあざ 隅町大字 つきのあざかみ 月野字上 おおくほ 大久保 3360番地 他	63	218	31°33'50"	131°0'38"	1999.06.01	1,600	県道改良事 業に伴う緊 急発掘調査
				~	~	~		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
出水平遺跡	散布地	縄文時代早期	集石8基	石坂式土器・縄文土器 妙見式土器・平楯式土器 手向山式土器・塞ノ神式土器 押型文土器 石鏃・石匙・石斧・磨石			耳栓状土製品	
		縄文時代晚期		刻目突帯文土器				
		弥生時代前期		甕形土器 壺形土器				



付図 出水平遺跡の位置

本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 位置と環境	3
第2節 大隅町における考古学的調査の歴史	3
第3節 周辺遺跡	4
第3章 調査の概要	
第1節 調査区の設定と調査方法	6
第2節 遺跡の層位	7
第4章 縄文時代の調査	
第1節 調査の概要	9
第2節 早期の遺構	10
第3節 早期の出土遺物	
(1) 土器	14
(2) 土製品	41
(3) 石器	44
第4節 前期・後期・晩期の出土遺物	
(1) 前期の出土遺物	51
(2) 後期の出土遺物	53
(3) 晩期の出土遺物	54
第5章 弥生時代の調査	
第1節 調査の概要	60
第2節 出土遺物	60
第6章 古代の調査	
第1節 調査の概要	62
第2節 出土遺物	62
第7章 自然科学分析	63
第8章 調査のまとめ	64

挿図目次

付図 出水平遺跡の位置	
第1図 周辺遺跡分布図	5
第2図 周辺地形図	6
第3図 土層断面図	8
第4図 グリッド配置図・集石 位置図・土層断面位置図	11
第5図 集石(掘り込みのない集石)	12
第6図 集石(掘り込みのある集石)	13
第7図 集石内の出土遺物	14
第8図 早期土器の分布	16
第9図 1類土器・2類土器の分布	16
第10図 1類土器・2類土器	17
第11図 3類土器の分布	19
第12図 3類土器	20
第13図 4類土器の分布	22
第14図 4 a 類土器 1	23
第15図 4 a 類土器 2	24
第16図 4 a 類土器 3	25
第17図 4 b 類土器・4 c 類土器	26
第18図 5 類土器の分布	31
第19図 6 類土器の分布	31
第20図 5 類土器	32
第21図 6 類土器	34
第22図 7 類土器の分布	36
第23図 7 類土器	37
第24図 8 類土器・9 類土器の分布	39
第25図 10類土器～12類土器の分布	39
第26図 8 類土器・9 類土器	40
第27図 10類土器～12類土器	42

第28図	耳栓状土製品	42	第37図	前期の石器	53
第29図	石材別の分布	46	第38図	後期の土器	53
第30図	器種別の分布	46	第39図	晩期土器の分布	54
第31図	早期の石器 1	47	第40図	晩期の土器	55
第32図	早期の石器 2	48	第41図	晩期の石器 1	58
第33図	早期の石器 3	49	第42図	晩期の石器 2	58
第34図	早期の石器 4	49	第43図	弥生土器の分布	60
第35図	前期土器・後期土器の分布	51	第44図	弥生時代の土器	61
第36図	前期の土器	52	第45図	古代の遺物	62

表 目 次

付表	報告書抄録				
表 1	周辺遺跡地名表	4	表12	土器観察表 8 (早期 6 類)	35
表 2	時期別の土器出土量	9	表13	土器観察表 9 (早期 7 類)	38
表 3	時期別の石器組成	9	表14	土器観察表10(早期 8 類~12類)	43
表 4	早期土器の類別組成	15	表15	剥片石器の石材別点数	45
表 5	土器観察表 1 (早期 1 類・2 類)	18	表16	剥片石器の石材別重量	45
表 6	土器観察表 2 (早期 3 類)	21	表17	早期石器観察表	50
表 7	土器観察表 3 (早期 4 類・1)	27	表18	土器観察表11(縄文前期)	53
表 8	土器観察表 4 (早期 4 類・2)	28	表19	土器観察表12(縄文晩期 1)	56
表 9	土器観察表 5 (早期 4 類・3)	29	表20	土器観察表13(縄文晩期 2)	57
表10	土器観察表 6 (早期 4 類・4)	30	表21	晩期石器観察表	59
表11	土器観察表 7 (早期 5 類)	33	表22	土器観察表14(弥生)	61

図 版 目 次

図版 1	発掘作業風景・Ⅲ層遺物出土状況	69
図版 2	A-4~6区Ⅷ層遺物出土状況・土層断面	70
図版 3	3号集石・4号~6号集石	71
図版 4	6号集石・7号集石	72
図版 5	縄文時代早期の土器 1 (1 類~3 類)	73
図版 6	縄文時代早期の土器 2 (4 a 類)	74
図版 7	縄文時代早期の土器 3 (4 b 類・4 c 類・5 類)	75
図版 8	縄文時代早期の土器 4 (6 類・7 類)	76
図版 9	縄文時代早期の土器 5 (8 類~12 類)	77
図版10	耳栓状土製品	78
図版11	縄文時代早期の石器	79
図版12	縄文時代前期・後期の土器	80
図版13	縄文時代晩期の土器	81
図版14	弥生時代の土器	82

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県土木部道路建設課（以下県土木部）は、曾於郡大隅町八合原地区において一般地方道志柄宮ヶ原福山線の道路改良事業を計画し、事業に着手した。ところが、大隅町教育委員会から鹿児島県文化財課（以下県文化財課）へ、事業予定区域が周知の遺跡である出水平遺跡に含まれている可能性があるという連絡があった。連絡を受けた県文化財課は、県土木部に工事の一時中断を依頼するとともに、平成11年3月3日に重機を用いた試掘調査を実施した。試掘調査の結果、事業予定区域内の約1,600㎡にわたり縄文時代と弥生時代の遺物包含層が残存していることを確認した。

この試掘調査の結果をもとに、県文化財課と県土木部との間で今後の事業の推進と遺跡の取り扱いについての協議を行った。協議の結果は次のとおりである。①事業計画の変更による遺跡の現状保存は不可能と判断されるので、緊急発掘調査による記録保存を図る。②調査が終了するまで工事を一時中断する。③既に発注済みの事業なので早急に調査に着手する。

以上のような経緯を経て、平成11年6月1日～同年7月23日にかけて1,600㎡を対象に緊急発掘調査を実施し、平成13年5月6日～平成14年3月31日にかけて報告書作成を行った。

第2節 調査の組織

事業主体者	鹿児島県土木部道路建設課（大隅土木事務所）		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課 （平成11年度・発掘調査）		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永 和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
	〃	係長	有村 貢
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	課長補佐	新東 晃一
	〃	主任文化財主事	中村 耕治
調査担当者	鹿児島県教育庁文化財課	文化財主事	倉元 良文
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	〃	児玉健一郎
	〃	〃	西郷 吉郎
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主事	溜池 佳子
発掘調査作業員	阿多トシ，岩永トシ子，上野京子，上野正，奥野峯生，柿木和子，加塩時子，川村省一，北岩カスミ，黒木良信，児玉正子，神宮司博子，神宮司美保子，末森弘美，徳富マチコ，豊満近夫，永山たみ子，新原めぐみ，西段ミチ子，野村テル子，東正富，東山ノエ，平原明治，平松節子，宮路道雄，森山耕生，八木鈴子，八木なるみ，八木みよ子，八木洋子，山		

下治兵，吉留美春，吉永祐子

(平成13年度・報告書作成)

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
	〃	係 長	前田 昭信
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
	〃	課 長 補 佐	立神 次郎
	〃	主任文化財主事第一調査係長	青崎 和憲
	〃	主任文化財主事	中村 耕治
調査担当者	鹿児島県教育庁文化財課兼 鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	児玉健一郎
調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主 査	栗山 和己
整理作業員	徳永郁代，田淵一子		

第3節 調査の経過 (日誌抄)

調査の経過は調査日誌から略述する。

6月1日(火)～6月4日(金)

調査区が現道の両側に分かれているので、現道の南側の調査区(C区・D区)から調査に着手することにした。重機を用いて表土除去作業を実施する。天候不順のために人力による作業は4日から実施。作業員への諸連絡と調査における注意を行った後に、発掘道具を配布し、調査現場にベルトコンベアを設置する。

6月7日(月)～6月11日(金)

雨が多いので、調査区から道路への土砂流出対策を行う。表土除去が終了した南側の調査区(C-9区～C-11区)では、縄文時代前期以降の遺物包含層は削平されていた。アカホヤ火山灰層(VI層)までを重機で除去し、人力で縄文時代早期の遺物包含層(VII層)掘り下げを実施する。押型文土器が出土。併行して北側の表土除去作業を行った後に、B-9区～B-10区の古代の遺物包含層(II層)と、縄文時代晩期と弥生時代の遺物包含層(III層)の掘り下げを実施する。

6月14日(月)～6月18日(金)

A～B-9区～13区のII層の掘り下げを実施し、遺物出土状況写真撮影後に遺物の取り上げ。A～B-4区～8区のIII層とIV層の掘り下げ。C-9区～C-11区のVII・VIII層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影後に遺物の取り上げ。C～D-3区～8区のアカホヤ火山灰層(VI層)を重機で除去。B-9区～B-13区のIV層から少量の縄文時代晩期の土器片が出土。

6月21日(月)～6月25日(金)

A～B-7区～9区のIII層・IV層の掘り下げと遺物取り上げ。B-11区～13区のVI層を重機で除去。C～D-3区～8区のVII層掘り下げ。塞ノ神式土器や押型文土器が出土。A～B-4区～6区のVII層・VIII層の掘り下げ。

6月28日（月）～7月2日（金）

C～D-4区～9区のⅦ層・Ⅷ層掘り下げ，遺物取り上げ。A～B-4区～6区のⅦ層・Ⅷ層掘り下げ。今週も雨が多く，作業は遅れ気味である。

7月5日（月）～7月9日（金）

A～B-4区～9区のⅦ層・Ⅷ層掘り下げ，遺物取り上げ。集石2号～6号平面図作成。集石4号・5号断面図作成。C区・D区の作業が終了したので，ベルトコンベアをA区・B区に移動。

7月12日（月）～7月16日（金）

A～B-6区～10区のⅦ層・Ⅷ層掘り下げ，遺物取り上げ。A～B-6区のベルト部分の薩摩火山灰層（Ⅸ層）以下の掘り下げ。

7月19日（月）～7月23日（金）

A～B-6区のベルト部分のⅩ層以下の掘り下げ。遺物・遺構は確認されなかった。A～B-9区・10区のⅧ層掘り下げ。集石7号・8号の実測。23日に調査終了，器材搬出。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と環境

大隅町は，大隅半島北部のほぼ中央部に位置する。出水平遺跡の所在する八合原台地は大隅町の北東部にあたり，中央部にわずかなくびれ部分があり，北西方向の平坦地は約3km，北方向に直線で約3kmである。台地の周辺は，30～80mにおよぶ深い谷によって分断され，北に下ると岩川市街地，末吉町に隣接し，東は松山町に隣接している。出水平遺跡は，八合原台地の南西端に位置し，台地をさらに南西に下ると，菱田川の支流である月野川の浸食によって形成された月野地区の水田地帯が広がっている。

遺跡は曾於郡大隅町大字月野字上大久保3360番地外に所在する。遺跡は西方向に開けた標高約150mのシラス台地端部に立地し，現況は畑地となっている。周辺一帯は畑地整備事業によって平坦化されているが，遺跡内の地層を観察するとかつては起伏のある地形であったことがわかる。

第2節 大隅町における考古学的調査の歴史

町内における最初の考古学的発掘調査は，1956年に同志社大学の酒詰伸男博士が行った上八合遺跡の発掘調査である。上八合遺跡は八合原台地のくびれ部分に近く，現在は国立牧場の用地となっている。調査では，縄文時代の遺物が出土したと言われている。

その後，本格的な発掘調査は長く行われていなかったが，平成4年度以降からは町教育委員会が調査主体となって各種農業基盤整備事業等に伴う発掘調査が実施されている。鳴神遺跡（縄文時代晩期・八合原所在），宮田遺跡（縄文時代早期・月野所在），炭床Ⅰ遺跡（縄文時代早期～平安時代・大谷所在），川路山遺跡（縄文時代後期・須田木所在），向ノ段・大丸・小迫頭遺跡（縄文時代早期～後期・大谷地区所在），立馬遺跡（縄文時代早期，平安時代・坂元所在）などの発掘調査が実施されているが，調査結果の報告は概報がほとんどであるために，詳細な内容は不詳である。

第3節 周辺遺跡

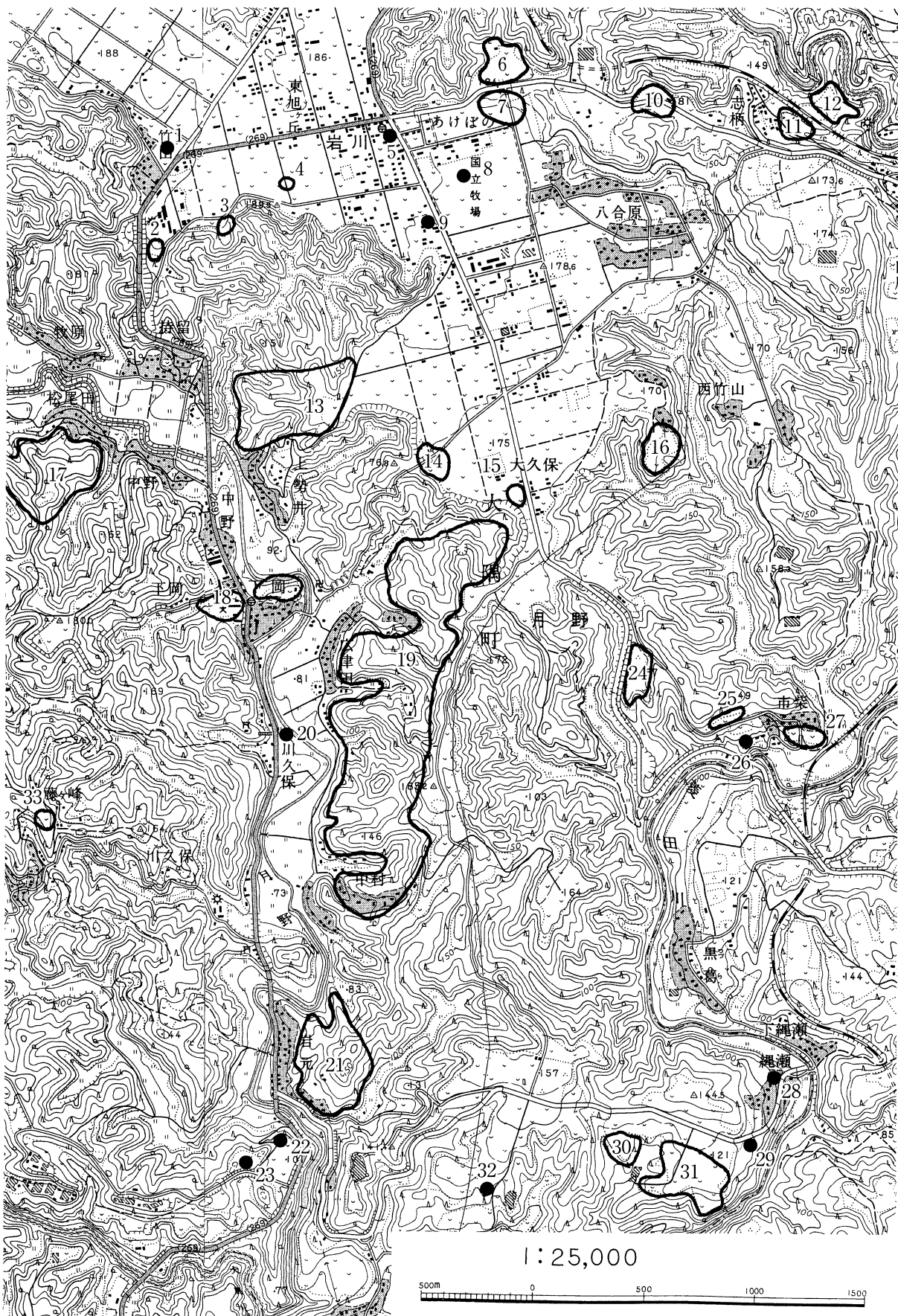
周辺には縄文時代を中心とする遺跡が点在する。八合原台地に所在する遺跡としては、先述したように上八合遺跡（8・縄文）竹山Ⅱ遺跡（1・弥生），堀込遺跡（2・縄文），馬ノ背平遺跡（3・縄文早期），上長迫遺跡（4・縄文），境木遺跡（5・縄文），稲葉崎遺跡（6・縄文晩期），八合原遺跡（7・縄文後晩期），上段遺跡（9・縄文），下大久保遺跡（15・縄文時代早期）などがある。馬ノ背平遺跡からは口縁部を欠損した塞ノA a 神式土器の出土が報告されている。八合原遺跡からは縄文時代後期の指宿式土器，石鏃，磨石等の出土が報告されている。平成7年に大隅町教育委員会が発掘調査した宮田遺跡（33）からは，縄文時代早期の前平式土器，石坂式土器，吉田式土器の遺物のほかにそれに伴う集石遺構が報告されている。出水平遺跡の南側には建武年間～元亀年間にわたるとされる山城の広津田城（18）が所在する。これら以外に小台地上や丘陵端部に縄文時代を中心とする遺跡が点在している。

表1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	時代	遺物	文献等
1	竹山Ⅱ	月野梶畑	台地端	弥生	弥生土器	
2	堀込	月野2410-2, 2411	台地端	縄文	土器片	
3	馬ノ瀬平	月野2371-2	台地端	縄文早期	塞ノ神式	①
4	上長迫	月野2335, 2336	台地端	縄文	土器片	
5	境木	月野境木	台地		土器片	
6	稲葉崎	月野稲葉崎	台地端	縄文晩期, 弥生, 歴史	晩期土器, 土師器	
7	八合原	月野八合原	台地	縄文後・晩期, 歴史	指宿式, 石皿, 青磁	①②
8	上八合	月野八合原	台地	縄文	石皿	
9	山段	月野山段	台地	縄文	黒曜石石鏃	
10	志柄	月野志柄	台地端	弥生, 古代, 歴史	土師器	
11	桜迫Ⅰ	月野桜迫	丘陵	縄文晩期, 歴史	土師器	
12	桜迫Ⅱ	月野桜迫	丘陵	弥生中期, 古代, 歴史	山ノ口式, 土師器, 鉄滓	
13	坂之上	月野坂之上	台地端	縄文	土器片	
14	出水平	月野上大久保	台地端	縄文, 弥生	土器, 石器	本報告書
15	下大久保	月野3484	台地端	縄文早期	土器片	
16	前床	月野1818-2	台地端	縄文	土器片	
17	松尾田城跡	月野野首	丘陵	戦国中～末		
18	月野城跡	月野岡川路・上岡	丘陵			
19	広津田城跡	月野井神山	丘陵・山陵	建武～元亀		
20	宮園	月野宮園・上川久保	丘陵端	縄文		
21	岩元城跡	月野岩元他	丘陵	南北朝～戦国末		
22	上段	月野5370	丘陵端	縄文早・前期, 歴史	土師器	
23	松ヶ迫	月野松ヶ迫	丘陵端	縄文早期, 歴史	前平式, 打製石器, 土師器, 須恵器	
24	市	月野227-229	丘陵	縄文前・晩期, 弥生, 古墳	浅鉢	
25	市柴Ⅲ	月野屋敷添	丘陵	縄文後期		
26	市柴Ⅰ	月野市柴	丘陵端	縄文, 弥生	土器片	
27	市柴Ⅱ	月野屋敷添	丘陵端	縄文, 歴史	土器片, 土師器	
28	縄瀬Ⅰ	月野4821付近	丘陵端	縄文, 古墳	土器片, 成川式	
29	縄瀬Ⅱ	月野縄瀬段	台地端	縄文後期	土器片	
30	猪子平	月野猪子平	台地端	縄文	土器片, 黒曜石剥片	
31	縄瀬	月野縄瀬段	台地	縄文前・晩期, 弥生, 古墳	網目文土器	
32	久保崎Ⅳ	月野上段	台地端	縄文早・前期, 歴史	塞ノ神式	
33	宮田	月野宮田	丘陵端	縄文早期	前平式, 石坂式, 吉田式	③

参考文献

- ①大隅町誌 1969
- ②鹿児島県考古学会紀要 1953
- ③「宮田遺跡」大隅町埋蔵文化財発掘調査概報第5集 大隅町教育委員会 1996



第1図 周辺遺跡分布図

第3章 調査の概要

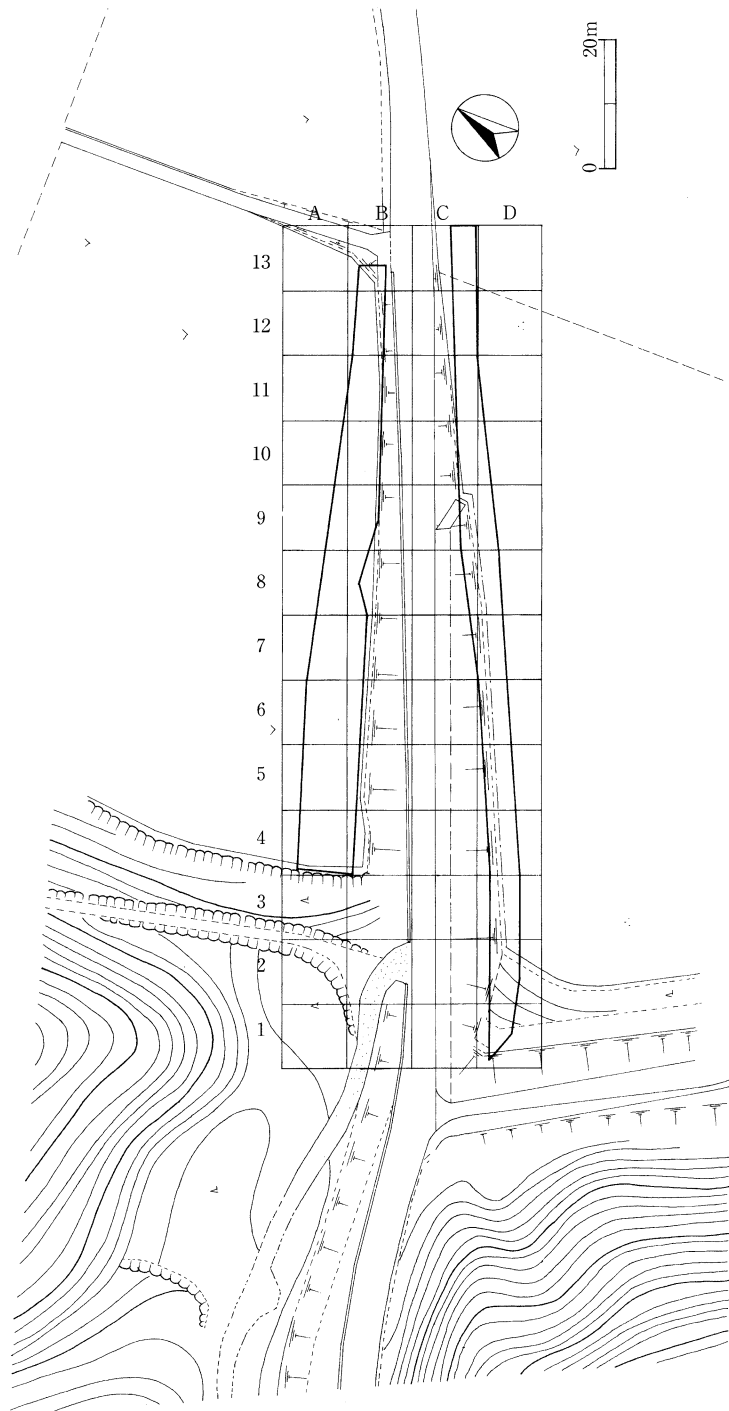
第1節 調査区の設定と調査方法

道路改良事業の内容は、現道の両側の畑地部分を切り下げて道路を拡幅するというものである。現道の崖部分の土層観察を行った結果、現道部分の遺物包含層は過去に実施された工事によって削平されていることが確認された。

したがって、今回の調査は現道を挟んだ両側の拡幅部分だけを対象として実施した。現道と拡幅予定部分との比高差は1m～10数mあるため、調査の安全性を考慮し、崖際から約1m控えて調査区を設定した。

調査にあたっては、工事用センター杭No.17とNo.21を結ぶ線を基準軸とする10m四方のグリッド（調査用区画）を設定し、グリッドごとに調査を実施した。グリッドは北から南へA区～D区、西から東へ1区～13区と呼ぶこととし、1グリッドは例えばA-3区というようにアルファベットと数字を組み合わせた呼称とした。

表土及び無遺物層は重機で除去し、遺物包含層の掘り下げは人力で行った。また、試掘調査では縄文時代早期より古い時期の文化層（Ⅸ層以下）の有無については不明のままだったので、適宜下層確認トレンチを設定して文化層の有無について調査した。調査の結果、縄文時代早期より古い時期の遺構・遺物は発見されなかったので、薩摩火山灰層（Ⅸ層）を基盤層として調査を実施した。

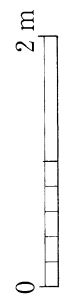
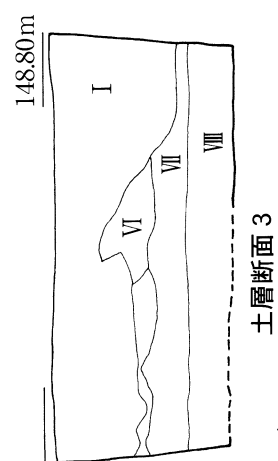
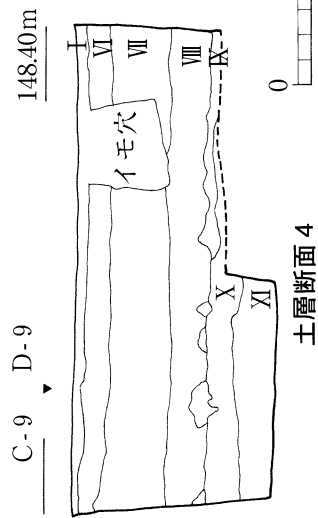
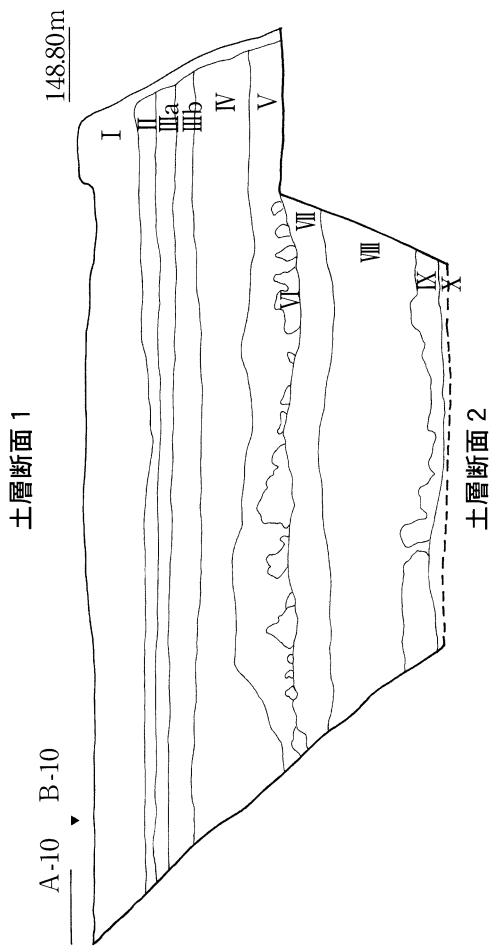
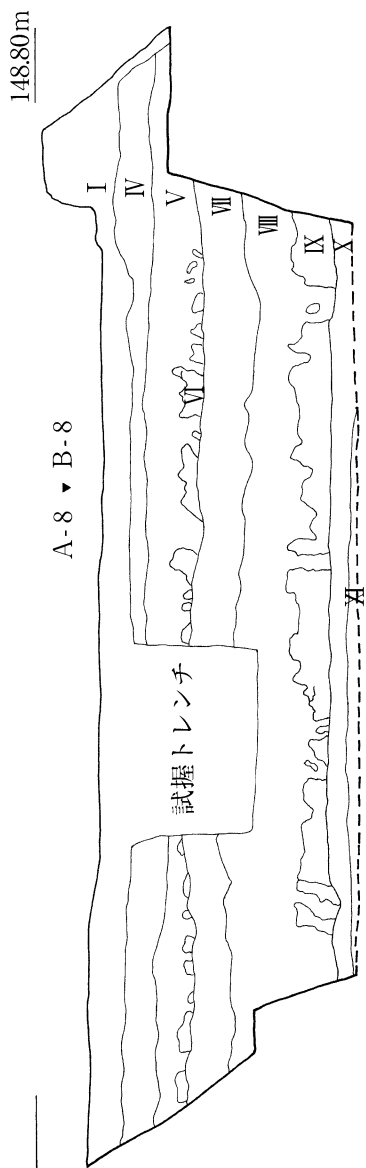


第2図 周辺地形図

第2節 遺跡の層位

本遺跡の層序及び遺物包含層・年代・文化との関係は下図の通りである。(▲は遺物包含層)

I層	黒褐色土	表土。現代の畑の耕作土。
▲II層	黒色土	古代の土師器の遺物包含層。遺物量は少量。
▲III層	暗褐色土	縄文時代晩期・弥生時代前期の遺物包含層。
▲IV層	黄橙色火山灰	黄橙色火山灰に10mm程度の黄白色パミスが含まれる。縄文時代前期・後期の遺物包含層。
▲V層	暗黄褐色土	縄文時代前期の遺物包含層。VI層の腐植土。
VI層	明黄橙色火山灰	約6,300年前のアカホヤ火山灰。無遺物層。
▲VII層	灰褐色土	縄文時代早期の遺物包含層。10mm程度の黄橙色のパミスを含む。遺物量は少なめ。
▲VIII層	暗褐色土	縄文時代早期の遺物包含層。10mm程度の黄橙色のパミスを含む。遺物量はやや多い。
IX層	黄褐色火山灰	約11,500年前のサツマ火山灰。
X層	黒褐色土	無遺物層。
XI層	黄灰色ローム	無遺物層。
XII層	黒褐色土	無遺物層。
XIII層	黄白色火山灰	約24,000年前のA T火山灰。



第3図 土層断面図

第4章 縄文時代の調査

第1節 調査の概要

本遺跡からは縄文時代早期・前期・後期・晩期の遺物が出土した。

早期は本遺跡の中心となる時期で、調査区のほぼ全域から遺物が出土した。遺物包含層はⅦ層・Ⅷ層であり、Ⅵ層のアカホヤ火山灰にパックされている状況だった。土器の出土点数は1,016点で、総重量は13kgを超えている。早期土器の出土点数は本遺跡から出土した縄文土器の59.4%に当たり、重量比では62%を占めている。早期の中葉から後葉にかけての複数の土器型式が出土した。土器型式が多岐にわたる反面、小さな破片の資料がほとんどであったために、完形品に復元できる資料は皆無であった。石器は石鏃や石匙などの剥片石器のほか、磨石や石皿も出土した。石器の組成比率では、石鏃及び石鏃未製品が大きな割合を占める一方で、石斧と石皿はわずか1点ずつしか出土しないという偏った組成である。詳細は後述するが、剥片石器の石材にチャートを用いている点が目される。また、特殊な遺物としては、塞ノ神式土器に伴う耳栓状土製品が1点出土した。遺構としては、8基の集石遺構が検出された。

前期の遺物は、Ⅳ層とⅤ層から出土した。遺物の分布はA-9区の一部に集中している。土器の点数はわずか52点（3%）で、総重量もわずか960g（4.6%）にすぎなかった。石器では磨石が1点出土しただけであった。遺構は検出されなかった。

表2 時期別の土器出土量

時期	早期	前期	後期	晩期	合計
点数	1,016	52	9	635	1,712
百分率 (%)	59.4	3.0	0.5	37.1	
重量 (g)	13,076	960	177	6,875	21,088
百分率 (%)	62.0	4.6	0.8	32.6	

表3 時期別の石器組成

器種	早期		前期		晩期		合計	
	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
石 鏃	12	13.2					12	13.2
石 鏃 未 製 品	8	28.5			1	2.91	9	31.41
石 匙	2	47.68					2	47.68
スクレーパー	1	9.49			1	65	2	74.49
石 斧	1	79			3	128	4	207
磨 石	5	2,116	1	1,180			6	3,296
石 皿	1	4,670					1	4,670
砥 石					1	80	1	80
剥 片 類	180	461.66					180	461.66
合 計	210	7,425.53	1	1,180	6	257.91	217	8,281.44

後期の遺物包含層はⅣ層である。遺物はA-9区とB-6区のごく限られた部分に集中して出土した。Ⅳ層からは沈線文を施した土器片がわずか9点出土しただけであった。縄文土器総数のわずか0.5%であり、重量比では0.8%を占めるにすぎない。石器は出土せず、遺構も検出されなかった。

晩期の遺物は、Ⅲ層の暗褐色土から出土した。Ⅲ層には晩期の遺物以外に少量の弥生時代の土器も含まれていた。Ⅲ層のほとんどは過去の畑地整備事業によって削平されていたが、A・B-9・10区では削平を免れた遺物包含層が残存しており、遺物のほとんどはこの調査区から出土した。土器の出土点数は635点で、縄文土器総数の37.1%を占め、重量比では32.6%となっている。この数値は早期土器に次ぐものだが、無文の胴部破片が大半を占めているために資料化できた点数は極めて少ない。石器では石斧破片3点、石鏃未製品1点などが出土しただけであった。

第2節 早期の遺構

8基の集石が検出された。集石は下部に掘り込みを持たないタイプ（1号、2号、3号、5号）と下部に掘り込みを持つタイプ（4号、6号、7号、8号）に大別できる。集石の分布状況を見ると1号だけが単独で存在し、それ以外は2～3基が隣接していることがわかる（第4図）。

1号集石（第5図）

C-9区とD-9区にまたがって単独で検出された。平面形は直径約1mのドーナツ状を呈し、礫の重なりはほとんどなく、平面的に広がっている。集石を構成する礫は15cm程度の大型のものが4点あるだけで、それ以外は10cm以下の小礫であった。集石を構成している礫には安山岩が多用されていた。炭化物の集中は認められなかった。

2号集石（第5図）

D-5区で検出された。3号集石とは約4m離れている。集石を構成する礫の個数はわずか16個で、一般的な集石よりは小型である。石材は角礫状の安山岩が主体である。東西に直線的に配置された礫の周辺に数個の礫が散在している状況で検出された。検出面では焼土や炭化物などは認められなかったが、炎熱によって赤色化した礫が数個認められた。Ⅷ層中位で検出されており、他の集石よりは時期的に新しい可能性がある。

3号集石（第5図）

D-4区で検出された。礫は60cm×40cmの楕円形の範囲に集中していた。角のない安山岩の礫によって構成されていた。集石を構成していた礫の大きさは、10cm～15cm程度の比較的大きなものであった。炭化物粒子が多く検出され、礫の一部には炎熱によって赤化したり、煤状の炭化物が付着したものが認められた。

4号集石（第6図）

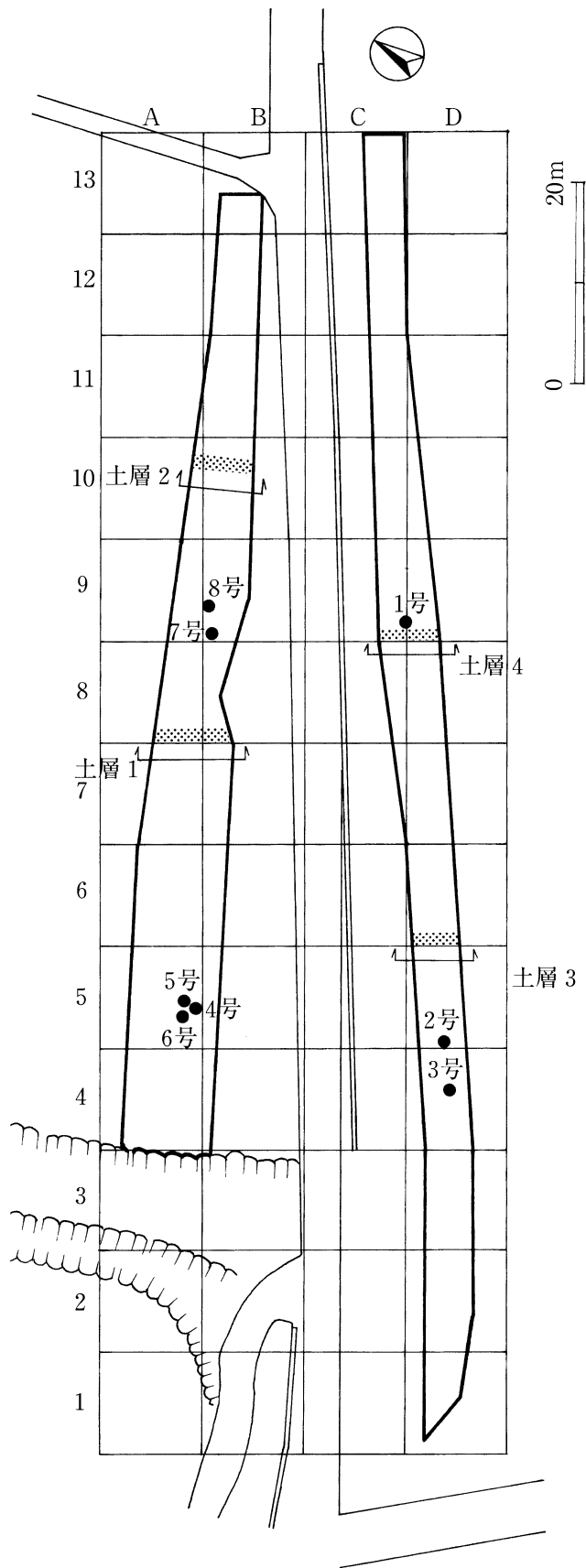
A-5区で、5号集石・6号集石と隣接して検出された。礫の集中部分は半円形を呈している。集石を構成する礫は安山岩の円礫が主体で、粘板岩が一部含まれていた。礫の大きさは10cm～15cmの大きさのものがほとんどだが、20cm程度の大きな礫が1点検出された。礫の集中部分の下部には、50cm×60cmの楕円形の掘り込みが存在する。掘り込みの深さは約14cmで、掘り込みの中にも礫が充填されていた。掘り込みの断面形状は丸底である。検出面では掘り込みのラインは確認できなかった。集石内から検出された炭化物の量はわずかだった。礫の中には赤色化したものが2点確認された。

5号集石 (第5図)

A-5区で4号・6号と隣接して検出された。検出面はⅧ層上面である。直径約1mの範囲に礫の集中が見られるが、分布は平面的で礫の重なりも見られず、かなりばらけた状況であった。集石を構成する礫の主体は安山岩の垂角礫であるが、一部に磨石状の扁平な円礫が見られた。炎熱によって変色した礫は認められなかったが、集石の中心部に5mm程度の大きな炭化物が粒子が検出された。下部に掘り込みは確認されない。

6号集石 (第6図)

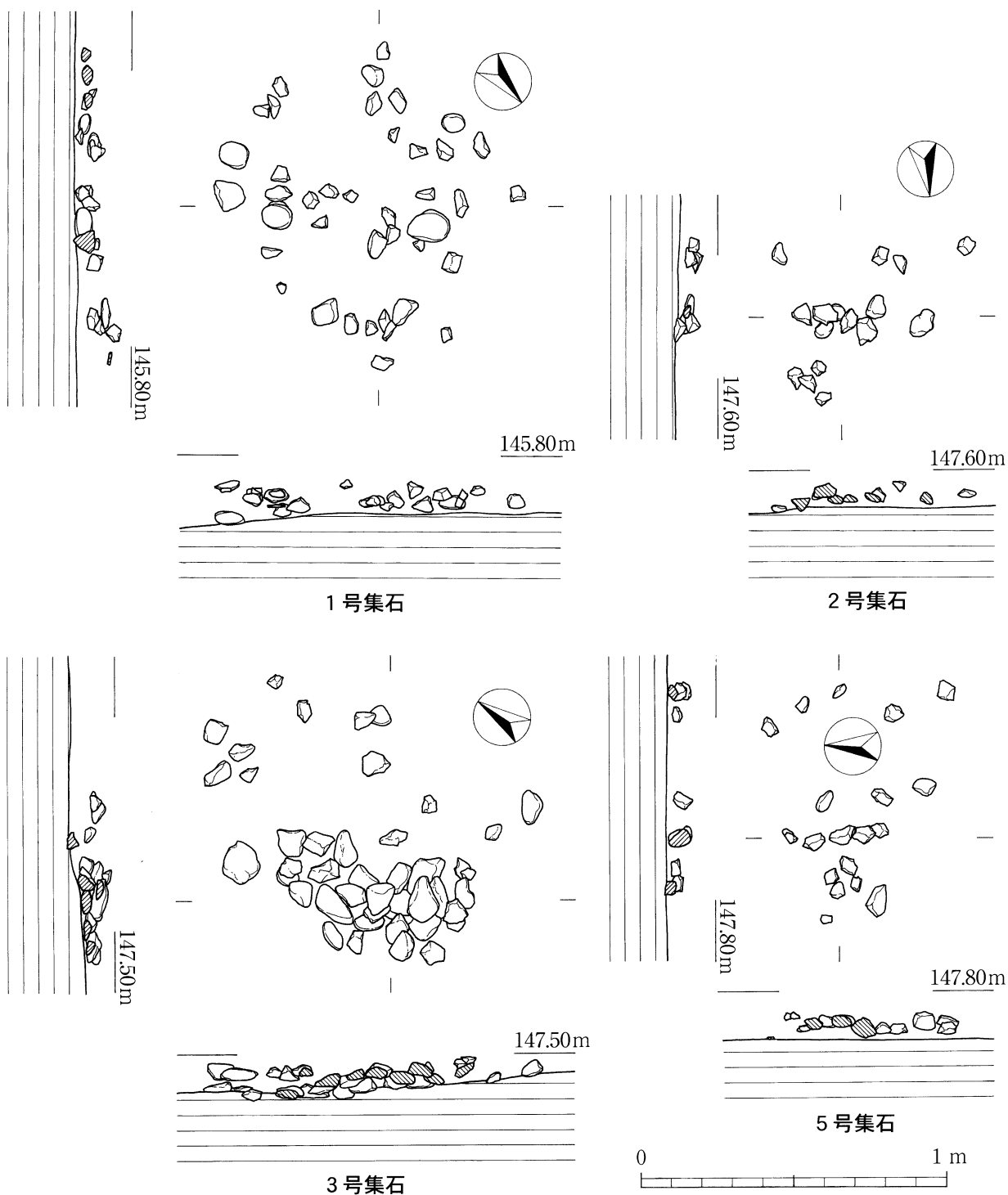
A-5区で4号・5号と隣接して検出された。検出面はⅦ層中位である。他の集石よりも若干新しい時期に属する可能性がある。60cm×50cmの範囲に礫が集中していた。礫の集中部分の下部には深さ9cm程度の浅い掘り込みが認められ、礫は2~3段位に重なっていた。大きさ10cm前後の安山岩の円礫が使用されている。部分的に炎熱により赤化した礫が認められるが、破碎された礫は認められなかった。掘り込みの埋土から炭化物粒子が集中して検出された。礫の集中部分の南側には7点の礫が散在して検出されたが、集石本体との関連は不明である。



第4図 グリッド配置図・集石位置図・土層断面位置図

7号集石（第6図）

B-9区で8号集石と約3m離れて検出された。50cm×60cmの範囲に礫が集中する。礫の集中部分の下部には直径50cm、深さ16cmの掘り込みが確認され、掘り込みの中からも重層的に礫が検出された。大きき10cm前後の安山岩礫が主体であるが、砂岩の石皿や磨石が集石を構成する礫として利用されていた。炭化物はさほど顕著に認められなかった。集石中心部の下部からは炎熱によって赤変した礫が多く出土した。また、集石内から楕円押型文土器の破片が1点出土した。

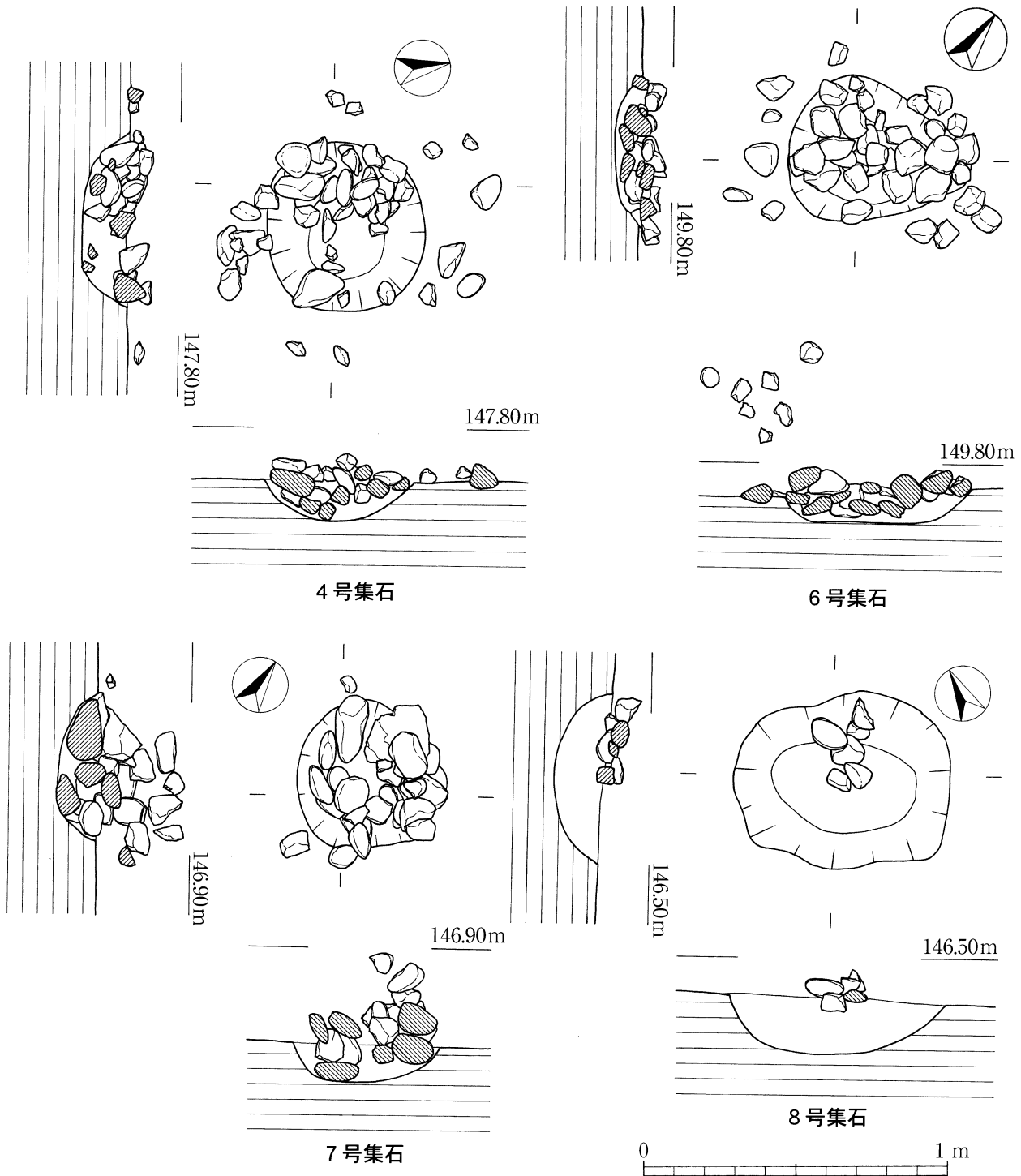


3号集石

第5図 集石（掘り込みのない集石）

8号集石 (第6図)

B-9区で7号集石に隣接して検出された。検出面はⅧ層中位である。10cm前後の安山岩の円礫8点で構成される小さな集石である。礫は炎熱により赤変していた。下部に60cm×70cmのほぼ楕円形の掘り込みが確認された。掘り込みの床面から浮いた状態で礫が検出されたことから、集石と掘り込みは別の遺構である可能性が大きい。掘り込みの深さは約20cmで、埋土は黒褐色を呈し、1~2cm程度の炭化物のかたまりが多く認められた。



第6図 集石 (掘り込みのある集石)

集石内の出土遺物（第7図1・2，第14図42）

7号集石内から磨石，石皿，土器片が出土した。このほかにも顕著な磨面は認められないが磨石に類似した扁平な安山岩礫4点が出土している。

1は安山岩の磨石である。片面のみを使用している。2は砂岩の石皿である。片面に顕著な磨面が確認される。炎熱により赤変し，周縁部に欠損が認められる。熱破碎による可能性が大きい。

42は楕円押型文土器の口縁部である。集石の礫に載った状況で検出された。口径が約27cmの深鉢型の土器である。内面上部，外面，口唇部に楕円形の押型文が施されている。押型の大きさは3.5mm×2mm程度。色調は暗褐色を呈し，胎土に金雲母と多量の白色の砂粒が含まれる。

第3節 早期の出土遺物

遺物はⅦ層とⅧ層から出土した。Ⅶ層から出土した遺物は少なく，遺物包含層の中心はⅧ層である。

同一型式の土器が両層にまたがって出土しており，土器を層位ごとに分類することにさほど意味はないと思われたので，層位に関係なく一括して取り扱った。早期前葉末から早期後葉にわたる複数の型式の土器が少量ずつ出土している。点数的に最も多かったのは押型文土器である。出土土器の総数は1,016点，総重量は13,076gであった。

石器では石鏃，石匙，磨石などが出土しているが点数的には少ない。土器型式が複数にわたるために土器と石器の相関関係を捉えることは不可能であり，これらの石器も一括して取り扱った。

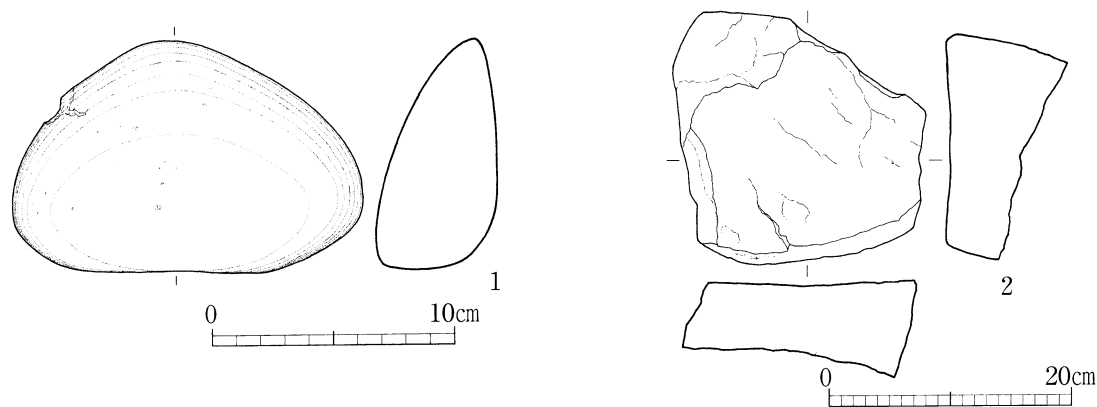
出土遺物の分布状況を見ると，8区～9区にかけた部分に遺物の集中が認められる（第8図）。

(1) 土器

土器は既存の土器型式を目安に，器形と文様によって次の1類～12類に分類した。これら以外に小破片のために分類不能な資料が277点出土している。

1類土器—円筒形の深鉢形を基本とする土器である。文様の基本は貝殻による施文であるが，クシ状工具による貝殻施文類似の土器もここで取り扱った。出土点数は39点で，早期土器の3.8%を占める。1a類～1e類に細分した。

2類土器—中原式土器と呼ばれる円筒形の深鉢形土器である。出土点数はわずか6点で，早期土器の0.6%を占める。



第7図 集石内の出土遺物

- 3類土器－器面全体に縄文を施した型式名不明の土器である。出土点数は37点で、早期土器の3.6%を占める。
- 4類土器－押型文土器である。押型文の種類により4 a類～4 c類に細分した。出土点数は383点で、早期土器の38%を占める。
- 5類土器－妙見式土器である。縄文が地文であり、突帯を貼付する深鉢形土器である。出土点数は51点で、早期土器の4.9%を占める。
- 6類土器－平椀式土器である。沈線文、刺突文、貼り付け突帯を基本とする土器である。器種には深鉢と壺形の2種が確認された。出土点数は86点で、早期土器の8.5%を占める。
- 7類土器－手向山式土器である。出土点数は57点で、早期土器の5.6%を占める。施文具が多岐にわたる深鉢形土器である。施文具の種類により7 a類～7 f類に細分した。
- 8類土器－塞ノ神A a式土器である。沈線文、網目状撚糸文、微隆起突帯を貼付するラップ状口縁の深鉢形土器が主である。深鉢形土器のほかに壺形土器の破片が1点出土した。出土点数は27点で、早期土器の2.6%を占める。
- 9類土器－塞ノ神B c式土器である。出土点数は18点で、早期土器の1.8%を占める。
- 10類土器－細沈線文を施す型式名不明の土器である。器形は9類土器と類似するが、施文具に貝殻を多用する。出土点数は5点出土で、早期土器の0.5%を占める。
- 11類土器－短沈線を羽状に施す土器である。出土点数はわずか3点で、早期土器の0.3%を占める。
- 12類土器－無文の胴部破片である。ハケあるいは草茎状の工具による調整が特徴的なものだけを抽出した。出土点数は7点で、早期土器の0.7%を占める。

表4 早期土器の類別組成

類別	1 a	1 b	1 c	1 d	1 e	1類小計	2	3 a	3 b	3 c	3類小計
点数	18	3	10	6	2	39	6	13	20	4	37
百分率 (%)	1.8	0.3	1.0	0.6	0.2	3.8	0.6	1.3	1.9	0.4	3.6
重量 (g)	298	95	282	68	38	781	87	347	521	38	906
百分率 (%)	2.3	0.7	2.1	0.5	0.3	5.9	0.4	2.6	4.0	0.3	6.9

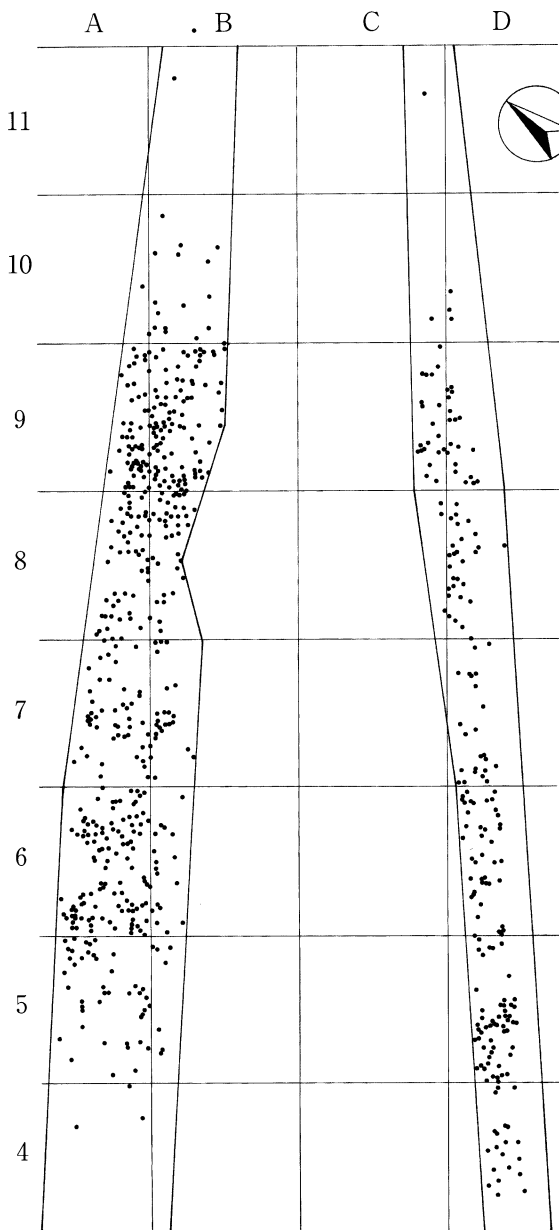
類別	4 a	4 b	4 c	4類小計	5	6	7 a	7 b	7 c	7 d	7 e
点数	287	95	1	383	51	86	6	21	6	4	3
百分率 (%)	28.3	9.4	0.1	38.0	4.9	8.5	0.6	2.0	0.6	0.4	0.3
重量 (g)	4357	1245	38	5640	1133	885	75	463	115	69	42
百分率 (%)	33.3	9.5	0.3	43.1	8.7	6.8	0.6	3.5	0.9	0.5	0.3

類別	7 f	7類小計	8 a	8 b	8類小計	9	10	11	12	その他	合計
点数	17	57	26	1	27	18	5	3	7	277	1016
百分率 (%)	1.7	5.6	2.5	0.1	2.6	1.8	0.5	0.3	0.7	27.3	
重量 (g)	310	1074	288	17	305	278	102	15	198	1672	13076
百分率 (%)	2.4	8.2	2.2	0.1	2.3	2.1	0.8	0.1	1.5	12.8	

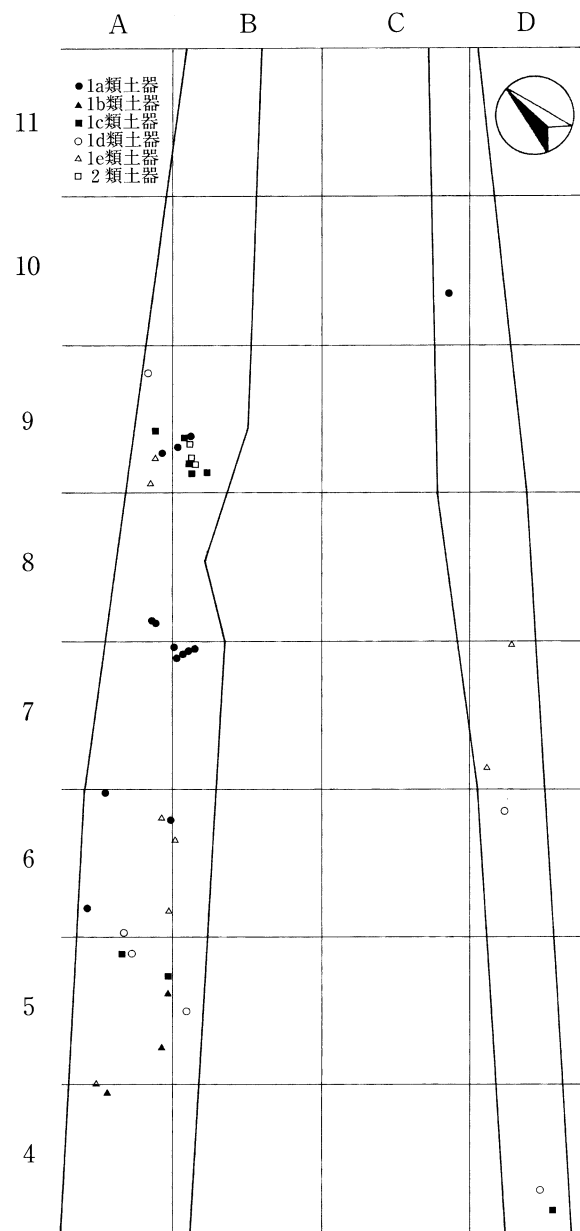
1 類土器 (第9図, 第10図 3~16)

円筒形の貝殻文(類似したクシ状工具施文)土器を一括した。小破片が多く、器形の全容がわかる資料は出土していない。資料数は少ないが、複数の土器型式が含まれているので、本来は個別に類別すべきだが、1類1点となるような煩雑さを避けるために、便宜的に1a類から1e類に細分した。

1a類としたものは18点で、4点(3~6)を図示した。主にA-9区とB-7区で出土した。いずれも器形の全容が不明な小破片ばかりで、複数の土器型式が含まれる可能性がある。3は外面に横方向の貝殻条痕を施す。口唇部は平坦で外傾する。内面は丁寧なヘラナデ調整である。4・6は貝殻ではなく、草茎状工具による条痕である可能性が大きい。内面調整はヘラナデもしくはケズ



第8図 早期土器の分布 (S=1/500)



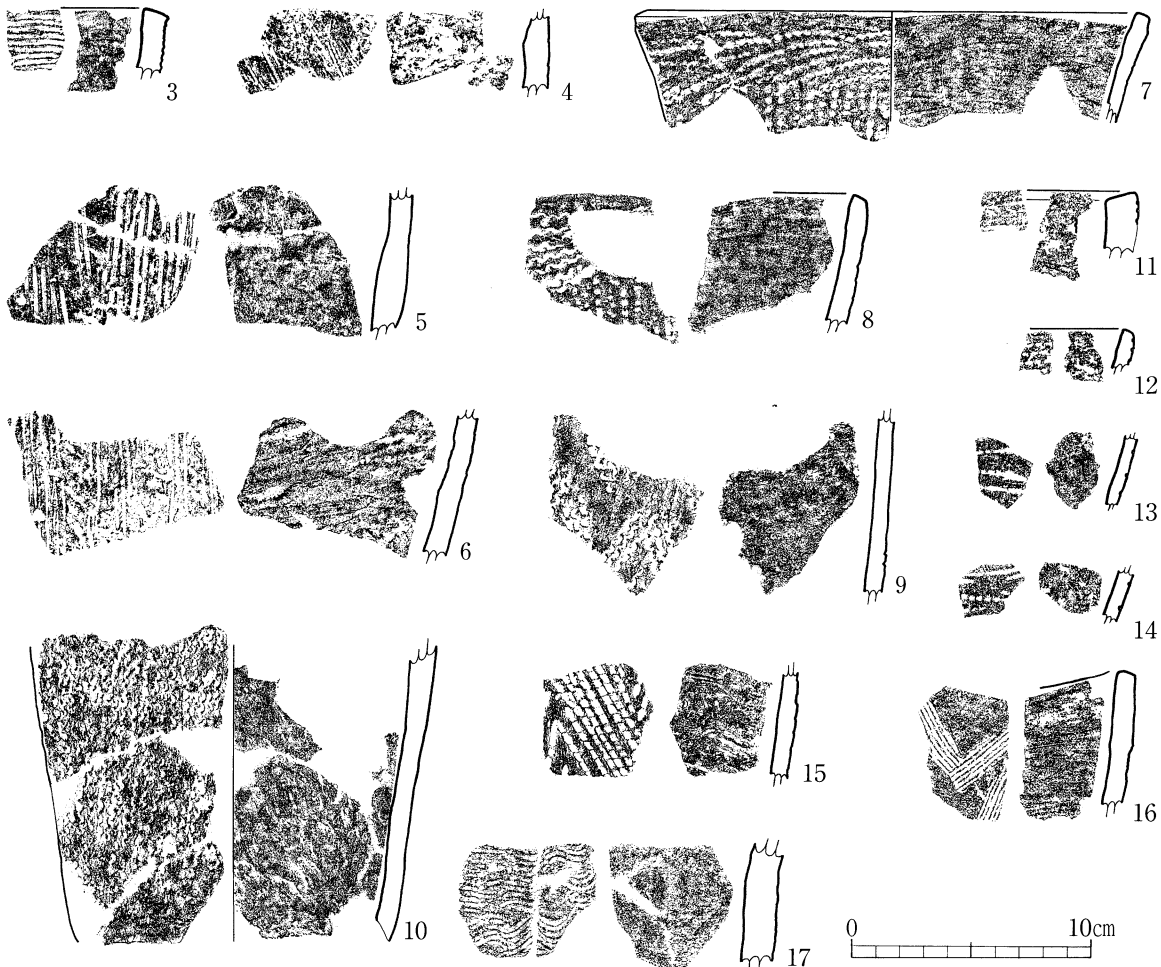
第9図 1類土器・2類土器の分布 (S=1/500)

り調整で、外面の条痕は整然としていない。5は縦方向に貝殻条痕を施す。内外面ともヘラナデによって器面調整されている。貝殻条痕を縦方向に施すのは、円筒形貝殻文土器である石坂式土器の一部に見られる特徴である。

1 b類としたものは3点で、2点(7・8)を図示した。石坂式土器の範疇に含まれる。出土した3点ともA-4区とA-5区のⅧ層から隣接して出土し、文様構成や胎土が共通することから同一個体であると思われる。7は口径22cmの円筒形の深鉢型土器である。口縁直下に左下がりの貝殻腹縁刺突文を複数段施し、胴部にはクシ状工具による縦方向の刺突文を縦方向に連続して施す。

1 c類としたものは10点で、接合した結果、資料数は6点となり、2点(9・10)を図示した。B-9区に集中して出土しているが、これらは同一個体である10の破片の分布状況である。9は貝殻腹縁刺突文を山形に連続して施している。10は5点の破片が接合したものである。内外面ともヘラケズリ後ナデ調整を行っているが、外面は凹凸がかなり目立つ粗雑な調整である。外面には貝殻腹縁刺突文を縦位に連続して施す。口縁部は出土していないが、円筒形の石坂式系統の土器であると思われる。

1 d類としたものは6点で、接合した結果、資料数は5点(11~15)となり、すべてを図示した。早期の土器の中から抽出できたのは、わずかにこれらの5点だけである。口縁部と胴部の破片だけで器形の全容は不明だが、同種土器の出土例から下剥峰式土器と呼ばれるバケツ状の深鉢形土器であ



第10図 1類土器・2類土器

ると考えられる。文様の特徴はクシ状工具による刺突文を羽状に施す点であり、胎土の中に金色の雲母を混入するものが多いようである。A・B-5・6区を中心に出土した。11は口縁部である。内傾する平坦な口唇部も下剥峰式土器によく見られる特徴の一つである。11の外面にはクシ状工具による刺突文が横位に施される。12~14は同一個体である可能性が高い。器壁が薄いのが特徴であり、3点とも6mm程度の厚さしかない。15は先の4点とはやや趣が異なり、大きなクシ状工具を山形に刺突する。施文手法としては1c類の9に類似する。

1e類として抽出できたのは2点だが、1点(16)だけを図示した。クシ状工具による条痕を施すのが特徴で、桑ノ丸式土器に比定できる。口縁部は平坦ではなく、山形となるようである。これまでの出土例では、条痕を羽状に施すものが多く見られるが、本資料ではいくぶん不規則な施文となっている。

2類土器(第9図, 第10図17)

2類は中九州地方に分布の中心がある中原式土器である。器形は円筒形の深鉢となる。文様の特徴は口縁部に集中して施される直線的あるいは波状の条痕文である。数数で6点を抽出したが、資料として提示できる大きさのものは17の1点だけであった。17は口縁部に近い破片で、波状の条痕文が数段にわたって施される。胎土に石英、長石、角閃石を含む。特に透明な鉱物である石英や長石を多量に混入するのが特徴で、風化した表面はかなりざらついている。

表5 土器観察表1(早期1類・2類)

△少量 ○普通 ◎多量

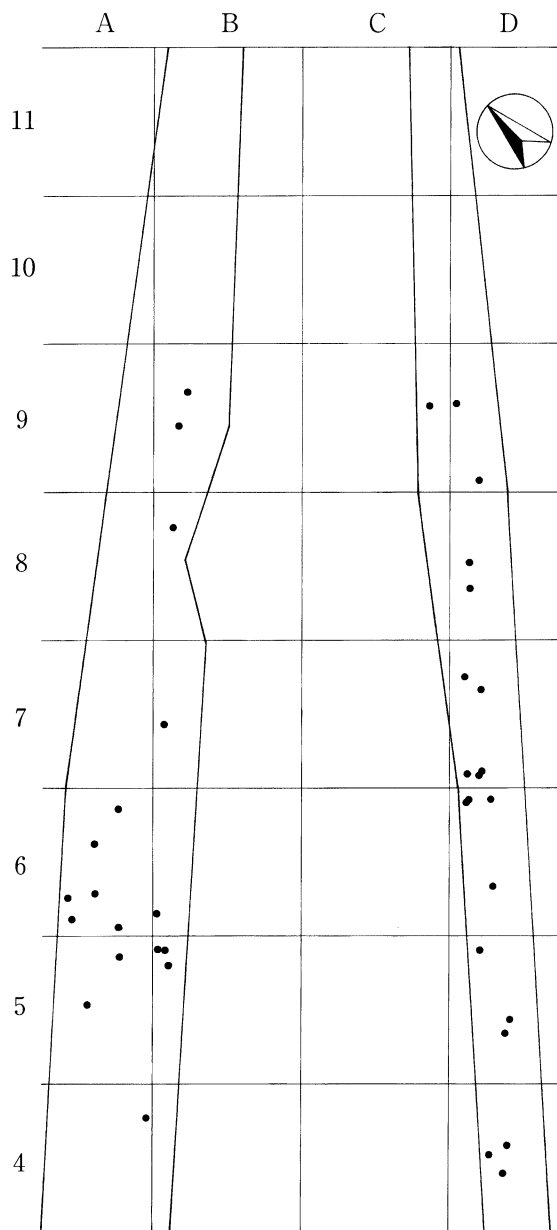
挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考		
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫	
第 10 図	3	1a		口縁部	深鉢	A-6	1356	Ⅶ	147.79	良好	内・ヘラナデ 外・貝殻条痕	淡黄褐色 淡黄褐色	○				○		口唇部が外傾	
	4	1a		胴部	深鉢	B-7	1108	Ⅶ	147.19	良好	内・ケズリ 外・草茎状工具条痕	暗黄褐色 暗黄褐色					○	○		
	5	1a		胴部	深鉢	無し	無し	表		良好	内・ヘラナデ 外・貝殻条痕	茶褐色 茶褐色	○	○	○					
	6	1a		胴部	深鉢	B-7	1191	Ⅷ	147.1	良好	内・ヘラナデ 外・草茎状工具条痕	暗褐色 暗褐色		○		○	○			
	7	1b	石坂	口縁部	深鉢	A-5 A-4	1037 1302	Ⅷ Ⅷ	147.64 147.49	良好	内・工具ナデ 外・貝殻刺突文	黒褐色 黒褐色	○	○	○	△	○		8と同一個体。 口径22cm	
	8	1b	石坂	口縁部	深鉢	A-5	1065	Ⅷ	147.62	良好	内・工具ナデ 外・貝殻刺突文	暗褐色 暗褐色	○	○	○	△	○		7と同一個体	
	9	1c	石坂系	胴部	深鉢	A-5	1375	Ⅷ	147.41	良好	内・ケズリ後ナデ 外・貝殻腹縁刺突線	暗褐色 暗褐色	○	○	○		○			
	10	1c	石坂系	胴部	深鉢	B-9 A-9 B-9 B-9 B-9	1233 1278 1436 1292 1434	Ⅷ Ⅷ Ⅷ Ⅷ Ⅷ	147.87 146.6 146.57 146.62 146.78		良好	内・ケズリ後ナデ 外・貝殻腹縁刺突線	暗褐色 暗褐色	○	○	○		○		器面調整が粗雑 で表面の凹凸が 顕著
	11	1d	下剥峰	口縁部	深鉢	B-8	122	Ⅲ	147.7	良好	内・ナデ 外・クシ状工具刺突	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○		○	○			
	12	1d	下剥峰	口縁部	深鉢	D-6	671	Ⅶ	147.55	良好	内・ケズリ 外・クシ状工具刺突	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○		○	○			
	13	1d	下剥峰	胴部	深鉢	A-6 B-5	1365 1063	Ⅶ Ⅷ	147.69 147.67	良好	内・ケズリ 外・クシ状工具刺突	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○		○	○			
	14	1d	下剥峰	胴部	深鉢	A-5	1374	Ⅷ	147.41	良好	内・ケズリ 外・クシ状工具刺突	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○		○	○			
	15	1d	下剥峰	胴部	深鉢	D-4	781	Ⅷ	147.53	良好	内・ナデ 外・クシ状工具刺突	暗褐色 淡赤褐色	○	○	○					
	16	1e	桑ノ丸	口縁部	深鉢	A-6	1319	Ⅷ	147.28	良好	内・ケズ 外・クシ状工具条痕	淡赤褐色 淡茶褐色	○	○	○			◎		
	17	2	中原	胴部	深鉢	B-6	1315	Ⅷ	147.29	不良	内・摩滅 外・曲線的条痕	黄灰色 灰色	◎	◎	○					

3 類土器 (第12図18~39)

器面全体に縄文を施した土器である。器形の全容が分かる資料は出土していない。出土資料からは、口縁部が外反し、頸部は幾分締まるが、胴部の張りは小さい深鉢形の器形が想定される。胎土に石英、長石、角閃石を含むものが多いが、他類に一般的に混入されている金雲母や白色の砂を含んでいるものが少ない点が特徴的である。3 類土器として抽出できたのは37点であるが、資料が小破片のために後述する5 類や6 類と混交している可能性もある。分布の中心はA・B-5・6区とC・D-7~8区である。施文具と文様により3 a 類~3 c 類に細分した。細分類したそれぞれの個体数は少なく、各類せいぜい2~3 個体であると思われる。

3 a 類として抽出したのは14点である。A・B-5・6区を中心に分布する。14点のうち9点を図示した。3 a 類の特徴は、器面全体に太い縄文を施す点である。縄文の間が密着していることから、太い紐を巻き付けた棒状の施文具を土器表面に転がしたものと思われる。18は外反する口縁部である。内面調整はナデ調整で、太い縄文が外面と口唇部に施される。縄の繊維は粗く、繊維の筋が器面で観察できる。19~22は、文様・胎土・色調から判断して同一個体だと思われる。22は頸部から胴部にかけての大きな破片である。内面下半はヘラケズリ調整で、頸部から上はヘラナデ調整である。23はやや太めの縄文を押捺するように施すものである。他の個体に比べて器壁は薄く調整されている。24も外面に太めの縄文を押捺するように施す。内面調整はケズリで、ヘラによる擦痕が残されている。25は頸部付近の破片である。

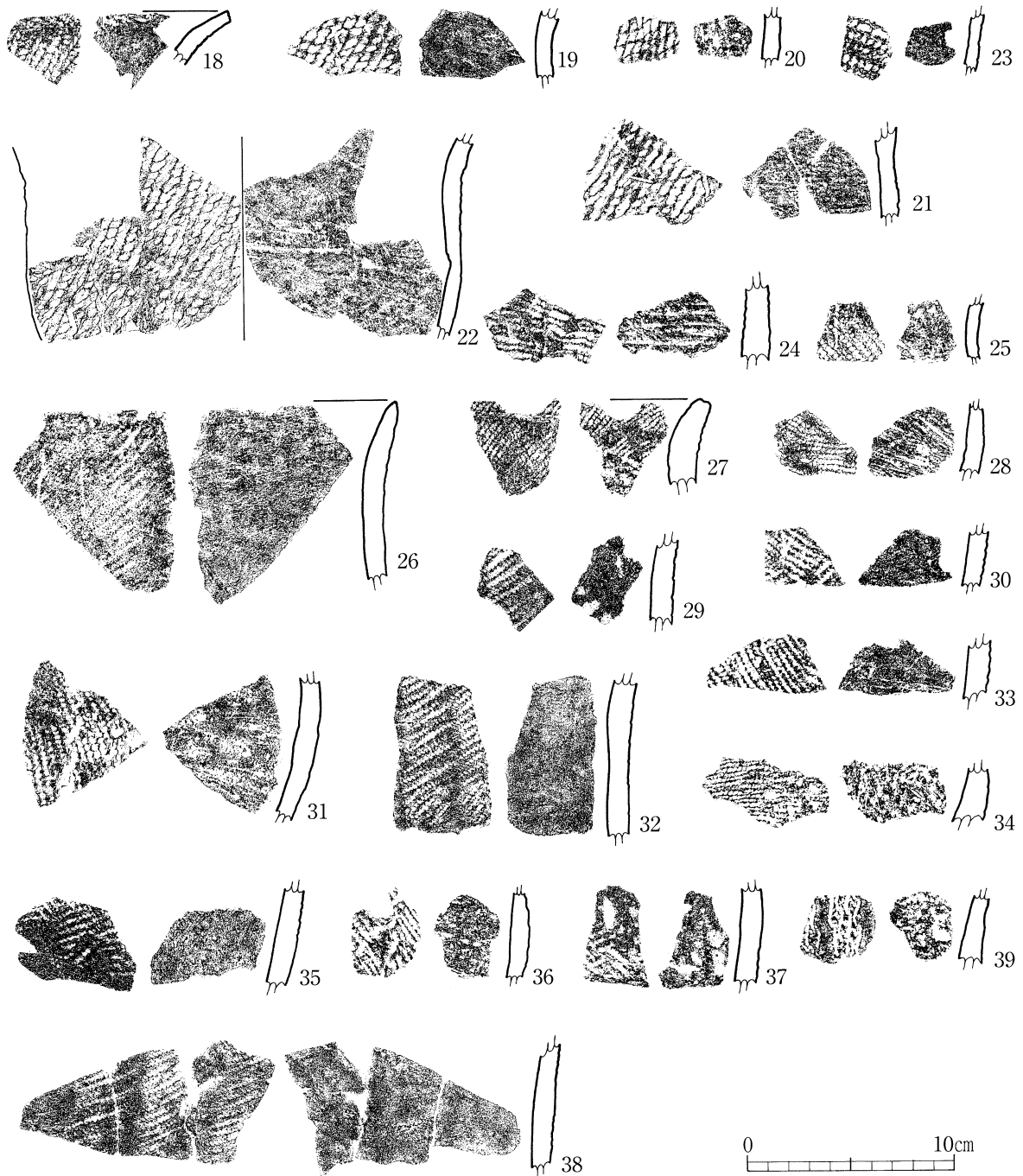
3 b 類は3 a 類に比較して細めの縄文を施すものを抽出した。3 b 類としたのは20点で、接合の結果、資料数は18点となり、そのうち13点(26~38)を図示した。3 b 類はD-6~9区に分布している。26は口縁部から頸部にかけての資料である。器壁が荒れているために、縄文であるかどうか確実性に欠けるが、3 類土器として取り上げておく。内面は工具ナデにより丁寧に仕上げられている。胎土に多量の砂を混入しているのが他の個体と異なっている。27は内外面と口唇部に縄文を施す口縁部破片である。内面調整はヘラケズリで、その後に縄文を施している。胎土に金色の雲母と白色の砂を混入している点がある。31は斜めに縄文を施した後に、縦方向の捺糸文を



第11図 3 類土器の分布状況 (S=1/500)

押捺する二重施文となっている。29, 32, 35, 38は文様・胎土・色調から同一個体だと判断される。これらの資料はD-7区で出土した。32は斜めの縄文を縦に2列施文している。施文原体である縄文の長さは約3cmである。内面はナデにより丁寧に調整されている。34は底部に近い胴部破片である。横方向の縄文を施している。内面はヘラケズリ調整で、外面は一部剥落している。

3c類として抽出したのは、39の1点だけである。変形撚糸文を施す資料である。縄文を施すという3類全体の概念からは外れるが、ここで取り扱うこととした。焼成は不良で、器壁全体がもろくなっている。内面はヘラケズリ調整である。胎土に石英・長石・角閃石を混入せず、金雲母と白色の砂を混入するのが特徴である。



第12図 3類土器

4 類土器 (第13図, 第14図40~61, 第15図62~94, 第16図95~109, 第17図110~144)

4 類土器は押型文土器である。出土した早期土器1,016点のうち383点が押型文土器であり, 早期土器の約38%を占める。分布状況をみると, A・B-8・9区に集中が見られる。押型文の種類により4 a類~4 c類の3つに細分した。

4 a類は楕円押型文土器である。抽出できたのは総数287点で, 接合後の結果, 資料数は271点となり, 70点(40~109)を図示した。器形の全容がわかる資料は出土していないが, 口縁部が外反し, 頸部がやや締まり, 胴部が小さく張る平底の器形が想定される。通常みられる石英, 長石, 角閃石以外に金雲母と白色の砂粒を胎土に混入することが特徴である。器面に施された押型文を観察すると, 土器ごとに異なる大きさの施文具が用いられていることがわかる。楕円の一番小さなものは53に施された3.5mm×2mm程度のもので, 一番大きなものは101に施された8mm×3mm程度のものである。

表6 土器観察表2 (早期3類)

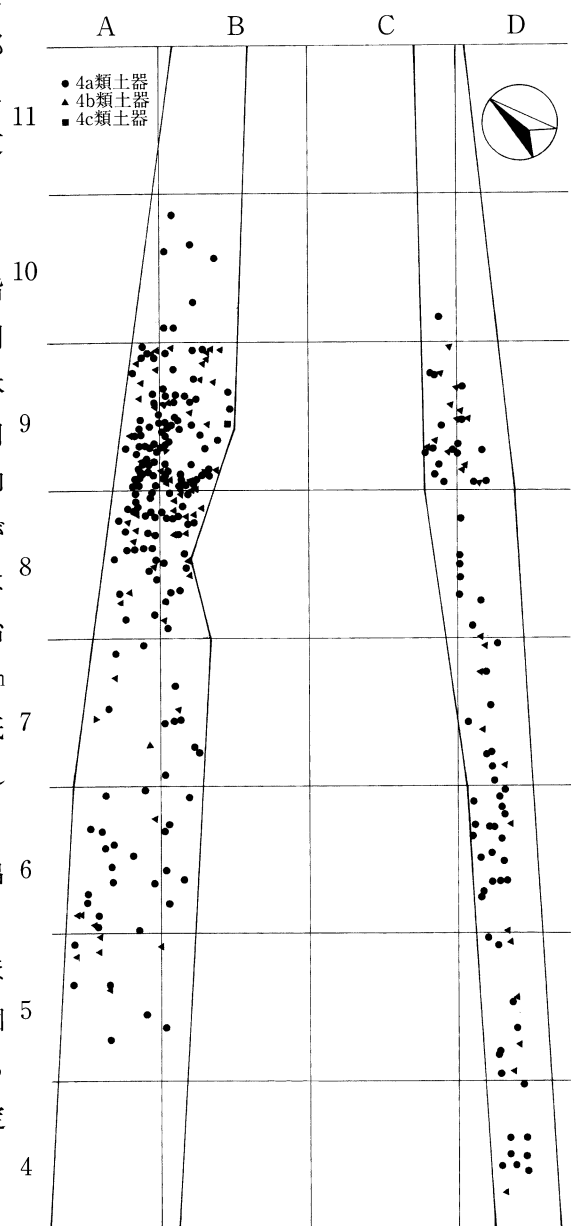
△少量 ○普通 ◎多量

挿 図 番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土						備 考		
												石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂	砂 礫			
第 12 図	18	3a	縄文	口縁部	深鉢	A-7	1381	Ⅷ	146.94	良好	内・ナデ 外・太い縄文	淡黄灰色 淡黄灰色	○	○	○				口唇部平坦面にも縄文有	
	19	3a	縄文	頸部	深鉢	A-6	1367	Ⅷ	147.49	良好	内・ヘラナデ 外・太い縄文	茶褐色 暗茶褐色	○	○	○				19, 20, 21, 22 は道一一体	
	20	3a	縄文	胴部	深鉢	D-4	777	Ⅷ	147.64	不良	内・ケズリ 外・太い縄文	黒褐色 淡黄褐色	○	○	○	○				
	21	3a	縄文	胴部	深鉢	B-5	1075	Ⅷ	147.6	不良	内・ケズリ 外・太い縄文	淡黄褐色 黒褐色	○	○	○				19, 20, 21, 22 は同一個体	
	22	3a	縄文	頸・胴部	深鉢	A-5 B-7	918 1099	Ⅶ Ⅷ	147.7 147.27	良好	内・ケズリ 外・太い縄文	赤褐色 暗褐色	○	○	○				19, 20, 21, 22 は同一個体	
	23	3a	縄文	胴部	深鉢	A-6	1357	Ⅶ	147.95	良好	内・工具ナデ 外・太い縄文	黄褐色 黄褐色	○	○	○					
	24	3a	縄文	胴部	深鉢	D-4	796	Ⅷ	147.5	良好	内・ケズリ 外・太い縄文	灰褐色 淡茶褐色	○	○	○					
	25	3a	縄文	頸部	深鉢	B-6	1310	Ⅶ	147.5	良好	内・ナデ 外・太い縄文	黒褐色 淡茶褐色	○	○	○					
	26	3b	縄文	口縁部	深鉢	D-5	730	Ⅶ	147.53	不良	内・工具ナデ 外・縄文(摩滅)	淡茶褐色 暗褐色	○	○	○			◎	表面の摩滅著しい	
	27	3b	縄文	口縁部	深鉢	B-8	1124	Ⅷ	146.95	良好	内・ケズリ後縄文 外・縄文	暗褐色 黒褐色	○	○	○	○	○			口唇部にも縄文
	28	3b	縄文	胴部	深鉢	A-6	1510	Ⅷ	146.95	良好	内・ケズリ 外・細い縄文	茶褐色 暗褐色	○	○	○	○				
	29	3b	縄文	頸部	深鉢	D-7	664	Ⅷ	147.28	良好	内・丁寧なナデ 外・縄文	淡黄褐色 黄灰色	○	○	○					29, 32, 35, 38 と同一個体
	30	3b	縄文	胴部	深鉢	D-6	696	Ⅶ	147.68	良好	内・ナデ 外・縄文	黄褐色 黄褐色	○	○	○					
	31	3b	縄文	胴部	深鉢	A-6	1358	Ⅷ	147.61	良好	内・工具ナデ 外・縄文	黄褐色 灰黄色	○	○	○					
	32	3b	縄文	胴部	深鉢	D-7	656	Ⅷ	147.19	良好	内・丁寧なナデ 外・縄文	灰褐色 灰褐色	○	○	○					29, 32, 35, 38 と同一個体
	33	3b	縄文	胴部	深鉢	C-9	30	Ⅶ	145.86	良好	内・丁寧なナデ 外・縄文	黄灰色 淡黄灰色	○	○	○					
	34	3b	縄文	胴部	深鉢	D-8	613	Ⅶ	147.09	良好	内・ケズリ 外・縄文	灰褐色 赤褐色	○	○	○		○			
	35	3b	縄文	胴部	深鉢	D-7	644	Ⅷ	147.23	良好	内・ナデ 外・縄文	淡黄褐色 灰黄色	○	○	○					29, 32, 35, 38 と同一個体
	36	3b	縄文	胴部	深鉢	B-9	1249	Ⅷ	146.79	不良	内・ナデ 外・縄文	褐色 暗褐色	○	○	○				小 礫	
37	3b	縄文	胴部	深鉢	D-6	668	Ⅷ	147.43	良好	内・ナデ 外・縄文	灰黄褐色 灰黄褐色	○	○	○						
38	3b	縄文	胴部	深鉢	A-5 D-7 D-7	1052 643 655	Ⅷ Ⅷ Ⅷ	147.57 147 147.17	良好	内・丁寧なナデ 外・縄文	暗褐色 暗褐色	○	○	○					29, 32, 35, 38 と同一個体	
39	3c	縄文	胴部	深鉢	D-5	787	Ⅷ	147.41	不良	内・ケズリ 外・変形撚糸文	黄褐色 茶褐色				○	○				

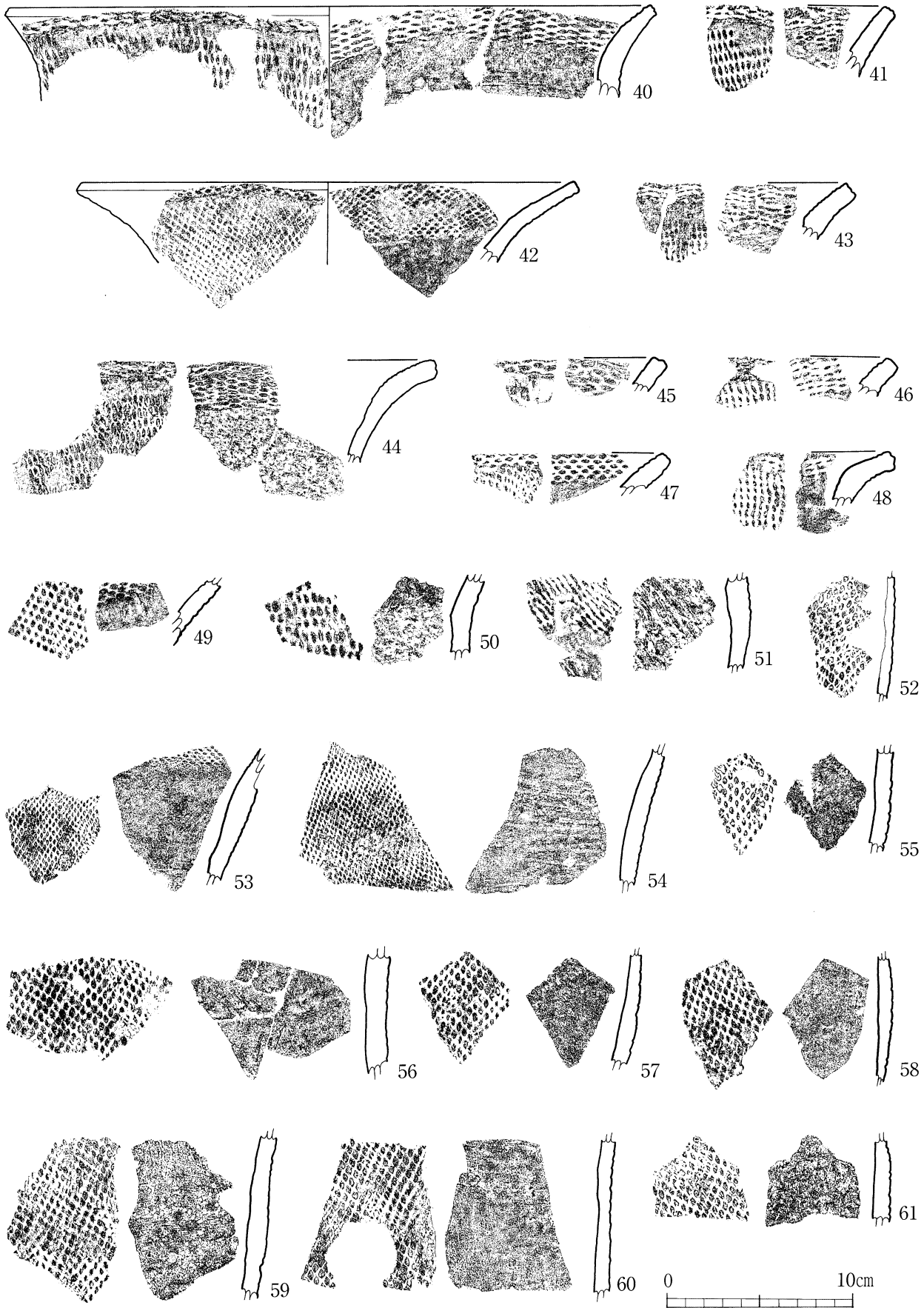
40～48は口縁部である。内面上位には横方向に、外面には縦方向に押型文が施文される。口唇部にも押型を転がすのが通例である。40はA - 8区から出土した3点が接合したものである。やや外反する口縁部で、復元口径は約35cmとなっている。内面はナデ調整後に押型文を施文する。胎土には白色の砂が多量に混入される。41の胎土には金雲母と白色の砂が混入される。42は7号集石内から出土したものである。43と44は内面にヘラケズリ調整後押型文を施文する。48は端部が大きく屈曲する口縁部である。49は口縁端部が欠損したもので、内面上位に押型文が施文されている。50と51は頸部付近の破片である。内面下半はヘラケズリ調整である。51の押型文は幅が狭く、押型文同士が一部でつながっている。52は浅い押型文である。内面は剥落している。53と54はD - 4区か出土した。文様、胎土、色調から同一個体であると判断される。押型文の楕円の大きさは3.5mm×2mm程度と非常に小さく、施文は整然としている。53は口縁部から頸部にかけての資料である。内面には、丁寧なナデ調整後に押型文が施される。55～61は胴部破片である。押型文の大きさは、5mm×3mm前後の標準的なものである。内面は工具ナデまたはナデ調整される。62はB - 9区から出土した5点が接合したものである。内面は指ナデ調整で、外面には押型文が施文される。器壁の剥落が著しい。65～67は文様、胎土、色調から同一個体であると判断される。押型文は整然としており、楕円よりも菱形に近いために網目状の捺糸文のような印象を受ける。88, 90, 92, 95, 96は個別の押型文が細長く、一部でつながってしまっている。97～99では押型文がつぶれてしまっている。101と104は文様、胎土、色調から同一個体だと判断される。押型文は8mm×3mmと出土資料中では最大である。107～109は底部資料である。底部付近では押型文が斜めに施文される傾向にある。

4b類は山形押型文土器である。4b類として抽出した総数は95点で、接合の結果、資料数は93点となり、34点(110～143)を図示した。分布状況は4a類とほぼ同様である。胎土に金雲母と白色の砂を混入する個体が多いのは4a類と共通する。器形の全容がわかる資料は出土していないが、4a類と同様な器形が想定される。

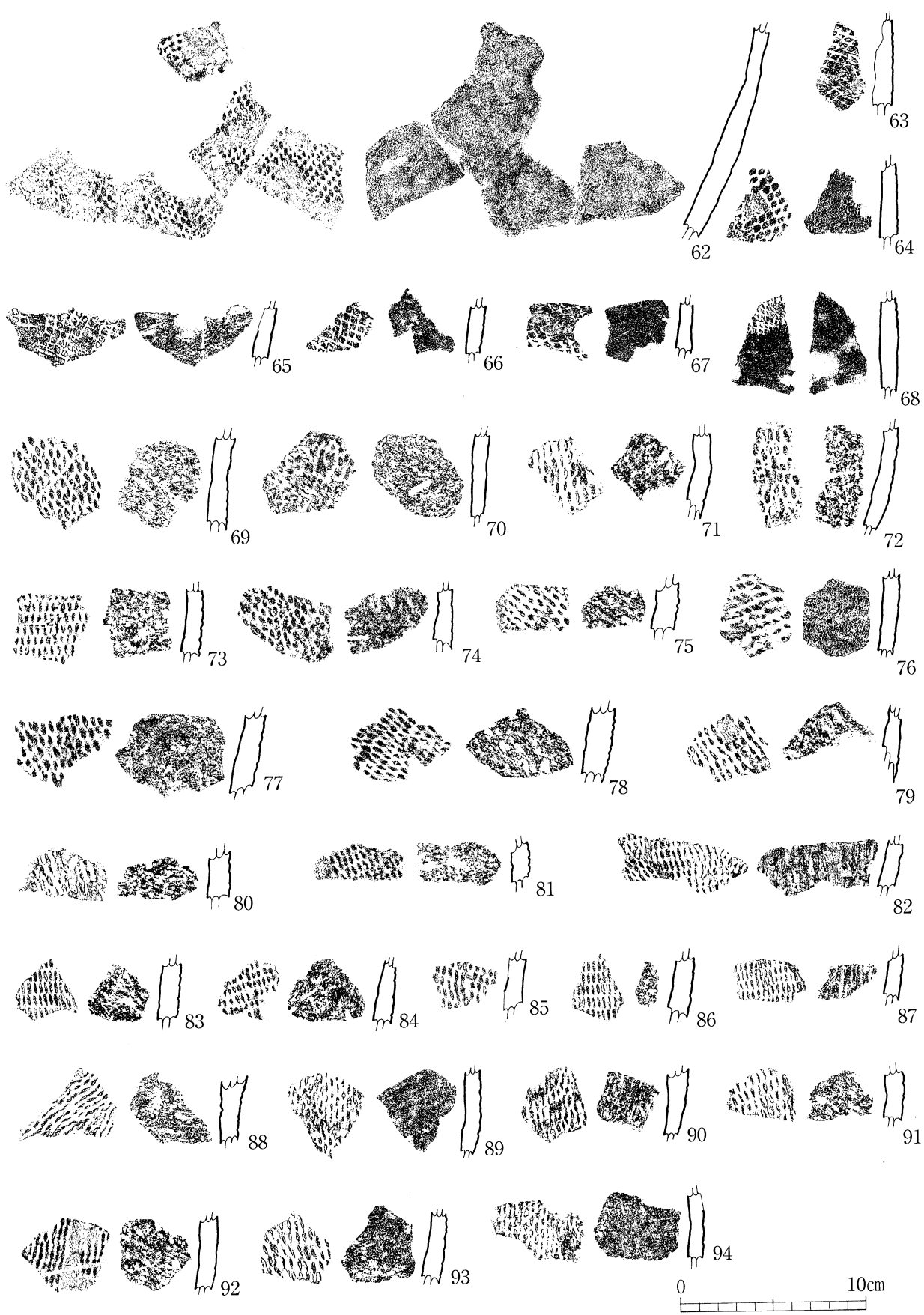
110～114は口縁部である。内面上位では横方向に、外面では縦方向に押型文が施文される。また、口唇部にも押型文が施文される。これらの施文方法は4a類



第13図 4類土器の分布 (S=1/500)



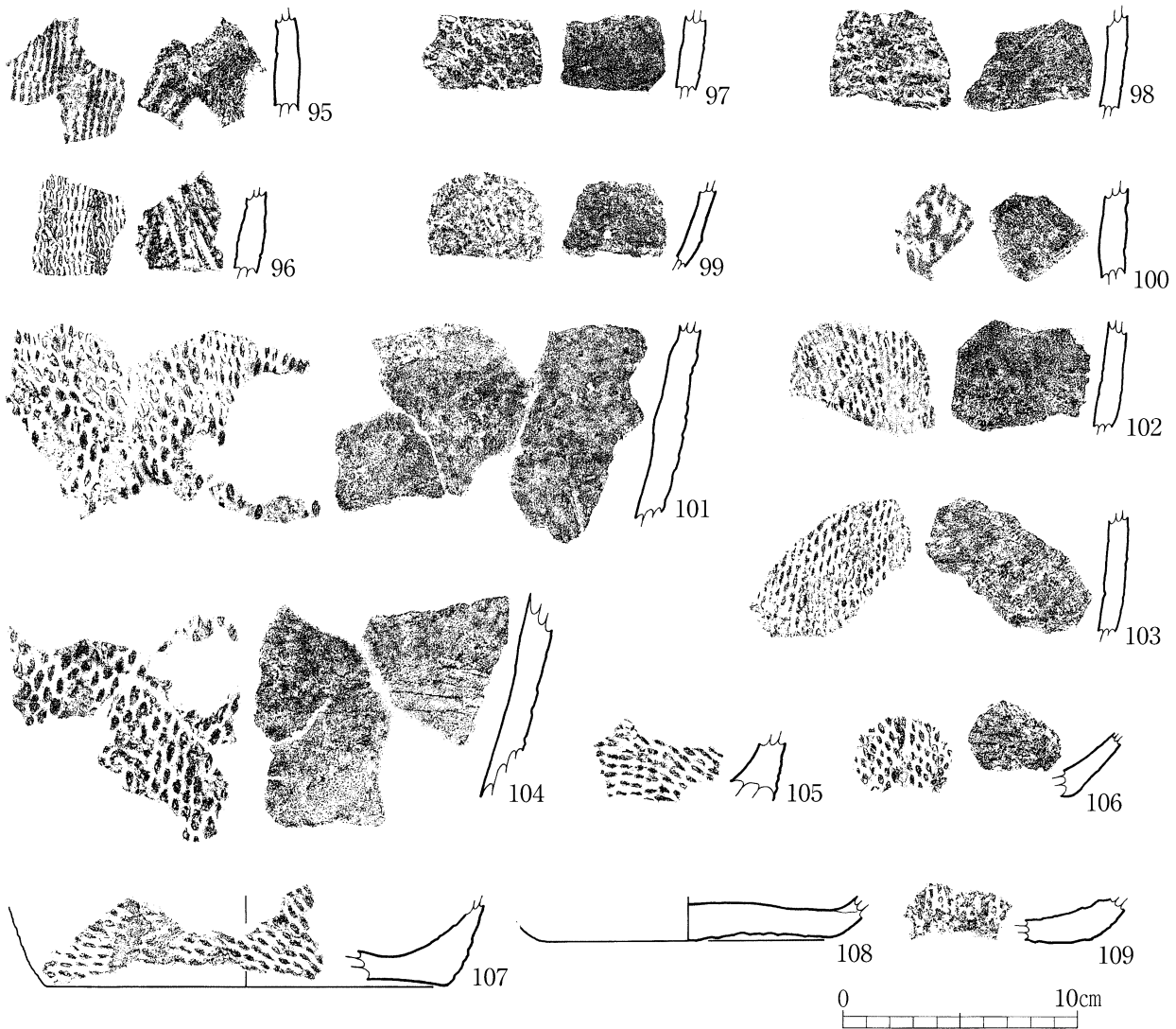
第14图 4 a 類土器 1



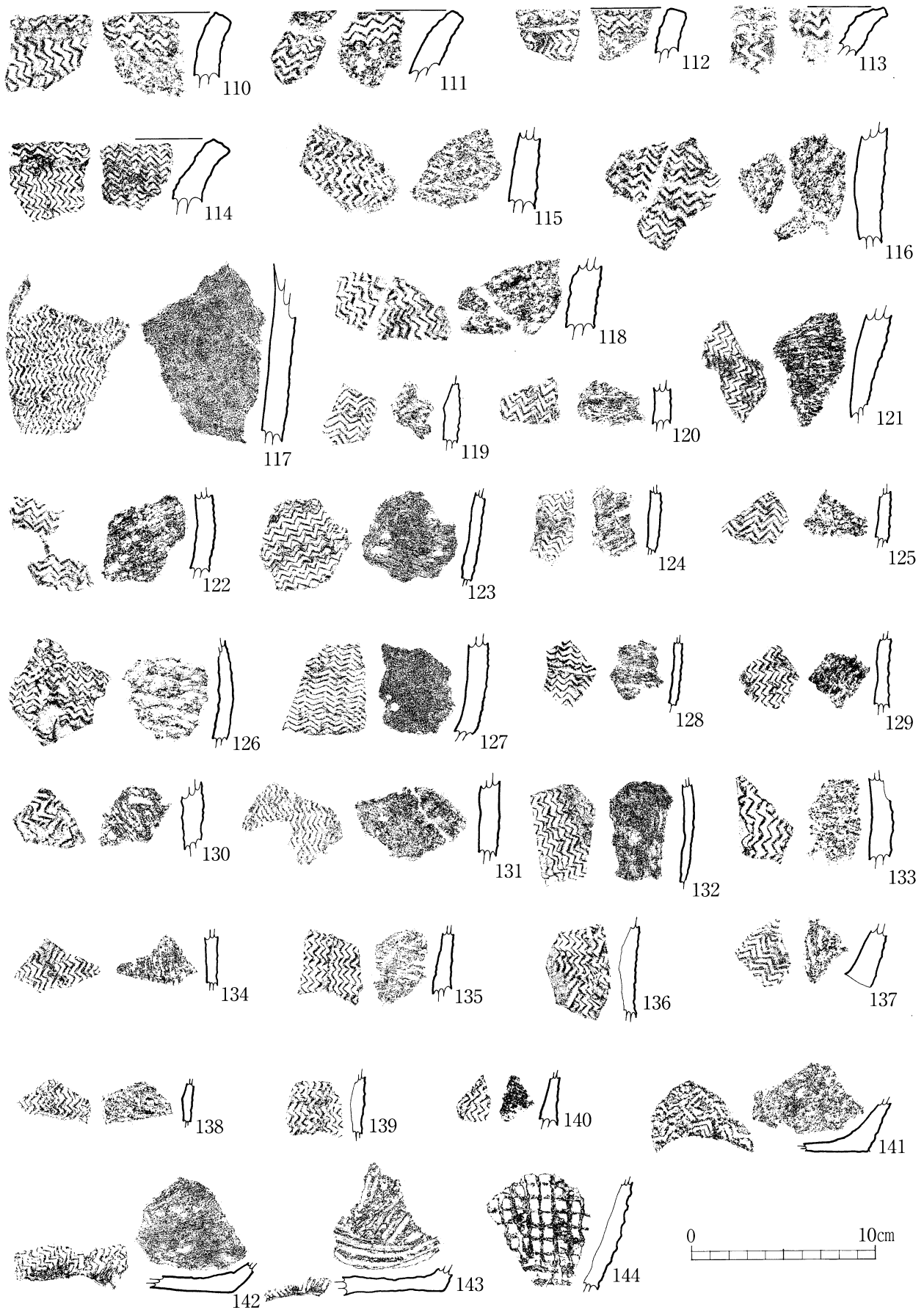
第15図 4 a類土器2

と共通する。110は4類土器にしては珍しく石英と長石を多量に含み、表面がざらついている。115～140は胴部破片である。押型文は縦方向に施文されるものが多いが、まれに斜め方向（123など）あるいは横方向（127など）に施文される資料がみられる。押型文は密着して施文されるのが一般的だが、132のように間隔を開けて施文されるものも存在する。137は底部に近い破片である。押型文が斜め方向に施文される。141～143は底部の破片である。胎土には少量の金雲母と白色の砂を含んでいる。141の内面はケズリ調整、外面の押型文はいくぶん摩滅している。142の内面もヘラケズリで調整され、外面に斜め方向に押型文が施文される。143の内面はヘラ状の工具で掻き取られ、わずかに残っている外面には押型文が観察される。

4c類は格子状の押型文土器である。抽出できたのは、B-9区から出土した144の1点だけである。焼成は不良で、内面は剥落している。外面には格子状の押型文が施文される。胎土には石英、長石、金雲母を含んでいる。



第16図 4 a類土器 3



第17図 4 a類土器・4 c類土器

表7 土器観察表3 (早期4類・1)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文様・調整	色 調	胎 土					備 考			
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫		
第 14 図	40	4a	押型文	口縁部	深鉢	A-8 B-8 A-8	1152 1199 1200	Ⅲ Ⅲ Ⅲ	146.91 146.83 146.87	良好	内・ナデ後押型文 外・押型文	赤褐色 赤褐色					◎	小 礫	口径約35cm 楕円6.5mm×2mm 口唇部にも押型文		
	41	4a	押型文	口縁部	深鉢	A-6	1346	Ⅶ	147.28	良好	内・ナデ後押型文 外・押型文	黄褐色 赤褐色				◎	○		楕円6mm×2mm 口唇部にも押型文		
	42	4a	押型文	口縁部	深鉢	B-9	7号 集石	Ⅷ	無し	良好	内・上半押型、下半ナデ 外・押型文	暗褐色				○	◎		口径約27cm 楕円3.5mm×2mm		
	43	4a	押型文	口縁部	深鉢	D-7	663	Ⅷ	146.91	良好	内・上半押型、下半ケズリ 外・押型文	暗褐色 暗茶褐色				○	○		楕円3mm×2mm 口唇部にも押型文		
	44	4a	押型文	口縁部	深鉢	A-5	1079	Ⅷ	147.66	良好	内・上半押型、下半ケズリ 外・押型文	暗褐色 暗褐色				○	◎		楕円7.5mm×2.5mm 口唇部にも押型文		
	45	4a	押型文	口縁部	深鉢	B-8	1389	Ⅷ	146.79	不良	内・押型文 外・押型文	赤褐色 赤褐色				◎	○		楕円8mm×3mm 口唇部にも押型文		
	46	4a	押型文	口縁部	深鉢	B-10	1466	Ⅷ	146.27	良好	内・押型文 外・押型文	赤褐色 赤褐色				○	○		楕円5.5mm×2mm 口唇部にも押型文		
	47	4a	押型文	口縁部	深鉢	B-9	1006	Ⅷ	146.88	良好	内・押型文 外・押型文	黄灰色 黄灰色				○	○		楕円5mm×2.5mm 口唇部にも押型文		
	48	4a	押型文	口縁部	深鉢	C-9	23	Ⅶ	146.1	良好	内・押型文 外・押型文	暗褐色 茶褐色				○	○		楕円5.5mm×2mm 口唇部にも押型文		
	49	4a	押型文	口縁部	深鉢	D-6	679	Ⅶ	147.53	良好	内・押型文 外・押型文	黒褐色 灰褐色						砂 粒	楕円5mm×4mm		
	50	4a	押型文	頸部	深鉢	A-8	1461	Ⅷ	146.58	良好	内・上半ナデ、下半ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	○	○	○	◎	○			楕円7.5mm×2.5mm	
	51	4a	押型文	胴部	深鉢	D-9	1448	Ⅷ	146.6	良好	内・ケズリ 外・押型文	黒褐色 淡灰褐色				○	○			楕円5mm×2mm。楕円が 部分的に繋がっている	
	52	4a	押型文	胴部	深鉢	B-6	1316	Ⅷ	147.36	良好	内・剥落 外・押型文	剥落 黄灰色	○	○	○					楕円5mm×3.5mm 整然とした文様	
	53	4a	押型文	胴部	深鉢	D-4	779	Ⅷ	147.61	良好	内・ナデ 外・押型文	黄灰色 暗黄灰色							小 礫	54と同一個体。整然とした 文様。楕円3.5mm×2mm	
	54	4a	押型文	胴部	深鉢	D-4	780	Ⅷ	147.54	良好	内・ナデ 外・押型文	暗黄灰色 黒褐色							白 色 小 礫	53と同一個体。整然とした 文様。楕円3.5mm×2mm	
	55	4a	押型文	胴部	深鉢	D-6	676	Ⅷ	147.28	良好	内・工具ナデ 外・押型文	黄橙色 黄橙色	○	○	○						楕円5mm×3mm 整然とした文様
	56	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9 B-9 B-9	1296 1442 1444	Ⅷ Ⅷ Ⅷ	146.59 146.54 146.54	良好	内・工具ナデ 外・押型文	黄灰色 灰白色	○	○	○				小 礫	楕円5mm×3.5mm 整然とした文様	
	57	4a	押型文	胴部	深鉢	D-8	615	Ⅷ	146.86	良好	内・ナデ 外・押型文	暗黄灰色 暗黄灰色	○	○	○						楕円5.5mm×4mm
	58	4a	押型文	胴部	深鉢	B-7	1106	Ⅷ	147.07	良好	内・ナデ 外・押型文	暗黄灰色 黒褐色	○	○			○				楕円5.5mm×3mm 整然とした文様
	59	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1291	Ⅷ	146.73	良好	内・ナデ 外・押型文	黄灰色 黒褐色	○	○							楕円5.5mm×3.5mm 整然とした文様
	60	4a	押型文	胴部	深鉢	A-9	1297	Ⅷ	146.62	良好	内・ナデ 外・押型文	暗褐色 黒褐色							砂 粒 小 礫	楕円5.5mm×4mm 整然とした小さな押型文	
61	4a	押型文	胴部	深鉢	B-6	1420	Ⅷ	147.16	良好	内・ナデ 外・押型文	黄灰褐色 黄灰色	○	○	○						楕円6mm×3.5mm 整然とした文様	
第 15 図	62	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9 B-9 B-9 B-9 B-9	1228 1245 1431 1446 1452	Ⅶ Ⅷ Ⅷ Ⅷ Ⅷ	147.13 146.71 146.78 146.58 146.61	良好	内・指ナデ 外・押型文	黄褐色 黄灰色	○	○	○				砂 粒	楕円5mm×2.5mm 部分的に楕円が繋が っている。	
	63	4a	押型文	胴部	深鉢	C-9	18	Ⅶ	146.13	良好	内・剥落 外・押型文	剥落 赤褐色							砂 粒 小 礫	楕円6mm×4mm 整然とした文様	
	64	4a	押型文	胴部	深鉢	D-8	614	Ⅷ	146.81	良好	内・ナデ 外・押型文	黄灰色 黒褐色							砂 粒 小 礫	楕円6mm×4.5mm 整然とした小さな押型文	
	65	4a	押型文	胴部	深鉢	C-9	10	Ⅷ	146	良好	内・ナデ 外・押型文	黄灰色 暗黄灰色	○	○							66、67と同一個体。浅くて菱形 に近い押型文。楕円6mm×4mm
	66	4a	押型文	胴部	深鉢	D-9	25	Ⅶ	146.2	良好	内・摩滅 外・押型文	灰白色 灰白色				○	○				65、67と同一個体。整然とした 浅い押型文。楕円5mm×4mm
	67	4a	押型文	胴部	深鉢	D-9	4	Ⅶ	145.88	良好	内・ナデ 外・網目に似た押型文	暗黄灰色 明黄灰色							砂 粒	65、66と同一個体。浅くて菱形 に近い押型文。楕円5mm×4mm	
	68	4a	押型文	胴部	深鉢	D-4	772	Ⅷ	147.62	良好	内・ナデ、押型文 外・押型文	暗褐色 暗褐色							砂 粒	楕円3mm×2mm 整然とした細かい押型文	
	69	4a	押型文	胴部	深鉢	A-5	1056	Ⅷ	147.64	良好	内・工具ナデ 外・押型文	暗黄褐色 暗黄褐色	○	○	○						楕円8mm×4mm
	70	4a	押型文	胴部	深鉢	D-5	799	Ⅷ	147.36	良好	内・ナデ 外・押型文	暗褐色 暗褐色	○	○			○				楕円5mm×3mm

表8 土器観察表4 (早期4類・2)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂	
第 15 図	71	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1454	VIII	146.52	良好	内・ケズリ 外・押型文	赤褐色 赤褐色				○	○	楕円 8mm×3mm
	72	4a	押型文	胴部	深鉢	A-8 A-8	1150 504	VIII VI	146.96 147.17	良好	内・ナデ 外・押型文	赤褐色 赤褐色	○	○		○		楕円 8mm×3mm
	73	4a	押型文	胴部	深鉢	B-8	1384	VIII	146.83	良好	内・ナデ 外・押型文	暗黄褐色 黄褐色					○	砂粒 楕円 7mm×2.5mm
	74	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1473	VIII	146.38	良好	内・ケズリ 外・押型文	黒褐色 灰褐色				○	○	楕円 6mm×3mm
	75	4a	押型文	胴部	深鉢	A-9	1284	VIII	146.64	良好	内・ケズリ 外・押型文	赤褐色 赤褐色				○	○	楕円 6mm×2.5mm
	76	4a	押型文	胴部	深鉢	A-9	951	VII	146.87	良好	内・ナデ 外・押型文	黄灰色 黄灰色					○	小礫 楕円 5mm×2mm
	77	4a	押型文	胴部	深鉢	A-8	1203	VIII	146.88	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 赤褐色				△	◎	楕円 8mm×3mm
	78	4a	押型文	胴部	深鉢	B-7	1315	VIII	147.29	良好	内・ケズリ 外・押型文	灰褐色 茶褐色	○			○	○	楕円 6mm×3mm
	79	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1005	VIII	146.79	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色		○		○	○	楕円 7mm×2.5mm
	80	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1237	VI	146.92	良好	内・ケズリ 外・押型文	赤褐色 赤褐色					○	砂粒 楕円 6mm×2mm
	81	4a	押型文	胴部	深鉢	A-8	1320	VII	147.37	不良	内・ナデ 外・押型文	茶褐色 黄褐色	○	○			○	楕円 5mm×2.5mm
	82	4a	押型文	胴部	深鉢	B-6	1311	VIII	147.29	良好	内・ケズリ 外・押型文	黒褐色 茶褐色		○		○	○	楕円 5mm×2mm
	83	4a	押型文	胴部	深鉢	A-9	1016	VIII	146.98	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	○				○	小礫 楕円 6mm×2mm
	84	4a	押型文	胴部	深鉢	A-6	921	VII	147.72	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 茶褐色	○			○	○	楕円 5mm×2mm
	85	4a	押型文	胴部	深鉢	B-10	1467	VIII	146.24	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 茶褐色	○			○		楕円 6.5mm×2mm
	86	4a	押型文	胴部	深鉢	A-6	1333	IV	147.33	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	○				○	楕円 6mm×2mm
	87	4a	押型文	胴部	深鉢	A-9	1397	VIII	146.9	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 茶褐色					○	砂粒 楕円 6mm×2mm
	88	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1246	VII	146.84	良好	内・ケズリ 外・押型文	黒褐色 暗灰色	○	○		○	○	楕円 5mm×2mm
	89	4a	押型文	胴部	深鉢	D-6	675	VII	147.47	良好	内・ナデ 外・押型文	黒色 淡黄褐色	○	○			○	楕円 6mm×2mm
	90	4a	押型文	胴部	深鉢	D-9	1	VII	146.2	良好	内・ケズリ 外・押型文	灰褐色 灰黄色	○	○		△	○	楕円 6mm×2mm
91	4a	押型文	胴部	深鉢	B-5	1301	VIII	147.53	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	△			△	○	楕円 6mm×2.5mm	
92	4a	押型文	胴部	深鉢	B-8	1138	VIII	147.09	良好	内・ケズリ 外・押型文	灰色 灰黄色	○	○		○	○	楕円 5mm×2.5mm 文様がほとんど繋がっている	
93	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	995	VII	146.97	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	○	○		△	○	楕円 6mm×2mm	
94	4a	押型文	胴部	深鉢	D-7	646	VII	147.36	良好	内・ナデ 外・押型文	黒褐色 黄灰色	○	○	○			楕円 6mm×2.5mm	
第 16 図	95	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1432 1431	VII VIII	146.62 146.78	良好	内・ケズリ 外・押型文	黒褐色 暗黄灰色				○	○	楕円 6mm×2mm
	96	4a	押型文	胴部	深鉢	D-7	649	VII	147.29	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	○	○		△		楕円 6mm×2mm
	97	4a	押型文	胴部	深鉢	A-7	1180	VIII	147.13	良好	内・工具ナデ 外・押型文	暗褐色 灰褐色					○	楕円 6.5mm×3mm
	98	4a	押型文	胴部	深鉢	B-9	1438	VIII	146.57	良好	内・ナデ 外・押型文	暗褐色 暗褐色	○			○	○	楕円 5mm×3mm
	99	4a	押型文	胴部	深鉢	B-6	1308	VIII	147.35	良好	内・ナデ 外・押型文	黒褐色 黄褐色	○	○	○			文様が潰れている
	100	4a	押型文	胴部	深鉢	A-8	1146	VIII	147.12	良好	内・ナデ 外・押型文	黄灰色 黄灰色	○	○			○	楕円 6mm×4mm
	101	4a	押型文	胴部	深鉢	A-8 A-8 A-8	1202 1405 1386	VII VIII VIII	146.81 146.78 146.88	良好	内・丁寧なナデ 外・押型文	暗黄灰色 赤褐色				△	◎	楕円 8mm×3mm 104と同一個体
	102	4a	押型文	胴部	深鉢	D-7	640	VII	146.94	良好	内・ナデ 外・押型文	淡褐色 灰黄色					○	細砂粒 楕円 6mm×3mm
	103	4a	押型文	胴部	深鉢	D-7	650	VII	147.11	良好	内・ナデ 外・押型文	淡褐色 黄灰色					○	小礫 楕円 6mm×2mm

表9 土器観察表5 (早期4類・3)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考	
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫
第 16 図	104	4a	押型文	胴部	深鉢	B-8 B-8 A-8	1132 1151 1195	VII VII VII	146.9 147.06 146.84	良好	内・丁寧なナデ 外・押型文	暗黄灰色 赤褐色					◎		楕円8mm×3mm 101と同一個体
	105	4a	押型文	底部付近	深鉢	B-8	1266	VII	146.76	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	○			○	○		楕円6mm×2.5mm
	106	4a	押型文	底部付近	深鉢	C-9	9	VII	145.84	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 黄褐色	○	○		○	○		楕円5mm×2.5mm
	107	4a	押型文	底部	深鉢	A-9	1263	VII	146.72	良好	内・ケズリ 外・ナデ、押型文	暗黄灰色 赤褐色				○	◎		楕円6mm×2.5mm 底径18cm
	108	4a	押型文	底部	深鉢	B-9 A-9 B-9	1232 1272 1093	VII VII VII	146.77 146.72 146.84	良好	内・ナデ 外・ナデ	茶褐色 淡黄灰色	○	○	○		○		底径16cm
	109	4a	押型文	底部	深鉢	B-7	1093	VII	147.09	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色				○	◎		楕円5mm×2mm
第 17 図	110	4b	押型文	口縁部	深鉢	B-9	1224	VII	146.89	良好	内・押型文 外・押型文	赤褐色 暗褐色 黄褐色	◎	◎	○				口唇部にも施文
	111	4b	押型文	口縁部	深鉢	B-8	1139	VII	146.99	不良	内・ケズリ、押型文 外・押型文	赤褐色 赤褐色	○	○	○			小 礫	口唇部にも施文
	112	4b	押型文	口縁部	深鉢	B-8	1394	VII	146.77	不良	内・押型文 外・押型文	赤褐色 灰褐色	△	△	△		△		
	113	4b	押型文	口縁部	深鉢	A-5	828	VII	147.8	不良	内・押型文 外・押型文	淡灰褐色 淡黄褐色	○				○		口唇部にも施文
	114	4b	押型文	口縁部	深鉢	B-8	1127	VII	146.98	良好	内・押型文 外・押型文	淡黄灰色 淡黄灰色	○	○		△	○		口唇部にも施文
	115	4b	押型文	胴部	深鉢	B-8	1387	VII	146.84	良好	内・ケズリ 外・押型文	黄褐色 暗黄褐色	○	○			○	小 礫	
	116	4b	押型文	胴部	深鉢	B-9 B-8	1290 1390	VII VII	146.84 146.78	不良	内・ケズリ 外・押型文	赤褐色 淡黄褐色	◎	◎	○				
	117	4b	押型文	胴部	深鉢	D-7	653	VII	147.24	良好	内・ナデ 外・押型文	黄褐色 淡茶褐色				△	◎	小 礫	
	118	4b	押型文	胴部	深鉢	B-8 B-8	1128 1391	VII VII	146.86 146.89	良好	内・ケズリ 外・押型文	黄褐色 暗褐色	◎	◎			△		
	119	4b	押型文	胴部	深鉢	C-9	33	VII	146.2	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 灰褐色	○	○			○		
	120	4b	押型文	胴部	深鉢	A-6	848	VII	147.86	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 赤褐色				△	○		
	121	4b	押型文	胴部	深鉢	A-9	1265	VII	146.84	不良	内・ケズリ 外・押型文	暗茶褐色 暗茶褐色		○		○	○		
	122	4b	押型文	胴部	深鉢	B-8	505	VII	147.23	不良	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 黄褐色				△	○		
	123	4b	押型文	胴部	深鉢	A-9	1271	VII	146.73	良好	内・ケズリ 外・押型文	淡褐色 淡褐色	○	○		△	○		
	124	4b	押型文	胴部	深鉢	C-9	39	VII	146.19	良好	内・ケズリ 外・押型文	黒褐色 灰褐色				△	○		
	125	4b	押型文	胴部	深鉢	C-9	17	VII	146.01	良好	内・摩滅 外・押型文	黄灰色 淡灰褐色				△	○		
	126	4b	押型文	胴部	深鉢	B-9	1239	VII	146.89	良好	内・ケズリ 外・押型文	淡黄褐色 淡茶褐色	○	○		○	○		
	127	4b	押型文	胴部	深鉢	A-7	1091	VII	147.19	良好	内・ナデ 外・押型文	黄褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	128	4b	押型文	胴部	深鉢	B-9	1457	VII	146.57	良好	内・ナデ 外・押型文	黄褐色 黄褐色	○	○		△	○		
129	4b	押型文	胴部	深鉢	B-9	1002	VII	146.85	良好	内・ナデ 外・押型文	暗褐色 淡灰褐色				△	○			
130	4b	押型文	胴部	深鉢	A-8	1222	VII	146.94	良好	内・ケズリ 外・押型文	淡褐色 赤褐色	○	○		△	○			
131	4b	押型文	胴部	深鉢	D-7	642	VII	147.04	良好	内・ナデ 外・押型文	暗褐色 淡褐色	○	○		△	○			
132	4b	押型文	胴部	深鉢	B-8	1385	VII	146.88	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 淡茶褐	○	○		△	○			
133	4b	押型文	胴部	深鉢	B-9	1295	VII	146.61	不良	内・摩滅 外・押型文	暗褐色 赤褐色	○	○						
134	4b	押型文	胴部	深鉢	A-9	1018	VII	146.9	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗茶褐色 淡茶褐色	○	○		△	○			
135	4b	押型文	胴部	深鉢	A-9	1443	VII	146.53	良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 暗褐色	○	○		△	○			

5 類土器 (第18図, 第20図145~174)

妙見式土器と思われるものを一括した。分布をみるとA・B-7・8区に集中して出土している状況がわかる。5類土器として抽出した総数は71点で、接合の結果、資料数は68点となり、30点(145~174)を図示した。器形の全容が分かる資料は出土していない。地文に縄文を施し、口縁部や胴部に突帯を貼り付け、突帯上にキザミを施すというのが特徴である。胎土に石英、長石、金雲母、白色の砂を含むものが多く、角閃石を含むものは少ない。焼成は概して不良で、色調は茶褐色を呈するものが多い。

145は湾曲しながら外反する口縁部である。内面はナデ調整で、外面の地文に間隔を開けた縄文が施される。口唇部をわずかに外側に拡張し、端部にキザミを施す。さらにその下に2条の突帯を巡らせ、突帯上にもキザミを施す。146はわずかに外反する口縁部である。内面はナデ調整で、外面の地文である縄文は確認できないが、2条の突帯を巡らせてキザミを施す。147~149は口縁部に近い破片である。1~2条の突帯を巡らせ突帯上にキザミを施す。151と152は文様、胎土、色調から同一個体だと判断される。内面はナデ調整され、外面には地文に斜めの縄文を施し、2条の突帯を巡らす。突帯上にはキザミが施される。154は2条の突帯を巡らせ、縦位の突帯を付加する。155は胴部破片である。平行する2条の突帯が斜めに貼付され、突帯上にキザミが施される。

157も胴部破片である。縦位の突帯を貼付し、不規則なキザミを施す。内面はケズリ調整で、ヘラによる擦痕が観察される。159は頸部から胴部にかけての破片である。突帯の貼付されていない部分で、間隔をおいて縄文を斜めに施す。160は2条の突帯を巡らす胴部破片である。163は地文である縄文を施した後に、鎖状の撚糸文を添加するものである。165~171は地文である縄文のみが施された胴部破片である。内面はナデ調整がほとんどだが、171だけはヘラケズリ調整となっている。172は撚りのしっかりしていない縄文を施す胴部破片である。焼成は不良で、器面が摩滅している部分がある。173はほかの個体に比べて太めの縄文を施す。内面は工具ナデにより丁寧に仕上げられている。174は縦位に縄文を施すものである。内面はヘラケズリによって調整されている。

表10 土器観察表6 (早期4類・4)

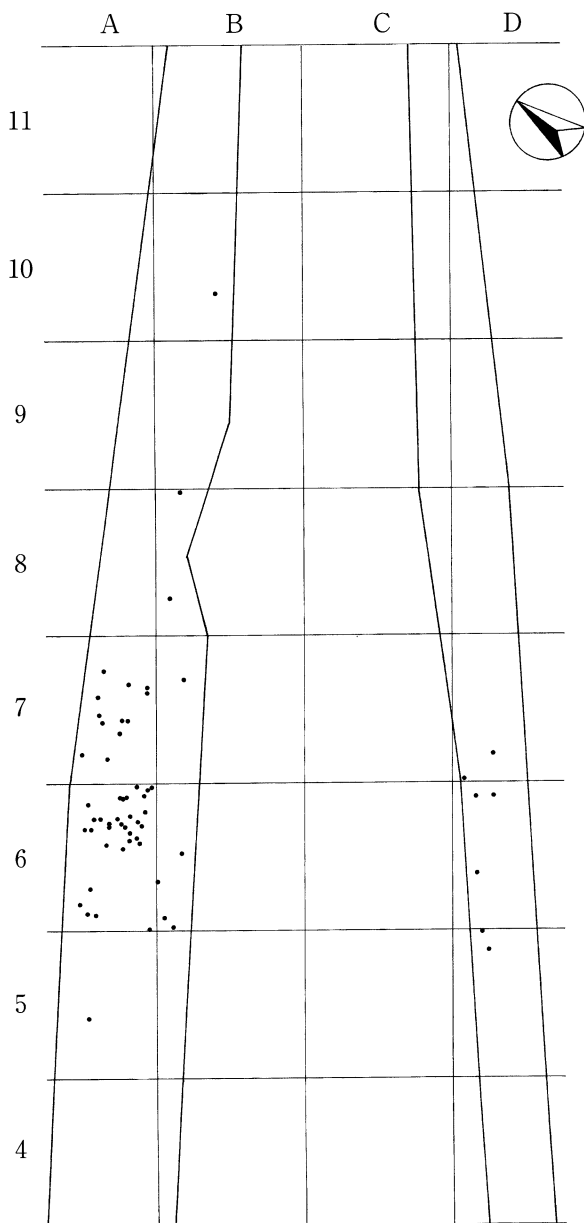
△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (<small>m</small>)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考	
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫
第 17 図	136	4b	押型文	胴部	深鉢	A-6	847	Ⅶ	147.83	良好	内・剥落 外・押型文	淡黄褐色	○	○		△	○		
	137	4b	押型文	底部付近	深鉢	D-9	2	Ⅶ	145.92	良好	内・ケズリ 外・押型文	黄褐色 淡灰褐色	○	○			○		
	138	4b	押型文	胴部	深鉢	A-8	1212	Ⅷ	147	良好	内・ケズリ 外・押型文	赤褐色 赤褐色				△	○		
	139	4b	押型文	胴部	深鉢	B-9	無し	Ⅶ		良好	内・剥落 外・押型文	黒褐色	○			△	○		
	140	4b	押型文	胴部	深鉢	A-9	953	Ⅶ	146.86	良好	内・ケズリ 外・押型文	淡灰褐色 淡灰褐色				△	△		
	141	4b	押型文	底部	深鉢	D-5	805	Ⅷ	147.36	良好	内・ケズリ 外・押型文、ナデ	黒褐色 茶褐色	○	○		△	○		
	142	4b	押型文	底部	深鉢	A-8	1154	Ⅷ	146.89	良好	内・ケズリ 外・押型文	茶褐色 茶褐色	○	○		△	○		
	143	4b	押型文	底部	深鉢		無し	表		良好	内・ケズリ 外・押型文	暗褐色 黄褐色				△	○		
	144	4c	押型文	胴部	深鉢	B-9	1294	Ⅷ	146.66	不良	内・剥落 外・押型文	淡黄褐色	○	○		○			

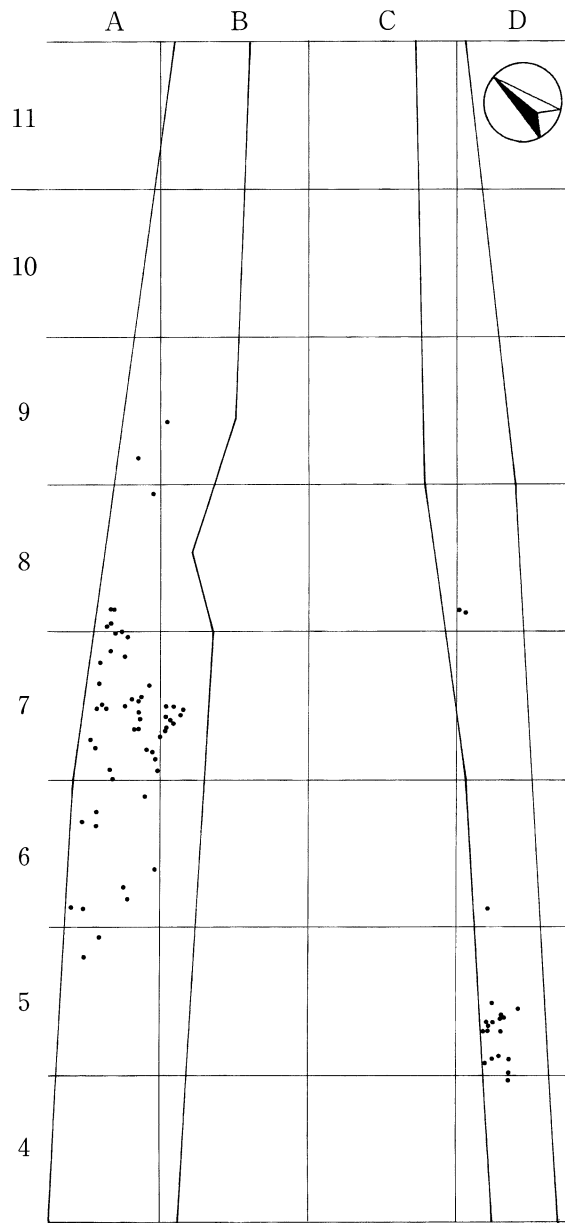
6類土器 (第21図175~194)

平椀式に相当するものを一括した。抽出できた総数は86点で、接合の結果、資料数は79点となり、30点を図示した。器形の全容がわかるような大きな資料は出土していないが、器種には深鉢形と壺形の2種類がみられる。施文手法としては沈線文、押し引き状の沈線文、刺突文が多用され、資料によっては突帯が貼付されるものがある。地文に縄文を施すというのが施文手法のひとつであるが、縄文を施した資料は出土していない。胎土に金雲母と白色の砂を混入する資料が半数を超えている。

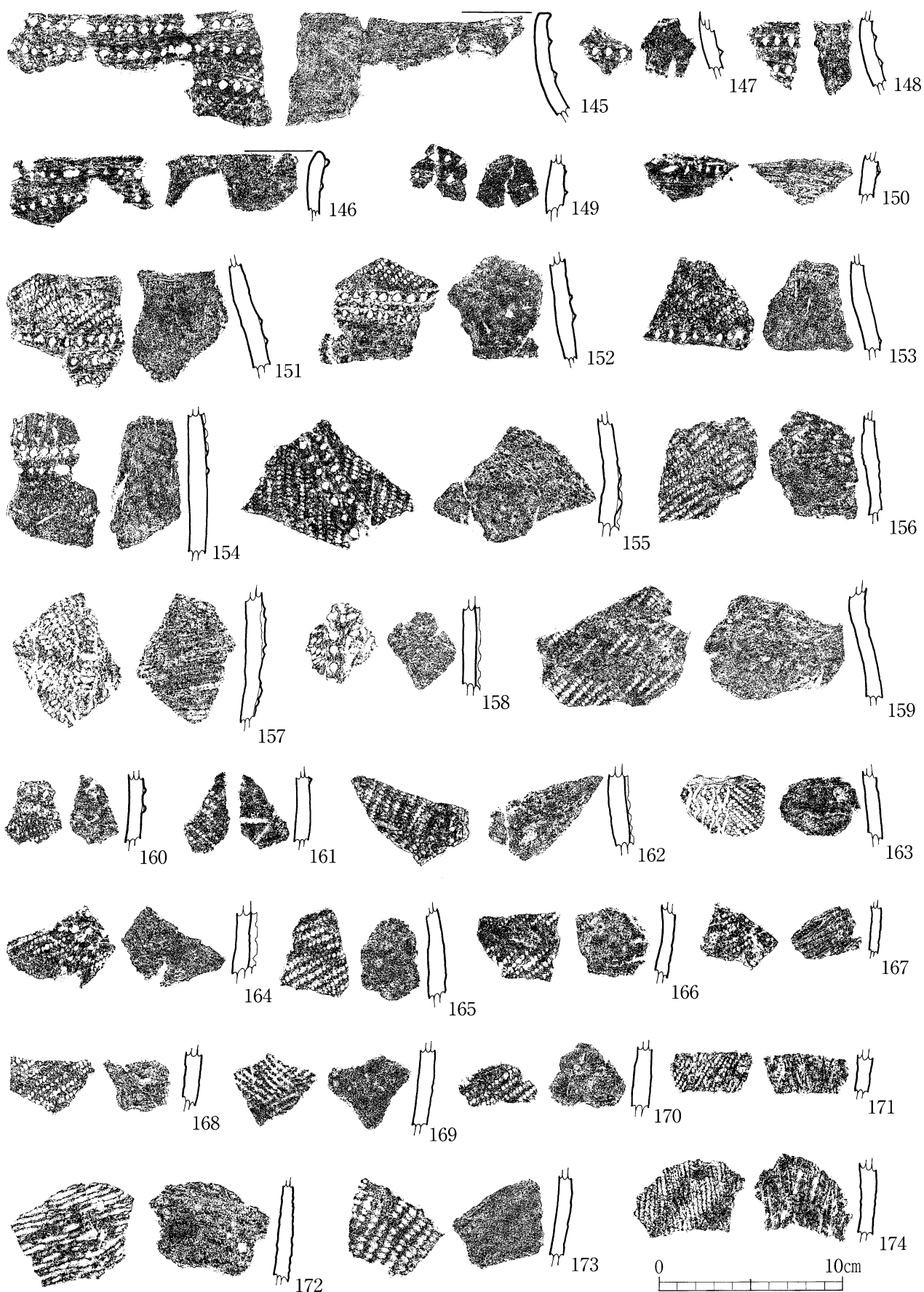
6類土器全体の分布状況を見るとA・B-7区を中心とする一群とD-5区を中心とする一群の2つがあることがわかる。器種と分布状況の関係をみると、A・B-7区には壺形土器が多く、D-5区には深鉢形土器が多い傾向がある。



第18図 5類土器の分布 (S=1/500)



第19図 6類土器の分布 (S=1/500)



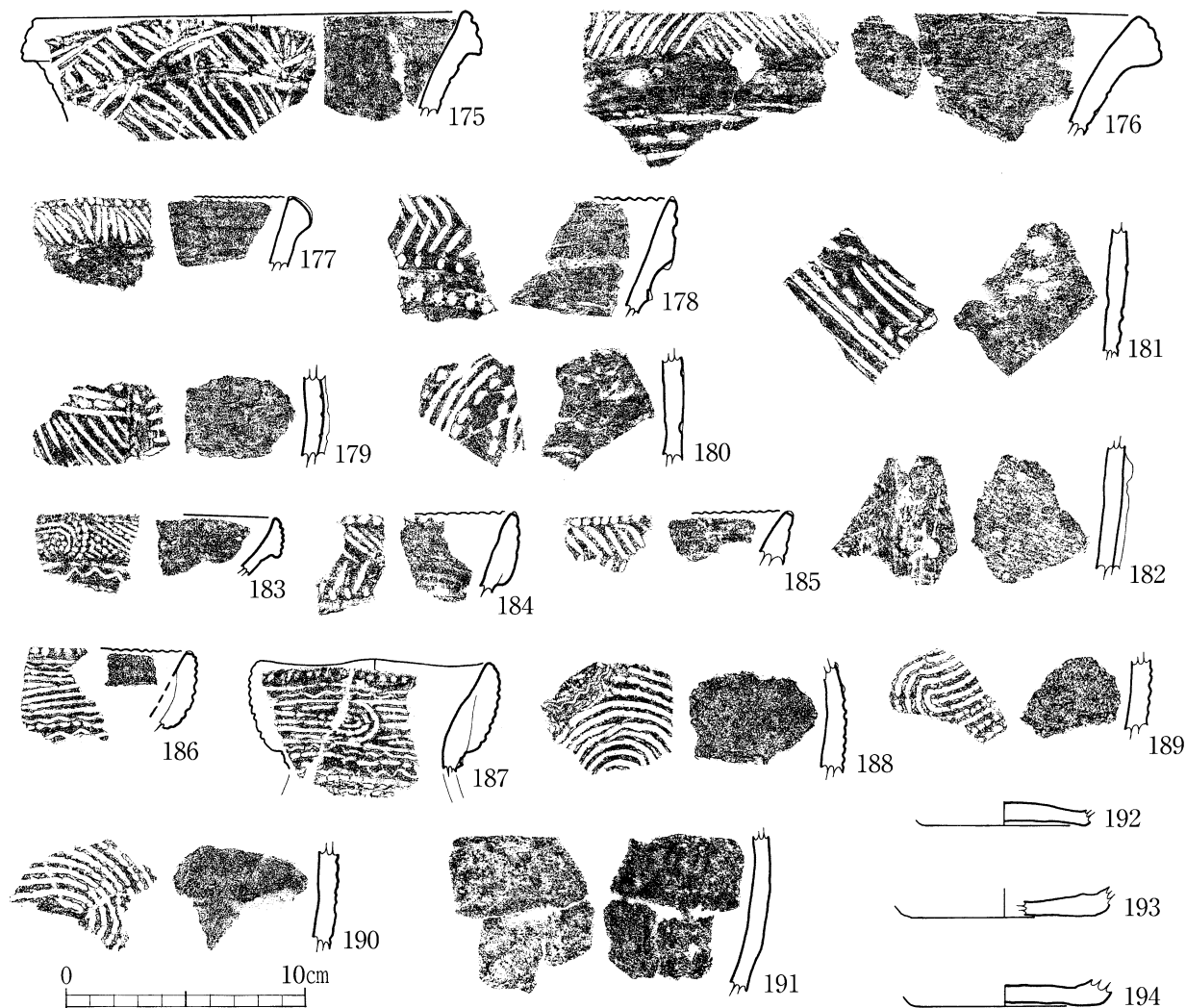
第20图 5類土器

表11 土器観察表7 (早期5類)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考	
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫
第 20 図	145	5	妙見	口縁部	深鉢 深鉢 深鉢	A-6 A-6 A-6	1335 1326 904	VII VII VII	147.31 147.43 147.48	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	茶褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	146	5	妙見	口縁部	深鉢 深鉢	A-7 A-7	1080 1186	VII VII	147.33 147.39	不良	内・ナデ 外・突帯キザミ	茶褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	147	5	妙見	口縁付近	深鉢	A-7	1401	VII	146.96	不良	内・ナデ 外・突帯キザミ	暗褐色 黄褐色	○	○		○	○		
	148	5	妙見	口縁付近	深鉢	A-7	1523	V	147.29	良好	内・ナデ 外・突帯キザミ	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○		○	○		
	149	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	940	VII	147.67	不良	内・ナデ 外・突帯キザミ	暗褐色 暗褐色	○	○		○	○		
	150	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	880	VII	147.84	不良	内・ナデ 外・突帯キザミ	暗褐色 赤褐色	○	○		○	○		
	151	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1418	VII	147.11	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	茶褐色 茶褐色	○	○		○	○		
	152	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1344	VII	147.37	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	暗褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	153	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1415	VII	147.16	不良	内・ヘラケズリ後ナデ 外・縄文、突帯キザミ	茶褐色 暗褐色	○	○		○	○		
	154	5	妙見	胴部	深鉢	A-7	1221	VII	147.03	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	暗褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	155	5	妙見	胴部	深鉢	A-7	1170	VII	147.11	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	茶褐色 暗褐色	○	○		○	○		
	156	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1338	VII	147.32	不良	内・ナデ 外・縄文	暗褐色 暗褐色	○	○		○	○		
	157	5	妙見	胴部	深鉢	A-5	1048	VII	147.69	不良	内・ケズリ 外・縄文、突帯キザミ	黄褐色 淡黄褐色	○	○	○				
	158	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	855	VII	147.89	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	赤褐色 暗褐色	○	○	○		○		
	159	5	妙見	胴部	深鉢	B-7	1107	VII	147.07	不良	内・ナデ 外・縄文	茶褐色 茶褐色	○	○		○	○		
	160	5	妙見	胴部	深鉢	A-7	1083	VII	147.4	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	茶褐色 茶褐色	○	○		△	○		
	161	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	853	VII	147.75	良好	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	茶褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	162	5	妙見	胴部	深鉢	A-7	1168	VII	147.04	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	黄褐色 茶褐色	○	○		△	○		
	163	5	妙見	胴部	深鉢	D-5	709	VII	147.53	不良	内・ナデ 外・撚糸文	暗褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	164	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1345	VII	147.58	不良	内・ナデ 外・縄文、突帯キザミ	茶褐色 暗褐色	○	○		○	○		
	165	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1328	VII	147.37	良好	内・ナデ 外・縄文	暗茶褐色 赤褐色	○	○			○		
	166	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1412	VII	147.23	不良	内・ナデ 外・縄文	暗褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	167	5	妙見	胴部	深鉢	A-7	1402	VII	147.01	不良	内・工具ナデ 外・縄文	暗褐色 暗褐色	○	○		△	○		
	168	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	906	VII	147.54	不良	内・ナデ 外・縄文	赤褐色 暗茶褐色	○	○	○	○	○		
	169	5	妙見	胴部	深鉢	B-6	1305	VII	147.38	良好	内・ナデ 外・縄文	淡黄灰色 淡黄灰色	○	○	○				
	170	5	妙見	胴部	深鉢	A-7	1181	VII	147.38	不良	内・ナデ 外・縄文	茶褐色 暗褐色	○	○	○	△	○		
	171	5	妙見	胴部	深鉢		試掘	VII		不良	内・ケズリ 外・縄文	黒褐色 黒褐色	○	○		△	○		
	172	5	妙見	胴部	深鉢	D-6	670	VII	147.31	不良	内・ケズリ 外・縄文	黒色 黄褐色	○	○	○				
173	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1321	VII	147.12	良好	内・工具ナデ 外・縄文	淡黄橙色 暗黄灰色	○		○		○			
174	5	妙見	胴部	深鉢	A-6	1332	VII	147.21	不良	内・ケズリ 外・縄文	黒褐色 黒褐色	○	○		○	○			

175はA-6区から出土した2点が接合した口縁部の資料である。傾きと約18cmという口径から考えると壺形土器であると推測される。口縁端部外側に粘土を貼り付け、肥厚し外傾した口唇部を形成した後、斜位の沈線文が施される。口唇部以下の頸部にも直線的な沈線文が施される。176はD-6区から出土した深鉢形土器の口縁部である。175と同様に外傾する平坦な口唇部に斜位の沈線文が施される。頸部付近には2条以上の沈線文が施され、沈線の間には連続する刺突文が施される。内外面とも工具ナデにより調整されている。177は壺形土器の口縁部だと推測される。口唇部上端には連続した刺突文が施され、丸みを帯びた口唇部には不規則な沈線文が施される。内面はヘラ磨き調整である。178は深鉢形土器の口縁部である。断面三角形に肥厚した口縁部が文様帯のひとつとなっている。口縁部全体に羽状の沈線が横位に施される。下方の沈線の下部には沈線に対応するように刺突文が施される。その下には突帯が巡らされ、突帯上には連続したキザミが施される。179は浅鉢形土器の胴部破片である。文様の基本は斜位の平行沈線文であるが、器壁を巡る2条の沈線間に刺突文が施される。また、縦位の突帯が貼付され、突帯上には不規則なキザミが施される。180と181は同一個体だと思われる深鉢形土器の胴部破片である。2点とも沈線文と刺突文が施されている。182も深鉢形土器の胴部破片である。文様としては突帯が貼付されているだけである。183~187は壺



第21図 6類土器

形土器の口縁部である。183の肥厚した口縁部には、刺突文と沈線文による幾何学的な文様が施される。その直下には波状の沈線が巡らされる。184と185は文様、胎土、色調などの特徴から同一個体だと思われる。口唇端部にはキザミが施され、肥厚した口縁部には羽状の沈線文が施される。下段の沈線間の端部には刺突文が施される。焼成が不良で脆弱な土器である。胎土には白色の砂のほか金雲母が多量に混入されている。186も前述した2点と同様にキザミと沈線文が文様の主体である。沈線には一気に引かれたものと押し引き状に引かれたものがある。焼成は不良で、内面の器壁の一部は剥落している。内面はナデ調整により丁寧に仕上げられている。187は口径約10cmの山形口縁である。肥厚した口縁部に刺突文、沈線文、押し引き状の沈線文が施される。肥厚部の直下には波状の沈線文が施され、さらに小さな突帯が貼付されている。文様、胎土、色調などの特徴から胴部破片資料の188～190と同一個体であると思われる。これらの胴部破片にも沈線と押し引き状の沈線で曲線的な文様が描かれる。191は無文だが胎土や色調から深鉢形土器の胴部であると思われる。192～194は底部である。胎土や色調から6類土器の底部とした。

表12 土器観察表8 (早期6類)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 番 類 型 部 器 区 取上 層 標高 焼 文様・調整 色 胎 土 備 考	図 号 別 式 位 種 区 番号 号 層 高 (m) 成	175	6	平	楕	口縁部	壺?	A-6 A-6	1323 1318	VII VIII	147.49 147.21	良好	内・ナデ 外・ナデ、沈線文	暗褐色 黄褐色	胎 土					備 考		
															石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫	
第 21 図		176	6	平	楕	口縁部	深鉢	D-5	738	VII	147.66	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、沈線文、刺突文	灰黄色 灰黄色	○	○	○					
		177	6	平	楕	口縁部	壺?	A-5	1072	VII	147.55	良好	内・ヘラミガキ 外・ナデ、沈線文、刺突文	赤褐色 黒褐色	○	○	○					
		178	6	平	楕	口縁部	深鉢	D-5	737	VII	147.63	不良	内・工具ナデ 外・沈線、刺突、突帯キザミ	赤褐色 赤褐色	○	○		○	○			
		179	6	平	楕	胴部	壺	A-6	1359	VIII	147.51	良好	内・ナデ 外・沈線、刺突、突帯キザミ	暗褐色 黄褐色	○	○	○					
		180	6	平	楕	胴部	深鉢	D-4	759	VIII	147.71	良好	内・ナデ 外・沈線、刺突	黄灰色 黄灰色	○	○	○					
		181	6	平	楕	胴部	深鉢	D-5	740	VIII	147.56	良好	内・ナデ 外・沈線、刺突	黄灰色 灰褐色	○	○	○					
		182	6	平	楕	胴部	深鉢	D-5	748	VIII	147.77	良好	内・ケズリ 外・ケズリ、突帯キザミ	黄灰色 黄灰色	○	○	○					
		183	6	平	楕	口縁部	壺	D-8	634	VII	147.19	不良	内・ナデ 外・沈線、刺突	灰色 灰色	○	○	○					
		184	6	平	楕	口縁部	壺	A-6	1352	VII	147.3	不良	内・ナデ 外・沈線、キザミ	赤褐色 赤褐色		○		◎	○			185と同一個体
		185	6	平	楕	口縁部	壺	A-5	1073	VIII	147.5	不良	内・ナデ 外・沈線、キザミ	赤褐色 赤褐色		○		◎	○			184と同一個体
		186	6	平	楕	口縁部	壺	A-7	1176	VII	147.39	良好	内・ナデ 外・沈線、キザミ、刺突	赤褐色 赤褐色				△	○			
		187	6	平	楕	口縁部	壺	A-7 A-7	1086 1177	VIII VIII	147.25 147.2	良好	内・ナデ 外・沈線、押し引状沈線、突帯	茶褐色 茶褐色		○		○	○			188, 189, 190と同一個体
		188	6	平	楕	胴部	壺	A-7	1085	VIII	147.15	良好	内・ナデ 外・沈線、押し引状沈線、突帯	赤褐色 赤褐色		○		○	○			187, 189, 190と同一個体
		189	6	平	楕	胴部	壺	A-7	1172	VIII	147.11	良好	内・ナデ 外・沈線、押し引状沈線、突帯	赤褐色 赤褐色		○		○	○			187, 188, 190と同一個体
		190	6	平	楕	胴部	壺	A-7 A-7 A-7	1178 1171 1169	VIII VII VII	147.13 147.34 147.38	良好	内・ナデ 外・押し引状沈線	赤褐色 赤褐色				○	○			187, 188, 189と同一個体
		191	6	平	楕	胴部	深鉢	A-7 A-8 A-7	1162 1396 1163	VII VIII VIII	147.26 146.98 147.11	良好	内・ナデ 外・ナデ	暗褐色 暗褐色				○	○			
		192	6	平	楕	底部	不明	A-8	1147	VIII	146.9	良好	内・ナデ 外・ナデ	赤褐色 赤褐色		○		○	○			底径6.8cm。 やや上げ底である
		193	6	平	楕	底部	不明	A-6 A-6	9148 90	VII VII	147.49 147.62	不良	内・ナデ 外・ナデ	赤褐色 赤褐色				○	○			底径8cm
		194	6	平	楕	底部	不明	B-9	1439	VIII	146.57	良好	内・ケズリ 外・ナデ	黒褐色 赤褐色		○		○	○			底径8cm

7 類土器 (第22図, 第23図195~228)

7 類土器は手向山式土器である。総数で57点が出土したが、接合の結果、資料数は56点となり、34点を図示した。器形の全容が分かる資料は出土していない。これまでの出土例から口縁部は緩やかに外反し、頸部でわずかに締まり、胴部下半で強く屈曲し、口縁径に比較して小さな底部に至る深鉢形土器である。壺形土器が伴うことが知られているが、出土資料の中には含まれていない。

文様のバリエーションが多いので、7 a 類~7 f 類に細分した。分布状況を見てみると、細分類した類ごとにまとまる傾向は特に見られないが、7 類全体は5区と6区に多く出土している。

7 a 類は総数で6点出土したが、3点 (195~197) を図示した。押捺するように縄文を施す点の特徴である。195と196は口縁部の破片である。内外面に縄文を施し、195の口唇部平坦面にも縄文が施される。197は胴部破片で縦位に縄文が施される。

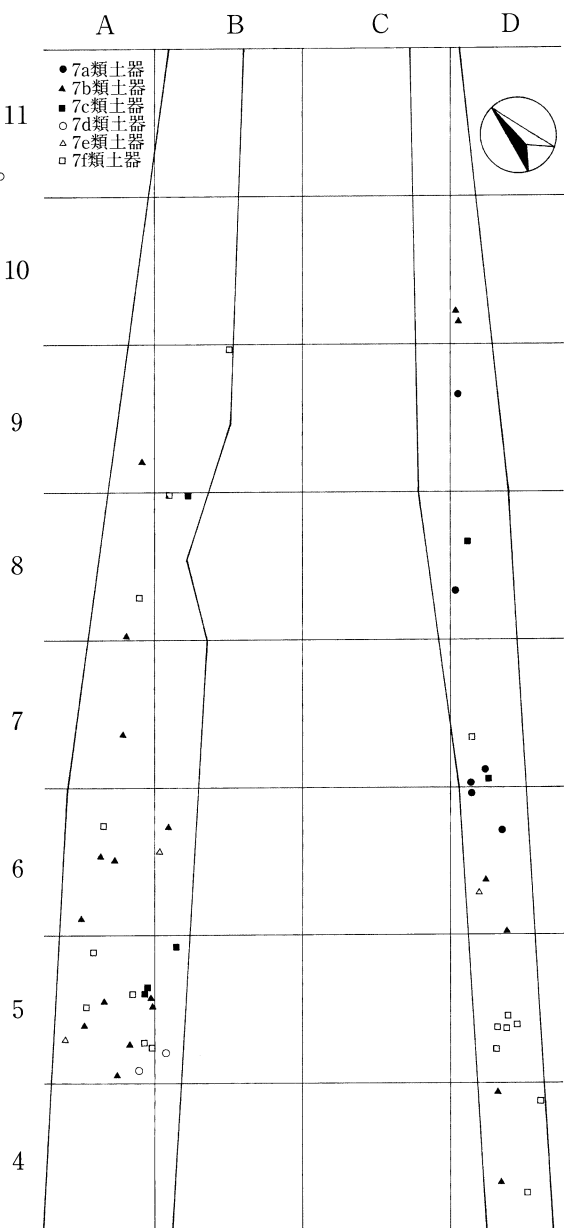
7 b 類は総数で21点出土したが、13点 (198~210) を図示した。外面に曲線的な変形撚糸文を施すが、口縁部内面が無施文である点の特徴である。199は口縁部である。内面はヘラケズリ後ミガキ調整されている。200, 203, 204は胎土、文様、色調などが共通することから同一個体であると思われる。210は底部である。10接地面付近まで施文されていることが確認できる。

7 c 類は総数で6点出土し、全部 (211~216) を図示した。外面に格子状の撚糸文を施すが、口縁部内面は無施文である。調整や文様が粗雑な印象を受ける。

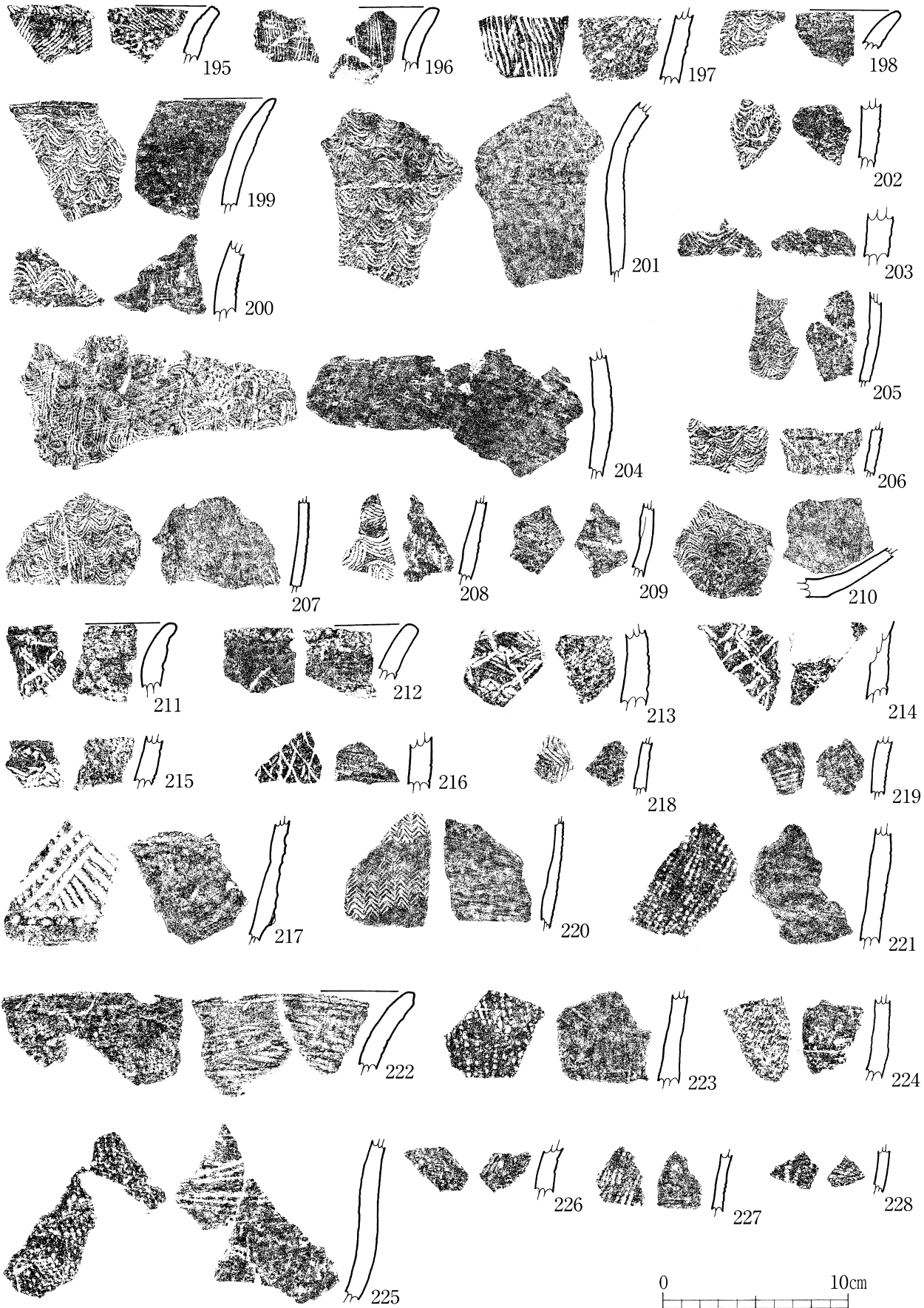
7 d 類は1点 (217) だけである。胴部下半の屈曲部の資料で、外面には交差する沈線文が施され、屈曲部には突帯が貼付される。突帯上には連続したキザミが施される。

7 e 類は総数で3点出土し、全部 (218~220) を図示した。山形押型文が施されるが、いわゆる押型土器に比較して文様は繊細で、施文が浅いという特徴がある。220の外面に残された施文スパンは2.8cm×1.7cmであることが確認できる。焼成後の数値から算出された施文具は径6mm、長さ2.8cm程度の棒状である。焼成に伴う収縮を考慮すると、この数値より2割程度大きいサイズの施文具が使用されたものと思われる。

7 f 類は総数で17点出土し、接合の結果、資料数は16点となり、8点 (221~228) を図示した。外面に擬縄文が施されるが、内面は無施文のままである。222は口縁部の資料である。外面に擬縄文が施されるが、内面はヘラケズリのままの粗雑な調整である。



第22図 7 類土器の分布 (S=1/500)



第23図 7類土器

表13 土器観察表9 (早期7類)

△少量 ○普通 ◎多量

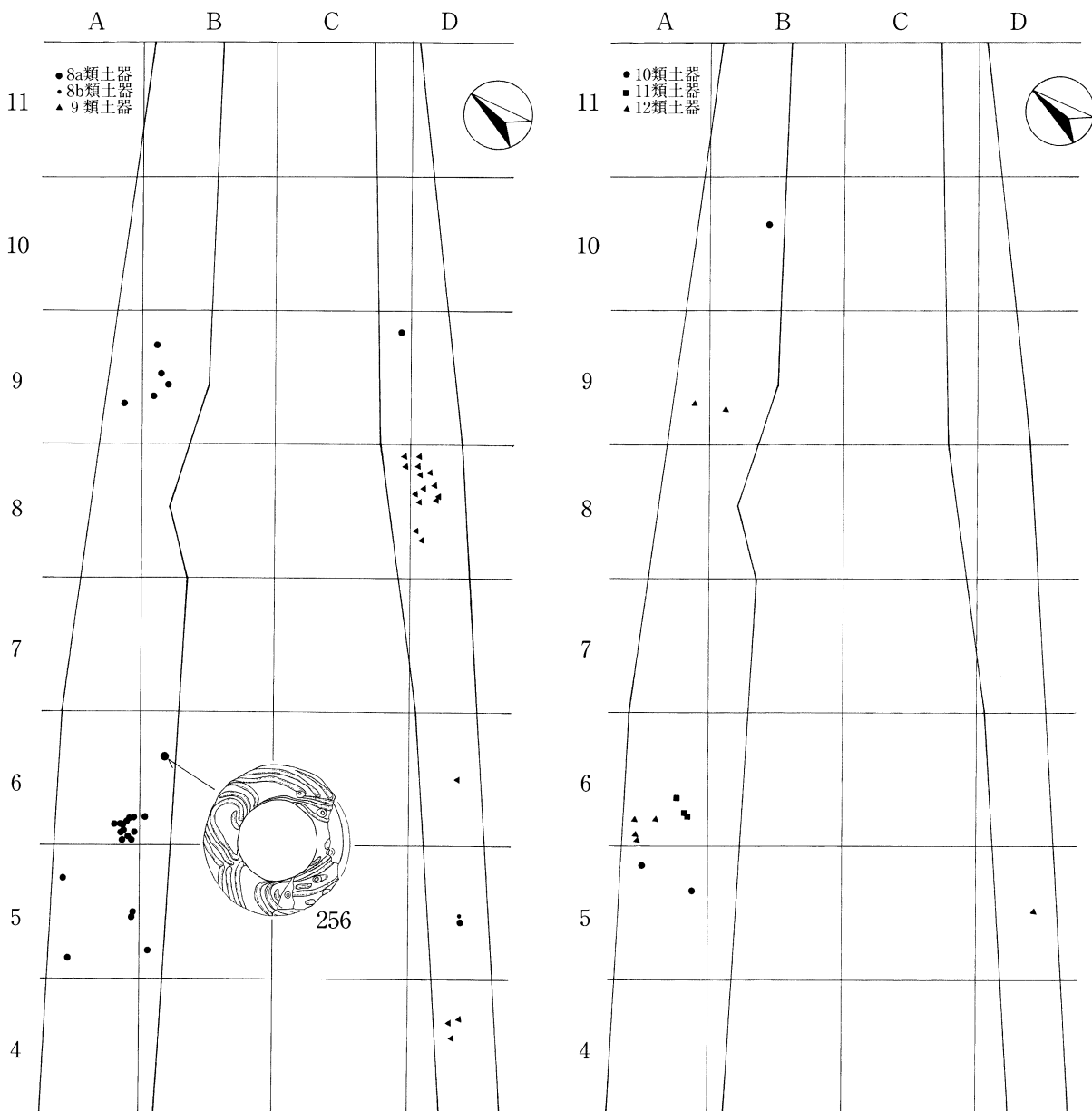
挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考		
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫	
第 23 図	195	7a	手向山	口縁部	深鉢	D-7	660	Ⅶ	147.54	良好	内・ケズリ、ナデ、縄文 外・ナデ、縄文	赤褐色 赤褐色		○		○	○			口唇部にも縄文
	196	7a	手向山	口縁部	深鉢	D-7	655	Ⅷ	147.17	良好	内・ナデ、縄文 外・ナデ縄文	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○	○	○				口唇部にも縄文
	197	7a	手向山	胴部	深鉢	D-9	32	Ⅶ	146.24	良好	内・摩滅 外・ナデ、縄文	淡褐色 淡褐色	○	○	○					
	198	7b	手向山	口縁部	深鉢	A-7	1164	Ⅷ	147.1	良好	内・ナデ 外・変形擦糸文	黄灰色 黄灰色	○	○	○					
	199	7b	手向山	口縁部	深鉢	A-5	1054	Ⅶ	147.6	良好	内・ケズリ後ミガキ 外・変形擦糸文	暗褐色 灰褐色	○	○	○					
	200	7b	手向山	胴部	深鉢	D-4	762	Ⅷ	147.58	良好	内・ケズリ後ヘラナデ 外・変形擦糸文	茶褐色 黄褐色	○	○	○			小 礫	203, 204と同一個体	
	201	7b	手向山	頸部	深鉢	A-5	1049	Ⅶ	147.69	良好	内・ケズリ後ヘラナデ 外・変形擦糸文	灰褐色 暗褐色	○	○	○					
	202	7b	手向山	胴部	深鉢	A-5	1039	Ⅷ	147.59	良好	内・ケズリ後ミガキ 外・変形擦糸文	黒褐色 赤褐色	○	○	○					
	203	7b	手向山	胴部	深鉢	D-10	41	Ⅶ	145.75	良好	内・ケズリ 外・変形擦糸文	赤褐色 赤褐色	○	○	○					200, 204と同一個体
	204	7b	手向山	胴部	深鉢	A-5	1043	Ⅷ	147.56	良好	内・ケズリ後ミガキ 外・変形擦糸文	茶褐色 黒褐色	○	○	○					200, 203と同一個体
	205	7b	手向山	胴部	深鉢	A-6	941	Ⅷ	147.78	良好	内・摩滅 外・変形擦糸文	暗黄灰色 黄褐色	○	○	○					
	206	7b	手向山	胴部	深鉢	A-6	1416	Ⅳ	147.18	良好	内・ナデ 外・変形擦糸文	黒褐色 淡黄褐色	○	○	○					
	207	7b	手向山	胴部	深鉢	D-6	698	Ⅶ	147.52	良好	内・ケズリ後ヘラナデ 外・変形擦糸文	黒褐色 淡黄褐色	○	○	○					
	208	7b	手向山	胴部	深鉢	D-4	782	Ⅶ	147.88	良好	内・ケズリ後ヘラナデ 外・変形擦糸文	暗褐色 赤褐色	○	○	○					
	209	7b	手向山	胴部	深鉢	A-9	1264	Ⅷ	146.89	良好	内・ナデ 外・変形擦糸文	黒褐色 黄褐色	○	○	○					
	210	7b	手向山	底部	深鉢	D-6	810	Ⅷ	147.41	良好	内・ケズリ後ヘラナデ 外・変形擦糸文	黒褐色 黒褐色	○	○	○					
	211	7c	手向山	口縁部	深鉢	D-7	665	Ⅷ	147.23	良好	内・摩滅 外・格子状擦糸文	黄褐色 黒褐色	○	○	○					
	212	7c	手向山	口縁部	深鉢	B-8	1140	Ⅷ	147.02	良好	内・工具ナデ 外・格子状擦糸文	灰色 黒褐色	○	○						
	213	7c	手向山	胴部	深鉢	A-5	1066	Ⅷ	147.67	良好	内・ナデ 外・格子状擦糸文	黄褐色 黒褐色	○	○	○					
	214	7c	手向山	胴部	深鉢	D-8	604	Ⅷ	146.77	良好	内・ナデ 外・格子状擦糸文	茶褐色 黒褐色	○	○	○					
	215	7c	手向山	胴部	深鉢	B-5	1379	Ⅶ	147.61	良好	内・ナデ 外・格子状擦糸文	暗褐色 暗褐色	○	○	○					
	216	7c	手向山	胴部	深鉢	A-5	1380	Ⅷ	147.46	良好	内・工具ナデ 外・格子状擦糸文	淡褐色 灰褐色	○	○	○					
	217	7d	手向山	胴部	深鉢	B-5	1035	Ⅷ	147.61	良好	内・工具ナデ 外・沈線、突帯キザミ	黒褐色 黒褐色	○	○	○					
	218	7e	手向山	胴部	深鉢	A-5	1050	Ⅷ	147.69	良好	内・ナデ 外・山形押型文	赤褐色 赤褐色	○	○			○	○		
	219	7e	手向山	胴部	深鉢	D-6	702	Ⅶ	147.65	良好	内・ナデ 外・山形押型文	黄灰色 黄灰色	○	○			○	○		
	220	7e	手向山	胴部	深鉢	B-6	1314	Ⅷ	147.23	良好	内・丁寧なナデ 外・山形押型文	淡褐色 淡褐色	○	○	○					施文原体幅2.8cm×1.7cm径6mm×長さ2.8cmの棒状施文具
	221	7f	手向山	胴部	深鉢	A-5	1037	Ⅷ	147.64	不良	内・丁寧なナデ 外・クシ状工具による擬縄文	暗褐色 淡褐色	○	○		△	○	○		223と同一個体
	222	7f	手向山	口縁部	深鉢	D-5 D-5	731 791	Ⅷ Ⅷ	147.52 147.49	良好	内・ヘラナデ、ケズリ 外・クシ状工具による擬縄文	黒褐色 黒褐色	○	○				砂 粒	凝灰岩質の砂粒	
	223	7f	手向山	胴部	深鉢	A-5	1069	Ⅷ	147.63	不良	内・ヘラ 外・クシ状工具による擬縄文	淡褐色 灰褐色	○	○		△	○			221と同一個体
	224	7f	手向山	胴部	深鉢	D-5	743	Ⅷ	147.49	良好	内・ケズリ後ミガキ 外・クシ状工具による擬縄文	暗褐色 暗褐色	○	○	○					
225	7f	手向山	胴部	深鉢	D-5	732	Ⅷ	147.44	良好	内・ケズリ後ナデ 外・クシ状工具による擬縄文	灰褐色 灰褐色	○	○	○						
226	7f	手向山	胴部	深鉢	D-5	792	Ⅷ	147.53	良好	内・ナデ 外・クシ状工具による擬縄文	灰褐色	○	○	○						
227	7f	手向山	胴部	深鉢	A-5	1036	Ⅷ	147.51	良好	内・丁寧なナデ 外・クシ状工具による擬縄文	黒褐色 黒褐色	○				○				
228	7f	手向山	胴部	深鉢	A-6	1330	Ⅳ	147.6	良好	内・ナデ 外・クシ状工具による擬縄文	茶褐色 茶褐色	○				○	○			

8 類土器 (第24図, 第26図229~240)

塞ノ神 A a 式に相当するものを一括した。抽出できた総数は27点で、接合の結果、資料数は25点となり、12点を図示した。器形の全容がわかるような大きな資料は出土していないが、口縁部がラッパ状に広がった深鉢形土器と無頸の壺形土器が存在することが知られている。深鉢形土器は沈線文、網目状捺糸文、微隆起突帯を組み合わせた文様が一般的である。

深鉢形土器を7 a 類, 壺形土器を7 b 類に細分した。深鉢形土器は微隆起突帯の有無によりさらに細分できる。7 類の分布状況を見ると、9 区を中心とする一群と5 区・6 区を中心とする一群があることがわかる。

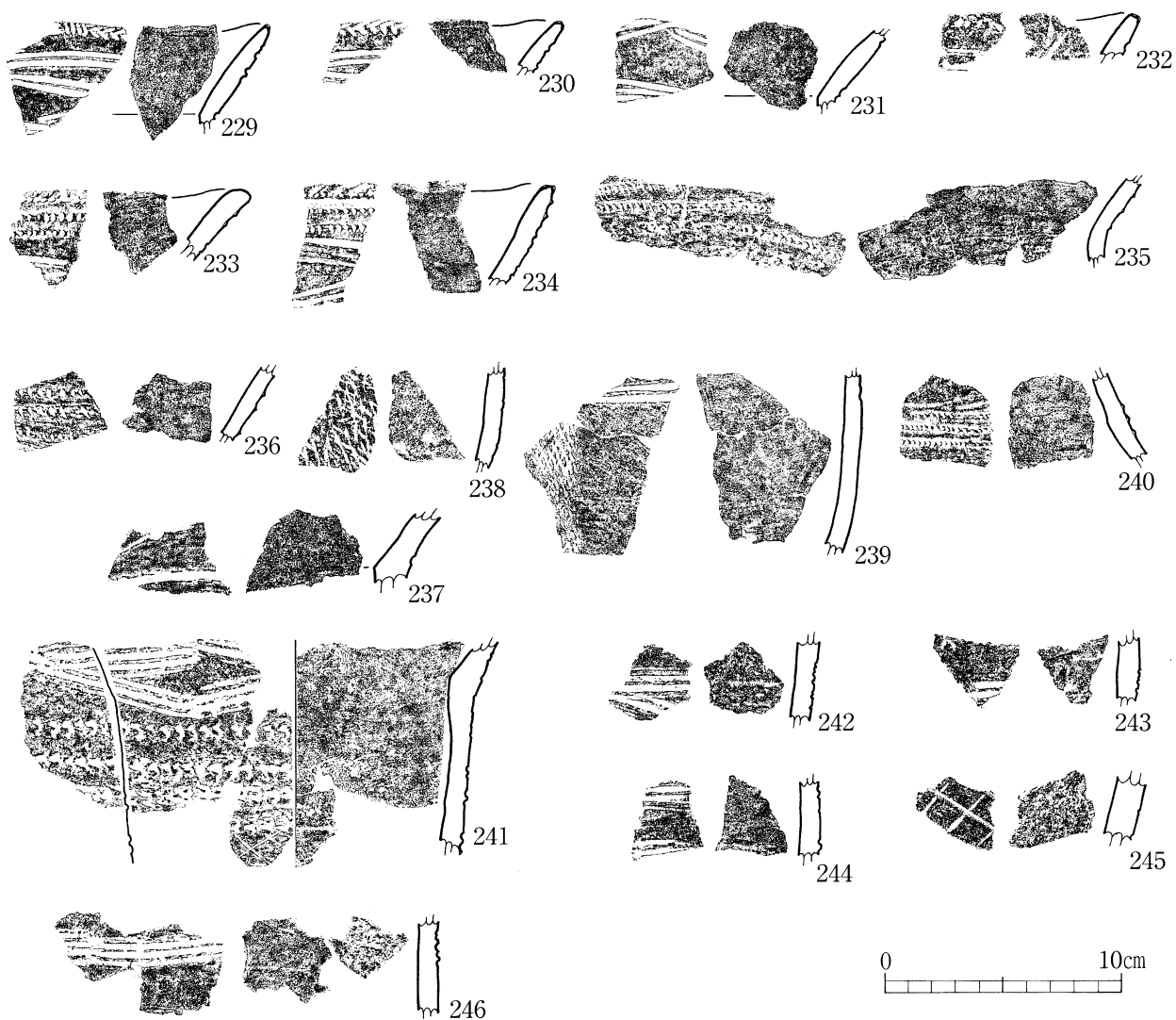
8 a 類は11点 (229~239) を図示した。229~231はA - 9 区から出土した同一個体の口縁部であ



第24図 8 類土器・9 類土器の分布 (S=1/500) 第25図 10 類土器~12 類土器の分布 (S=1/500)

る。4ヶ所の山を持つラッパ状の山形口縁となる。口唇部にはキザミに類似した短沈線文が羽状に施され、外面には沈線文が施される。内面はヘラミガキ状の丁寧なナデ調整である。頸部の屈曲は明瞭で、鋭角的である。胎土には、石英、長石のほか金雲母と白色の砂が混入されている。233～236は6区から出土した口縁部及び頸部の破片である。これらは沈線文に加えて、微隆起突帯を貼り付け、突帯に細かなキザミを施す。また、口唇部にも細かなキザミが施される。内面は丁寧なナデ調整である。235でわかるように頸部の屈曲は緩やかである。胎土には、石英、長石、角閃石が含まれるが、金雲母や白色の砂の混入は確認されない。237は頸部破片である。口縁部との境の屈曲は鋭く、屈曲部の外面には1条の沈線が巡らされる。238と239は胴部破片である。238の外面には網目状撚糸文が施される。外面調整は粗雑である。239はA-5区から出土した2点が接合した資料である。外面には器壁を巡る2条の平行沈線と縦位の網目状撚糸文が施される。内面は丁寧なナデで仕上げられている。

8b類は240の1点だけである。口縁部がすぼまる無頸の壺形土器の口縁直下の破片である。3条の微隆起突帯が巡らされ、突帯には細かなキザミが施される。



第26図 8類土器・9類土器

9 類土器 (第24図, 第26図241~246)

塞ノ神 B c 式に相当するものを一括した。総数で18点を抽出したが、接合の結果、資料数は17点となり、6点(241~246)を図示した。器形の全容がわかるような大きな資料は出土していないが、8類と同様で、ラッパ状に開いた口縁部を持つ深鉢形土器である。9類に伴う壺形土器は知られていない。8類と異なるのは、施文具に貝殻を用いる点である。また、8類と比較すると土器が大型となる傾向があるが、本遺跡例では241に見られるような小型の資料が出土している。

分布状況を見ると、D-8区に集中しており、8類土器の分布域とは異なっていることがわかる。

241は頸部から胴部にかけての破片である。頸部の屈曲部の上部には3~4条の沈線により菱形の文様が描かれる。胴部上半には2~3条の肋を持つ貝殻を用いて4段の刺突文が施される。胴部下半には格子状の細沈線文が施される。内面は丁寧なナデ調整で、胎土に金雲母と白色の砂粒を混入している。242~244・246は胴部破片で、文様、胎土、色調から同一個体であると思われる。内面は丁寧なナデ調整で、外面にはヘラミガキ状の調整が施された後に、3~4条程度の平行沈線文が施される。

10類土器 (第25図・第27図247~249)

細沈線文を施す土器で、型式名は不明である。総数で5点を抽出し、3点(247~249)を図示した。いずれも焼成が不良な脆弱な土器である。器形の全容がわかる資料は出土していない。247は外面上部に細沈線が施される。内面はナデ調整、外面はヘラナデ調整である。248と249は文様、胎土、色調から同一個体であると思われる。外面にはクシ状工具による平行な細沈線文が施される。胎土に金雲母と白色の砂粒を混入している。

11類土器 (第25図・第27図250)

短沈線を羽状に施文する土器である。1類土器との関連が深いと思われる。総数で3点を抽出し、接合の結果、資料数は2点となり、1点(250)を図化した。250はA-6区で出土した2点が接合したものである。焼成は不良で、内面が剥落している。外面には短沈線が羽状に施される。胎土に金雲母と白色の砂を混入している。

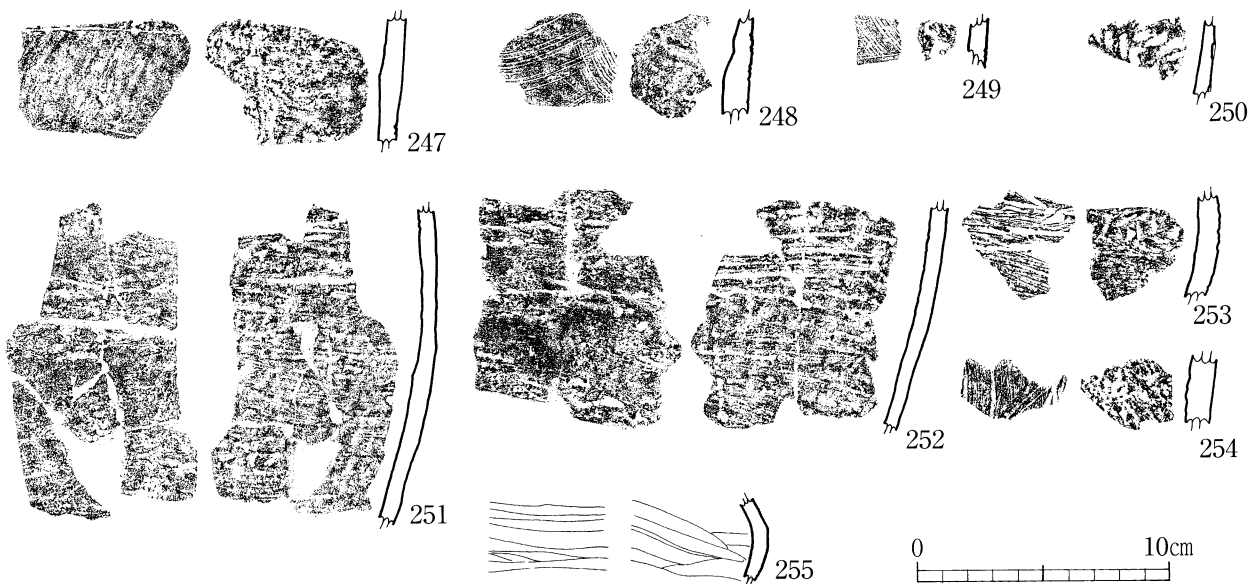
12類土器 (第25図・第27図251~255)

ハケ、草茎状工具、ヘラにより器面調整を行う土器である。文様は見られないが特徴的な資料5点(251~255)を図示した。251はA-6区から出土した3点が接合した資料である。内外面ともヘラケズリ調整である。252の内面はケズリ調整、外面はハケナデ調整である。253の内面はケズリ調整、外面は草茎状工具によるナデ調整である。254も253と同様な器面調整である。255は強く張り出した胴部破片である。内面は指ナデ調整、外面はヘラケズリ調整である。

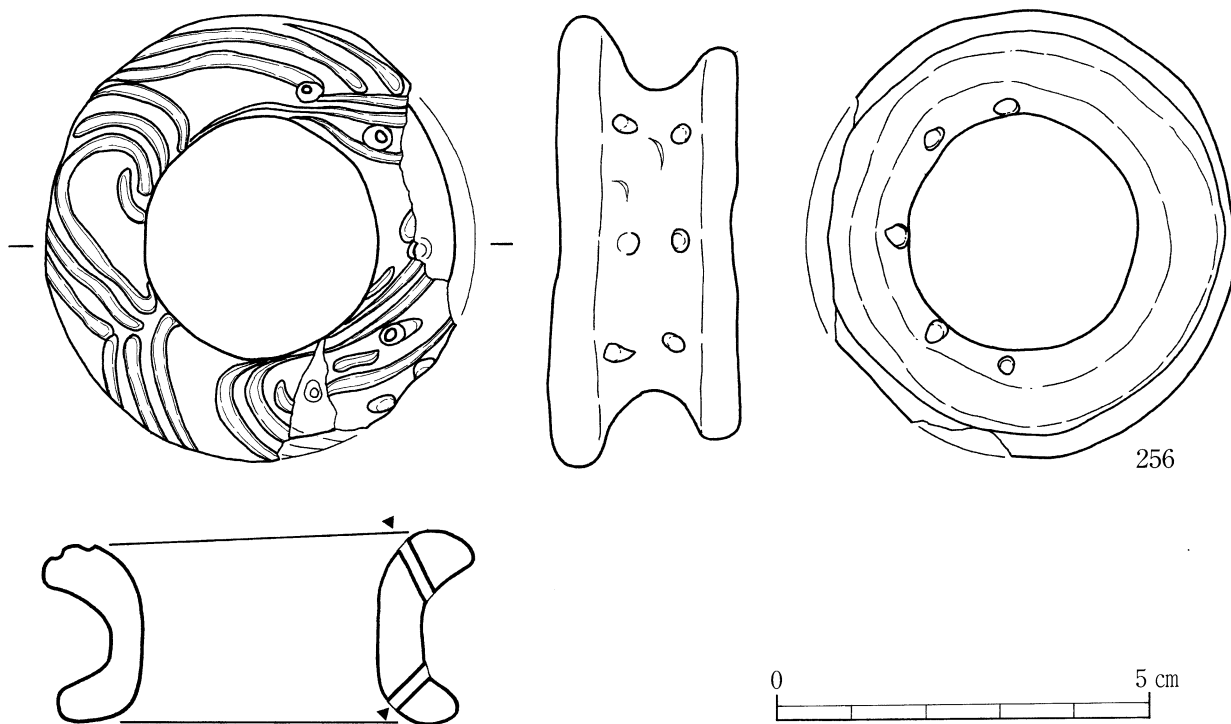
(2) 土製品 (第24図・第28図256)

粘土を成形し、焼成した製品である。256はいわゆる滑車形耳栓に類似するもので、耳栓状土製品として取り扱った。B-6区のⅧ層から出土した。文様とこれまでの出土例から、塞ノ神 A a 式土器に伴うものであると思われる。完形品であったが、発掘の際に一部が欠損した。形状は滑車形であるが、表の直径が裏の直径よりも大きいという特徴がある。表面の直径は約6.1cm、裏面の直径は約5.4cm、高さ2.4~2.7cm、厚さ0.4~0.6cm、重さ39gとなっている。

焼成は不良で、かなり脆弱である。器面調整は粗雑なナデ調整で、一部には爪の圧痕が残されている。器面調整の粗雑さは、塞ノ神A a 式土器の深鉢形土器の内面のミガキ状の丁寧な調整とは対照的である。胎土には長石、金雲母、白色の砂などが混入されている。表面にだけ3条を1単位とする曲線文が施され、裏面は無文のままである。表面に5ヶ所の穿孔が施され、裏面にも表面の穿



第27図 10類土器~12類土器



第28図 耳栓状土製品

孔に対応する位置に5ヶ所の穿孔が施されている。孔の直径は1.5mm~2.5mm程度であり、内側から外側に向けて穿孔されている。穿孔は全体に施されるわけではなく、片側に偏っている。穿孔の目的や用途は不明である。

表14 土器観察表10(早期8類~12類)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	類 別	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考		
													石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫	
第 26 図	229	8a	塞ノ神 A	口縁部	深鉢	B-9	1244	Ⅷ	146.68	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線、口唇部キザミ	淡茶褐色 淡茶褐色	○	○		○	○		230, 231と同一個体	
	230	8a	塞ノ神 A	口縁部	深鉢	B-9	1241	Ⅷ	146.76	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線	淡茶褐色 淡茶褐色	○	○		○	○		239, 231と同一個体	
	231	8a	塞ノ神 A	口縁部	深鉢	B-9	1435	Ⅷ	146.79	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線、口唇部キザミ	淡茶褐色 淡茶褐色	○	○		○	○		229, 230と同一個体	
	232	8a	塞ノ神 A	口縁部	深鉢	A-5	1045	Ⅷ	147.6	良好	内・ナデ 外・沈線、口唇部キザミ	淡黄褐色 淡灰褐色	○	○	○					
	233	8a	塞ノ神 A	口縁部	深鉢	A-6	899	Ⅶ	147.69	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線、微隆起突帯キザミ	黒褐色 黒褐色	○	○	○					
	234	8a	塞ノ神 A	口縁部	深鉢	A-6	1368	Ⅶ	147.63	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線、微隆起突帯キザミ	黄灰色 黒褐色	○	○	○					
	235	8a	塞ノ神 A	頸部	深鉢	A-6 A-6	1371 926	Ⅷ Ⅷ	147.49 147.82	良好	内・ヘラナデ 外・微隆起突帯キザミ	黄灰色 黒褐色	○	○	○					
	236	8a	塞ノ神 A	口縁部	深鉢	B-6	1309	Ⅶ	147.46	良好	内・丁寧なナデ 外・微隆起突帯キザミ	黄灰色 黒褐色	○	○	○					
	237	8a	塞ノ神 A	頸部	深鉢	A-5	825	Ⅶ	147.79	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線	淡黄灰色 淡黄灰色	○	○	○					
	238	8a	塞ノ神 A	胴部	深鉢	C-9	35	Ⅶ	145.94	良好	内・ナデ 外・網目状燃糸文	黄灰色 黄灰色	○	○	○					
	239	8a	塞ノ神 A	胴部	深鉢	A-5 A-5	1058 1057	Ⅷ Ⅷ	147.66 147.68	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線文、網目状燃糸文	赤褐色 黒褐色	○	○	○					
	240	8b	塞ノ神 A	胴部	壺	D-5	722	Ⅶ	147.72	良好	内・丁寧なナデ 外・微隆起突帯キザミ	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○	○					
	241	9	塞ノ神 B	頸・胴部	深鉢	D-8	628	Ⅶ	147.06	良好	内・工具ナデ 外・沈線文、貝殻腹縁刺突文	茶褐色 茶褐色				○	○			
	242	9	塞ノ神 B	胴部	深鉢	D-8	817	Ⅶ	147.97	良好	内・工具ナデ 外・沈線文	黒褐色 黒褐色	○	○	○					
	243	9	塞ノ神 B	胴部	深鉢	D-8	598	Ⅶ	146.91	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線文	黒褐色 淡茶褐色	○	○	○					
	244	9	塞ノ神 B	胴部	深鉢	D-8	818	Ⅷ	146.84	良好	内・丁寧なナデ 外・沈線文	淡茶褐色 暗褐色	○	○	○					
	245	9	塞ノ神 B	胴部	深鉢	D-4	768	Ⅷ	147.72	良好	内・摩滅 外・格子状沈線文	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○	○					
	246	9	塞ノ神 B	胴部	深鉢	D-8 D-8	607 597	Ⅶ Ⅶ	147.02 146.83	良好	内・ナデ 外・沈線文	淡茶褐色 黒褐色	○	○	○					
	第 27 図	247	10	不明	胴部	深鉢	B-10	1469	Ⅷ	146.42	不良	内・ナデ 外・ヘラナデ、細沈線文	暗褐色 暗褐色		○		○	○		
		248	10	不明	胴部	深鉢	A-5	1067	Ⅷ	147.66	不良	内・ナデ 外・丁寧なナデ、細沈線文	淡茶褐色 淡茶褐色	○	○		○	○		クシ状工具による施文
249		10	不明	胴部	深鉢	A-4 A-5	一括	Ⅷ		不良	内・剥落 外・ナデ、細沈線文	暗褐色 暗褐色				○	○			
250		11	不明	胴部	深鉢	A-6 A-6	872 898	Ⅶ Ⅶ	147.69 147.73	不良	内・剥落 外・ナデ、羽状の沈線文	暗茶褐色 暗茶褐色	○			○	○			
251		12	不明	胴部	深鉢	A-6 A-6 A-6	846 894 1355	Ⅶ Ⅶ Ⅷ	147.76 147.74 147.54	良好	内・ケズリ 外・ケズリ	暗黄褐色 暗黄褐色					○			
252		12	不明	胴部	深鉢	A-6	1354	Ⅷ	147.5	良好	内・ケズリ 外・ハケナデ	暗黄褐色 暗黄褐色	○	○	○					
253		12	不明	胴部	深鉢	B-9	1234	Ⅷ	146.8	不良	内・ケズリ 外・ハケナデ	暗褐色 暗褐色					○	○		
254		12	不明	胴部	深鉢	A-9	962	Ⅷ	146.96	不良	内・ナデ 外・ハケナデ	暗褐色 暗褐色					○	○		
255		12	不明	胴部	壺?	D-5	789	Ⅷ	147.48	良好	内・指ナデ 外・ケズリ	暗黄褐色 暗褐色	○	○	○					

(3) 石器

石材 (表15, 表16, 第29図)

石器の石材について剥片石器と礫塊石器に分けて説明する。石材の分類は肉眼観察による分類であり、理化学的な分析の結果に基づくものではない。

剥片石器の石材としては、チャート、黒曜石、安山岩が主に使用されている。これらの石材は石質によってさらに細分類が可能であり、以下のとおりに細分した。

なお、石材名の頭部のアルファベットは表15・表16・石器観察表の石材名の欄に対応する。

A チャート1 節理が観察され、黒色、灰色、淡白色を呈する。5区～6区にかけた部分と8区～9区にかけた部分に集中が見られる。本遺跡で最も多用された石材であり、剥片と二次加工品を併せると131点(64.2%)出土し、総重量は約326g(51.9%)となっている。二次加工品としては、石鏃及びその未製品、石匙などが出土している。

B チャート2 節理が見られない良質の石材。青灰色を呈する。A-6区の一部に集中して出土した。剥片だけが8点(3.9%)出土し、二次加工品は出土していない。

C 黒曜石1 白色の不純物を多く含み、光にかざすと灰色を呈する。石鏃未製品1点を含めて15点(7.4%)出土した。

D 黒曜石2 白色の不純物を含み、光にかざすとやや赤みを帯びている。石鏃未製品1点を含めて10点(4.9%)出土した。

E 黒曜石3 不純物を含まないやや粒子の粗い黒曜石。ガラス質の光沢感には欠ける。石鏃未製品1点を含めて4点(2%)出土した。

F 黒曜石4 光線が透過しない黒曜石。見た目は石炭のようである。新鮮な割れ口はガラス質の光沢を有するが、風化面はくすんで光沢が見られない。鹿児島県樋脇町上牛鼻または同県市来町平木場産の黒曜石と推定される。剥片だけが1点出土した。

G 黒曜石5 不透明でガラス質の光沢感に欠ける。色調は灰色を呈する。粒子は粗く、表面はややざらつく。大分県姫島産の黒曜石である。剥片だけが1点出土した。

H 黒曜石6 不純物を含まない良質の黒曜石。ガラス質の光沢があり、色調は黒色を呈する。佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石だと思われる。剥片だけが1点出土した。

I 黒曜石7 透明感のある淡褐色の黒曜石。鹿児島県大口市桑木水流産の黒曜石だと思われる。剥片は出土せず、石鏃1点が表面採集された。

J 黒曜石8 ガラス質の光沢はあるが透明感に欠ける。黒色の縞状の文様が見える。石鏃2点が出土しただけで、剥片は出土していない。

K 安山岩1 表面は風化し、やや黒みがかかる。わずかに白色の不純物を含むが、粒子が細かい良質の石材。石鏃1点と剥片8点が出土した。

L 安山岩2 表面は風化して灰色がかかる。粒子はやや粗い。剥片8点、石鏃4点、スクレーパー1点の合計13点(6.4%)が出土し、総重量は約125g(19.9%)となっている。剥片石器の素材としてはチャート1について多用されている石材である。

M 安山岩3 表面は暗い灰色を呈する。珪素が多く含まれる。ハリ質安山岩とも呼ばれる。石鏃未製品が1点採集されている。

N ホルンフェルス 2点の剥片が出土した。元来は剥片石器の石材には適さない石材であり、石斧などの調整剥片の可能性が大きい。ただし、この石材を用いた石斧は出土していない。

O 頁岩 表面が風化し、黄白色を呈する。剥片だけが1点出土した。

P 変成岩 熱変成を受けたと思われる石材で、剥片だけが1点出土した。

Q 流紋岩 剥片が1点だけ出土した。

R 赤色チャート 石鏃が1点出土しただけで、剥片は出土していない。

礫塊石器としては、磨石5点、石皿1点、石斧1点が出土しただけであり、資料数が少ないので有効な分析や検討は不可能である。

磨石の石材としては鉱物結晶が発達した安山岩が使用されている。磨石、敲石類に使用される石材としては一般的なものである。石皿の石材は砂岩である。安山岩と並んで一般的な石材である。石斧の石材は砂岩である。ホルンフェルス、粘板岩などと並んで一般的な石材である。

石鏃（第31図257～266・第32図275・276）

早期の包含層はⅦ層とⅧ層であるが、後世の攪乱により現位置から移動したと思われる資料もここで取り扱った。出土した12点すべてを図化した。使用されている石材は、チャート、安山岩、黒曜石などである。

257は赤色チャートの剥片が素材の完形品である。同種の石材を用いているのはこの1点だけで、剥片も出土していない。258は安山岩の剥片を素材とする。片脚が欠損している。二次加工の剥離面

表15 剥片石器の石材別点数

石 材		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
剥 片	点 数	122	8	14	9	3	1	1	1	0	0	8	8
	比率 (%)	67.4	4.4	7.7	5	1.7	0.6	0.6	0.6	0	0	4.4	4.4
二次加工品	点 数	9	0	1	1	1	0	0	0	1	2	1	5
	比率 (%)	39.1	0	4.4	4.4	4.4	0	0	0	4.4	8.7	4.4	21.7
合 計	点 数	131	8	15	10	4	1	1	1	1	2	9	13
	比率 (%)	64.2	3.9	7.4	4.9	2	0.5	0.5	0.5	0.5	1	4.4	6.4

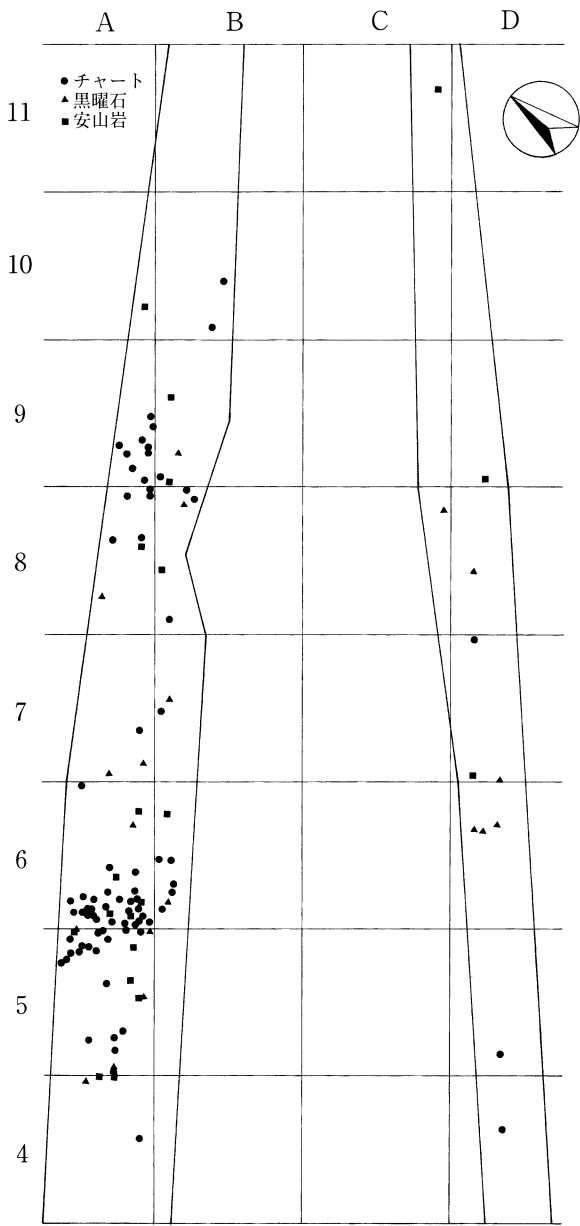
石 材		M	N	O	P	Q	R	合 計
剥 片	点 数	1	1	1	1	0	2	181
	比率 (%)	0.6	0.6	0.6	0.6	0	1.1	
二次加工品	点 数	1	0	0	0	1	0	23
	比率 (%)	4.4	0	0	0	4.4	0	
合 計	点 数	2	1	1	1	1	2	204
	比率 (%)	1	0.5	0.5	0.5	0.5	1	

表16 剥片石器の石材別重量

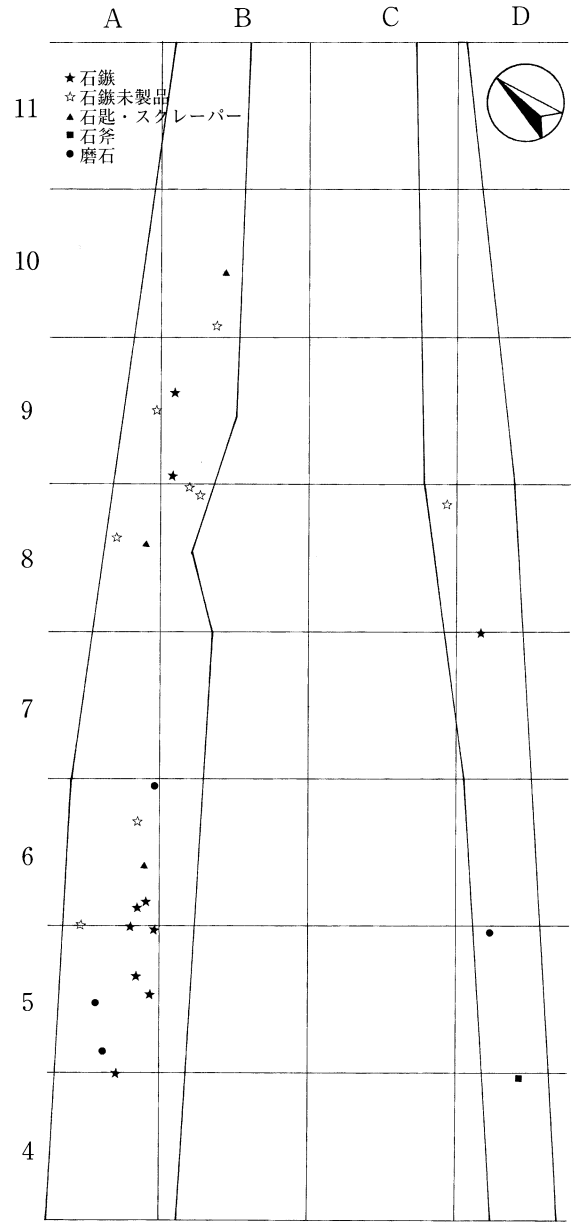
石 材		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
剥 片	重量 (g)	253.46	5.6	32.6	46.3	0.7	1.2	6.3	0.5	0	0	35.1	102.2
	比率 (%)	48.7	1.1	6.3	8.9	0.1	0.2	1.2	0.1	0	0	6.7	19.6
二次加工品	重量 (g)	73.01	0	1.13	2.21	3.54	0	0	0	0.32	3.19	0.62	22.94
	比率 (%)	67.3	0	1	2	3.3	0	0	0	0.3	2.9	0.6	21.2
合 計	重量 (g)	326.47	5.6	33.73	48.51	4.24	1.2	6.3	0.5	0.32	3.19	35.72	125.14
	比率 (%)	51.9	0.9	5.4	7.7	0.7	0.2	1		0.5	5.7	19.9	

石 材		M	N	O	P	Q	R	合計
剥 片	重量 (g)	1.1	5.6	2.4	1.5	0	26.1	520.66
	比率 (%)	0.2	1.1	0.5	0.3	0	5	
二次加工品	重量 (g)	0.96	0	0	0	0.49	0	108.41
	比率 (%)	0.9	0	0	0	0.45	0	
合 計	重量 (g)	2.06	5.6	2.4	1.5	0.49	26.1	629.07
	比率 (%)	0.3	0.9	0.4	0.2		4.1	

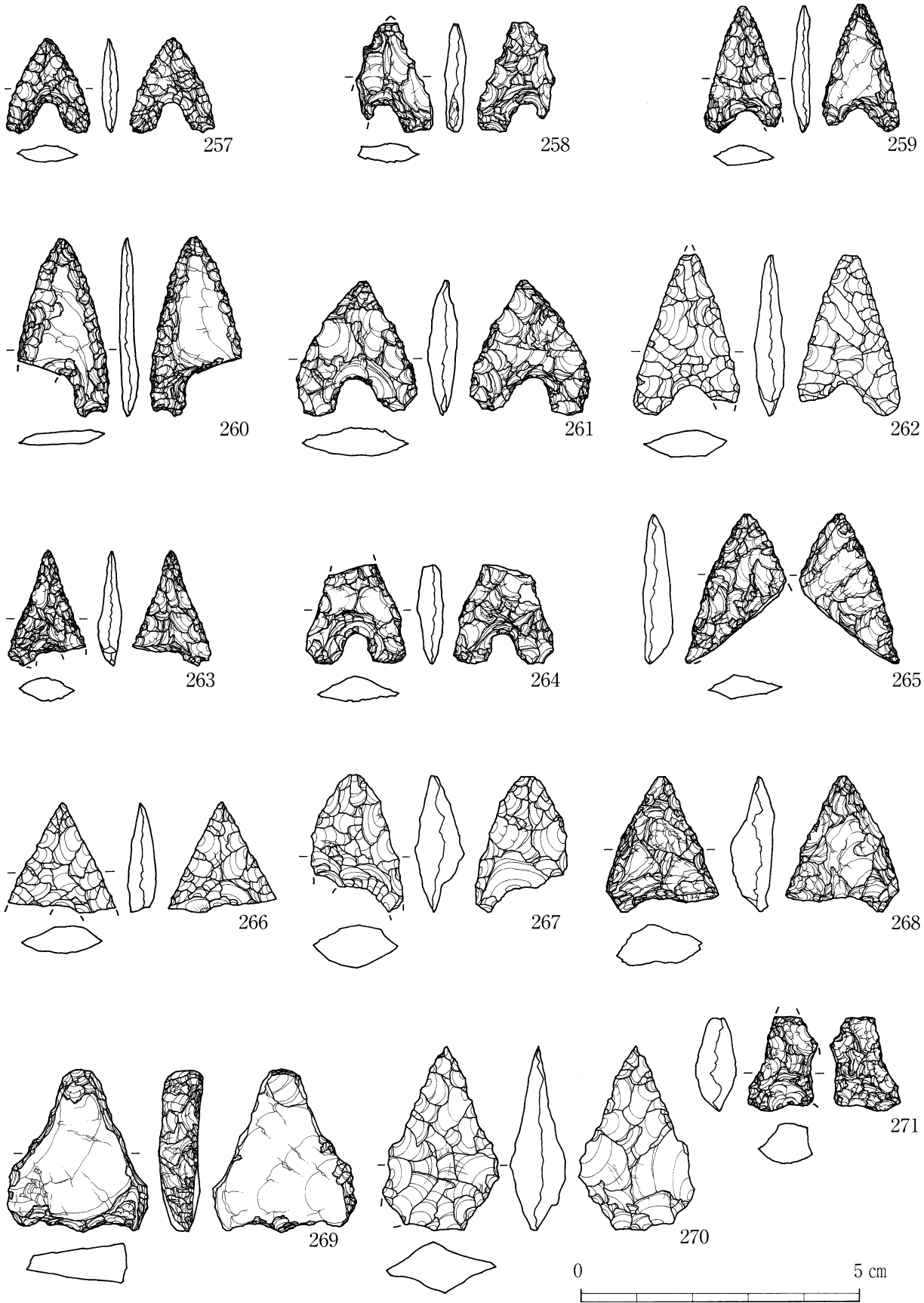
が大きいことから、未製品とするのが適切かもしれない。259も安山岩の剥片を素材とする。片脚端部が欠損し、主要剥離面は大きく残される。260も安山岩の剥片を素材とする。二次加工の剥離は浅く、素材剥片の剥離面のほとんどが残されている。261はチャート剥片製の完形品である。形状的には257に類似する。262は黒曜石の剥片を素材とする。片脚端部と先端部を欠損する。263は安山岩剥片を素材とする。片脚を大きく欠損する。先細りの特殊な形状である。264は安山岩剥片が素材で、頭部を欠損する。265はチャート剥片を素材とする。体部中央から脚部にかけて斜めに大きく欠損する。266も黒曜石の剥片を素材とする。両脚を欠損しているが、復元した形状は257や261に近いものと考えられる。275は安山岩剥片を素材とする採集資料である。同種の石材が早期の包含層から出土したので早期の遺物としてここで取り扱った。276は黒曜石剥片を素材とする採集資料である。



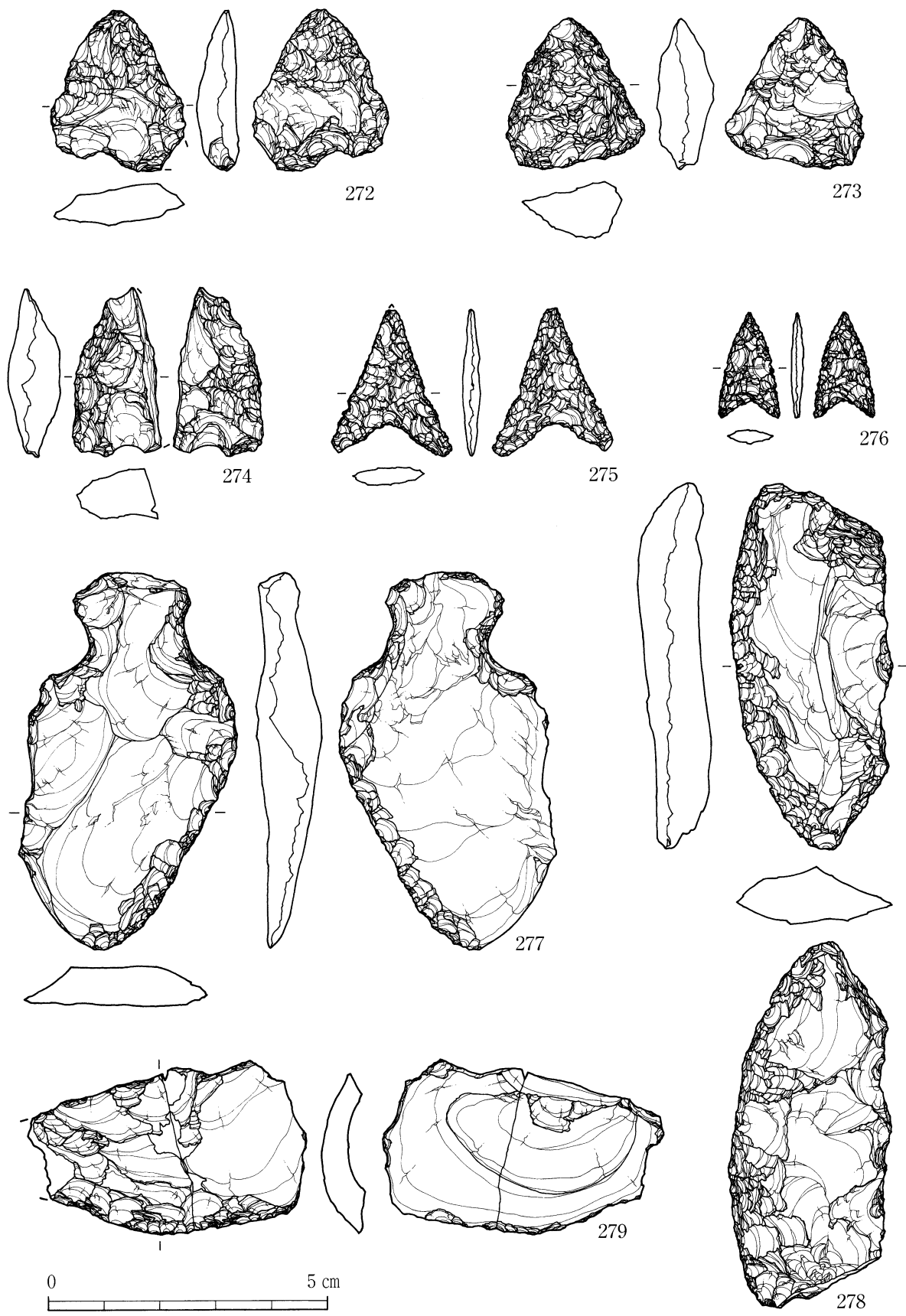
第29図 石材別の分布 (S=1/500)



第30図 器種別の分布 (S=1/500)



第31図 早期の石器 1



第32図 早期の石器 2

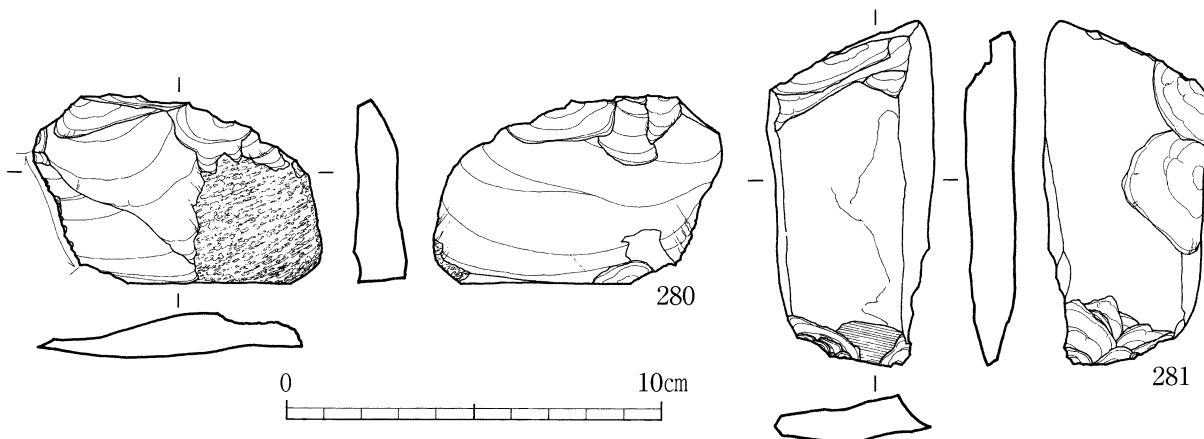
石鏃未製品 (第31図267～271, 第32図272～274)

石鏃未製品として8点を取り上げた。5点がチャート, 3点が黒曜石の剥片を素材としている。これらは, 石鏃の形状を呈しているが形状調整が不十分である, 体部の厚さが製品の2倍以上ある, 重量が製品の2倍を超している, 形状調整等の段階で一部が欠損している等の特徴がある。

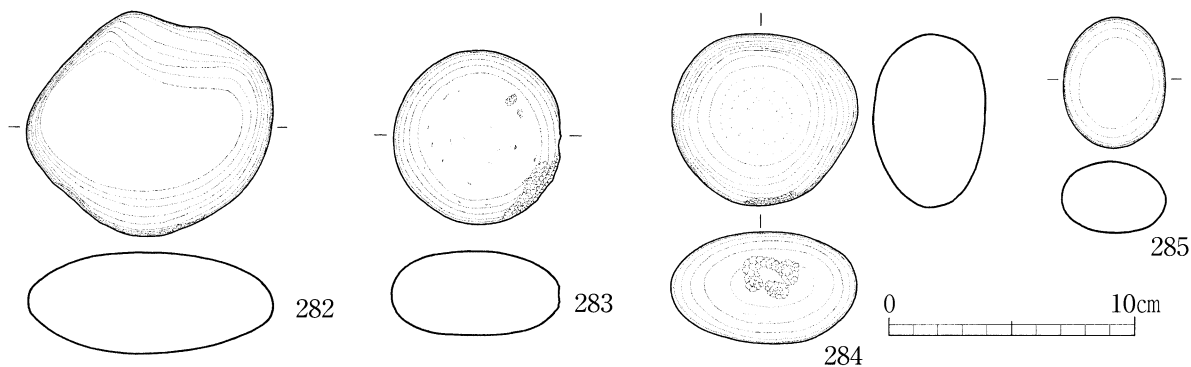
267は黒曜石の剥片を素材とする片脚が欠損した未製品である。体部の厚さは8mmである。268はチャートの剥片を素材とする。体部の厚さは7.5mmで, 側縁部を直線化する調整が未実施である。269もチャートの剥片を素材とする。急角度の剥離を裏面から連続して施し, 形状を三角形に整形している。刃部となる側縁部の調整は行われていない。重量は5.48gで, 石鏃未製品の中では最も重い。270は黒曜石剥片を素材とする。表裏面に形状調整のための大きな剥離面が観察される。体部の厚さは10mmである。271は黒曜石の剥片を素材とする。先端部と片脚が欠損する。体部の厚さは7.5mmである。272と273はチャート剥片を素材とする, 形状が類似した未製品である。272では脚部作出のための抉り状剥離が裏面に観察される。273は体部の厚さが10.5mmで, 未製品の中では最も厚い。274もチャートの剥片を素材とする。中央から縦に半分が欠損している。

石匙 (第32図277・278)

石匙は2点出土した。いずれもチャートの剥片を素材としている。277は縦長の不定型な剥片の右側縁部に刃部を作出した縦型の石匙である。278は横型の石匙である。裏面方向からの力によってつ



第33図 早期の石器 3



第34図 早期の石器 4

まみ部分が欠損している。

スクレーパー（第32図279）

279は安山岩の横長剥片を素材とする。剥片の下縁部に、裏面からの連続した剥離によって刃部を作出する。素材剥片のバルブは上方からの大きな剥離によって除去されている。

使用痕のある剥片（第33図280）

安山岩の大型の横長剥片である。表面と裏面の一部に自然面が残っている。表面の右側縁部に、使用痕と思われる微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。

石斧（第33図281）

早期の石斧は282の1点だけである。扁平な砂岩礫の下端に剥離を加えた後に、研磨によって刃部を作出した局部磨製石斧である。縦方向に割れて欠損している。

磨石（第34図282～285）

遺構内から1点（1）、遺物包含層から4点（282～285）が出土した。これらはいずれも安山岩の円礫を素材とする。283と284では表面の一部にあばた状の敲打痕が観察されることから、磨石と敲石との機能を併せ持つ石器であるといえる。

表17 早期石器観察表

挿図	番号	器種	区	取上番号	層	標高(m)	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	観察所見
第7図	1	磨石	B-9	無	Ⅷ	無	安山岩	9.6	14.4	5.1	923	7号集石から出土
	2	石皿	B-9	無	Ⅷ	無	砂岩	20.5	20.8	8	4670	7号集石から出土。片面使用
第31図	257	石鏃	D-7	638	Ⅶ	147.16	R	1.7	1.5	0.3	0.49	完形品
	258	石鏃	B-9	990	Ⅶ	147.04	L	2	1.35	0.35	0.82	片脚と頭部欠損
	259	石鏃	A-5	1068	Ⅷ	147.65	L	2.3	1.4	0.35	0.77	完形品。主要剥離面が大きく残る
	260	石鏃	A-6	865	Ⅶ	147.83	L	3.25	1.55	0.3	1.26	片脚欠損
	261	石鏃	A-5	838	Ⅶ	147.77	A	2.55	2.2	0.55	1.93	完形品
	262	石鏃	A-5	1524	Ⅶ	147.59	J	2.9	1.95	0.5	1.92	片脚端部・頭端部欠損
	263	石鏃	A-4	1030	Ⅷ	147.49	K	2.1	1.4	0.45	0.62	片脚欠損
	264	石鏃	B-9	1447	Ⅷ	146.63	L	1.8	1.8	0.45	10.6	頭部欠損
	265	石鏃	A-6	1369	Ⅷ	147.36	A	2.7	1.3	0.5	1.78	脚部を大きく欠損する
	266	石鏃	A-5	1060	Ⅷ	147.72	J	2	2	0.5	1.27	両脚を欠損する
	267	石鏃未製品	C-8	592	Ⅶ	147	D	2.5	1.65	0.8	2.21	片脚を欠損する。身が厚い
	268	石鏃未製品	A-9	1279	Ⅷ	146.73	A	2.45	2	0.75	2.69	身が厚く、整形段階の未製品
	269	石鏃未製品	B-8	1142	Ⅶ	147.18	A	2.95	2.55	0.7	5.48	形状調整段階の未製品
	270	石鏃未製品	A-6	903	Ⅶ	147.58	E	3.35	2.1	1	3.54	形状調整段階の未製品
	271	石鏃未製品	A-5	845	Ⅶ	147.89	C	1.75	1.25	0.75	1.13	頭部と片脚を欠損
第32図	272	石鏃未製品	A-8	1209	Ⅷ	146.8	A	2.95	2.35	0.7	4.39	形状調整段階の未製品
	273	石鏃未製品	B-8	1193	Ⅷ	146.93	A	2.75	2.5	1.05	5.04	形状調整段階の未製品
	274	石鏃未製品	B-10	549	Ⅳ	147.44	A	3.05	1.6	0.95	4.02	縦半分を欠損
	275	石鏃	不明	無	表採	無	M	2.65	2.2	0.3	0.96	頭部端を欠損
	276	石鏃	不明	無	表採	無	I	1.9	1.15	0.25	0.32	完形品
	277	石匙	A-6	946	Ⅷ	147.51	A	6.75	3.9	1.2	24.28	縦型の石匙
	278	石匙	B-10	1470	Ⅷ	146.36	A	6.7	2.8	1.15	23.4	横型の石匙。つまみ部分欠損
	279	スクレーパー	A-8	1474	Ⅷ	146.68	L	3.2	5	0.7	9.49	横長剥片の下端に刃部作出
第33図	280	剥片	A-5	1059	Ⅷ	147.7	K	7.7	5.1	1.4	59	表面の一部に自然面が残る。
	281	石斧	D-4	761	Ⅷ	147.62	砂岩	9.2	4.4	1.3	79	自然の扁平な礫を使用
第34図	282	磨石	A-5	1044	Ⅷ	147.58	安山岩	9.2	10	4.2	512	完形品
	283	磨石	A-5	1053	Ⅷ	147.64	砂岩	7.1	6.2	3.3	223	完形品。一部に敲打痕
	284	磨石	D-5	910	Ⅷ	147.5	安山岩	7	7.5	4.5	362	完形品。一部に敲打痕
	285	磨石	D-5	806	Ⅷ	147.33	安山岩	5.3	4.1	2.9	96	完形品

第4節 前期・後期・晩期の出土遺物

(1) 前期の出土遺物 (第37図286～297, 第38図298)

前期の遺物包含層はⅣ層とⅤ層であるが、攪乱によって元来の包含層から移動したと思われる前期土器もここで取り扱った。Ⅳ層とⅤ層の残存状況は良好であったが、遺物の出土量は少なく、土器片52点と磨石1点が出土しただけであった。

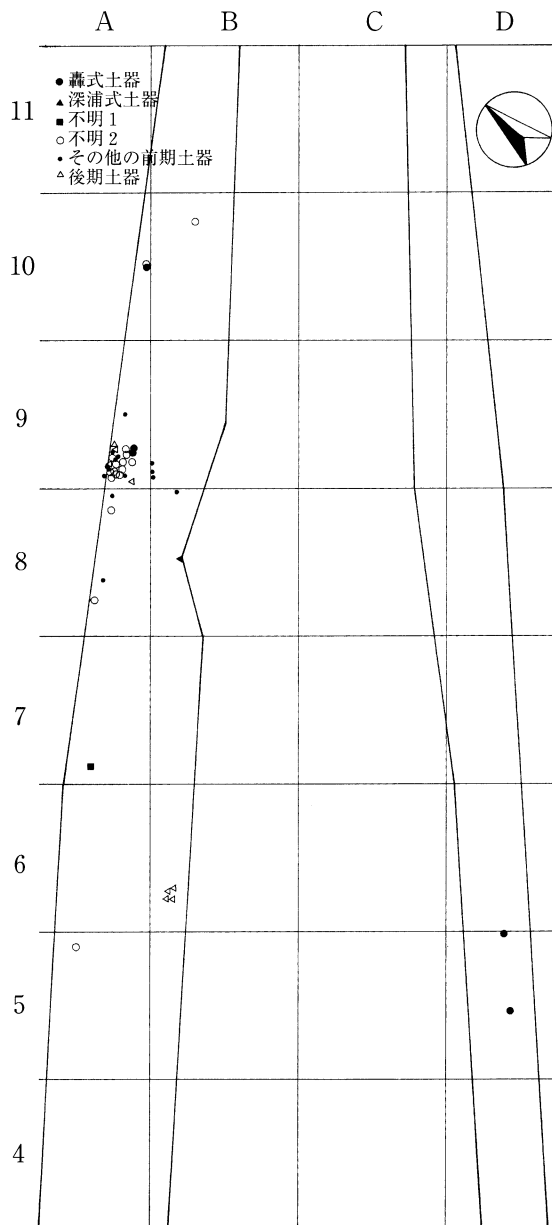
土器はA-9区に集中して出土した。複数の型式が出土している。型式ごとの組成は、轟式土器8点(63g)、深浦式土器3点(128g)、沈線文を施す型式不明の土器2点(52g)、突帯を貼付する型式不明の土器23点(552g)、その他類別不能の土器16点(165g)が出土した。以下型式ごとに説明する。

轟式土器 (第37図286)

総数で8点出土したが、比較的大きな資料の286だけを図示した。Ⅶ層から出土しているが、文様と調整から見て前期の轟式土器に相当すると判断した。出土層位が本来の遺物包含層と異なっているのは、自然の攪乱によって下層に落ち込んだ結果だと思われる。内外面とも貝殻条痕調整の後、条痕をナデ消している。表面には曲がったミミズ腫れ状の突帯が縦位に貼付され、器壁には横位の刺突文が施される。胎土に石英、長石、角閃石を混入している。

深浦式土器 (第37図287～289)

総数で3点(287～289)出土したが、288は排土からの採集資料であり、289はⅦ層出土の遺物として取り上げられている。確かにⅣ層の遺物として取り上げたのは試掘トレンチから出土した287だけである。287と288は文様、調整、胎土から見て、同一個体だと判断される。内面はヘラケズリ調整である。外面には貝殻条痕調整の痕跡が残されている。棒状の工具を用いた押し引き状の沈線によって、直線と曲線を組み合わせた幾何学的な文様が施される。289は出土層位と文様から見て、深浦式土器とするには疑問が残る資料である。内面は貝殻条痕調整である。外面には貝殻条痕調整の痕跡と前記2点に類似した押し引き状と思われる短沈線文が施される。3点ともに胎土に石英、長石、角閃石のみを混入しており、早期土器に多く見られる金雲母や白色の砂は混入されていない。



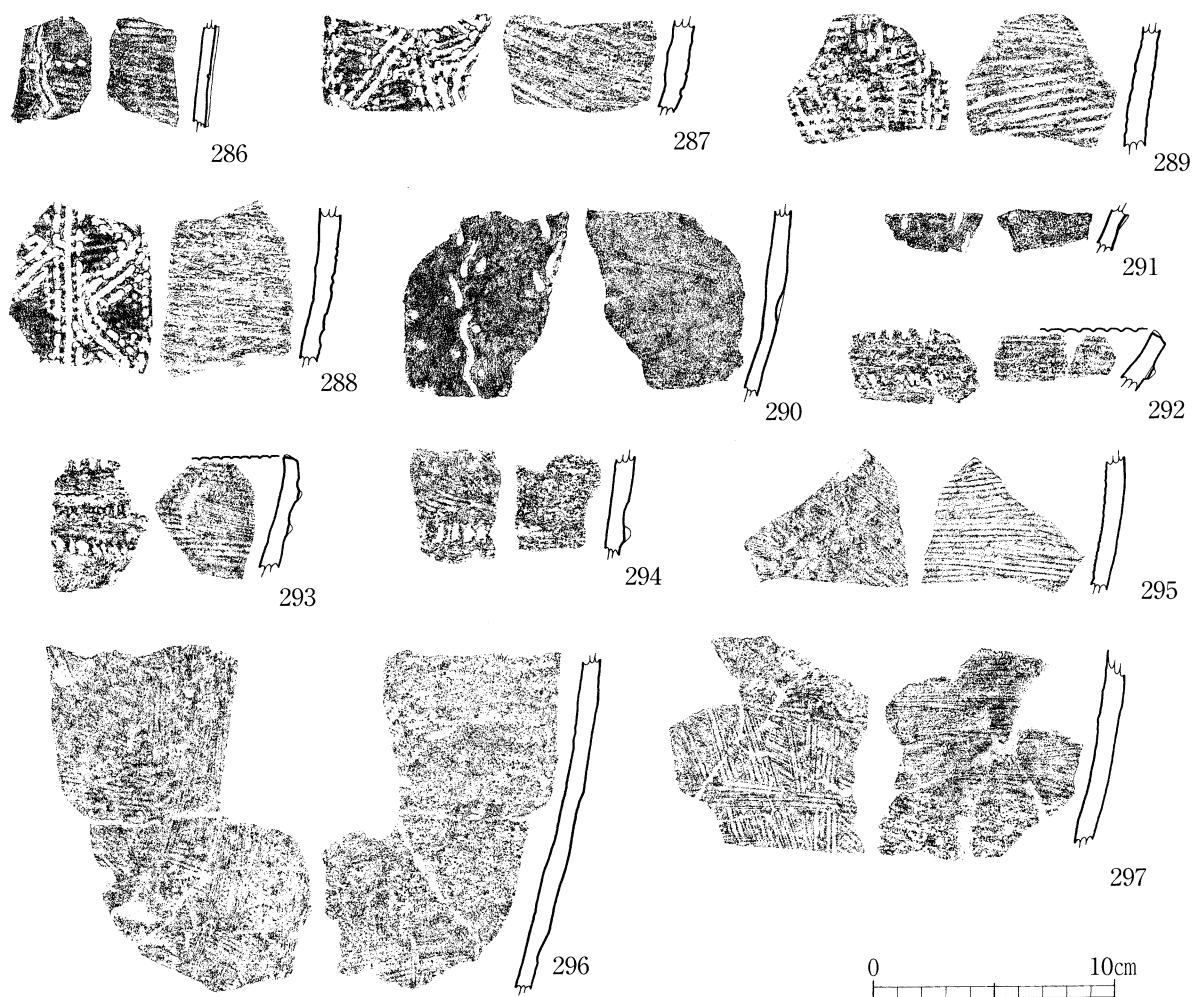
第35図 前期土器・後期土器の分布 (S=1/500)

沈線文を施す型式不明の土器 (第36図290・291)

290と291の2点を図示したが、同一個体である。290は排土からの採集資料であり、291はV層から出土した。内面はナデ調整、外面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。棒状工具を用いたS字状の短沈線文と刺突文を組み合わせた文様が施される。深浦式土器との関連性が考えられる。

突帯を貼付する型式不明の土器 (第36図292～297)

口縁部を中心に突帯を貼付し、突帯にキザミを施す土器である。器面は貝殻あるいはハケ状の工具によって調整される。轟式土器と関連のある土器である。総数で23点を抽出したが、接合の結果、資料数は22点となり、6点を図示した。22点のうち、突帯が貼付された資料は292～294の3点だけであり、突帯貼付部位は口縁部を中心としている。292と293は口縁部の破片である。文様、胎土、色調から2点は同一個体であると判断される。いずれも遺物包含層からの出土ではなく、排土からの採集品である。口唇部にキザミを施し、口縁直下の外面に細い突帯を貼付し、突帯にキザミを施している。内面は貝殻による調整後、条痕をナデ消している。色調は内外面ともに黒褐色を呈する。294は口縁部直下の破片である。内面はナデ調整、外面は条痕をナデ消している。1条の突帯が貼付され、キザミが施される。295～297は無文の胴部破片である。内面は貝殻条痕調整あるいは条痕後ナデ消されている。外面はハケ状の工具によって調整され、細かな条痕が観察できる。



第36図 前期の土器

表18 土器観察表11(縄文前期)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文様・調整	色 調	胎 土					備 考
												石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂	
第 36 図	286	轟	胴部	深鉢	D-5	723	Ⅶ	147.81	良好	内・貝殻条痕後ナデ 外・貝殻条痕、刺突、突帯	淡茶褐色 黒褐色	○	○	○			
	287	深浦	胴部	深鉢	A-6	トレ	Ⅳ		良好	内・ケズリ 外・押し状沈線	暗褐色 暗褐色	○	○	○			285と同一個体
	288	深浦	胴部	深鉢	無し	無し	排土		良好	内・ケズリ 外・押し状沈線	暗褐色 暗褐色	○	○	○			284と同一個体
	289	深浦	胴部	深鉢	B-8	506	Ⅶ	147.17	良好	内・貝殻条痕 外・格子状条痕	淡黄灰色 淡黄灰色	○	○	○			
	290	不明1	胴部	深鉢	無し	無し	排土		良好	内・ナデ 外・ナデ、短沈線文	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○	○			288と同一個体
	292	不明1	胴部	深鉢	A-7	1507	Ⅴ	147.62	良好	内・ナデ 外・ナデ、短沈線文	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○	○			287と同一個体
	292	不明2	口縁部	深鉢	無し	無し	排土		不良	内・ナデ 外・ナデ、突帯キザミ	黒褐色 黒褐色	○	○	○			289～291は同一個体
	293	不明2	口縁部	深鉢	無し	無し	排土		不良	内・貝殻条痕後ナデ 外・ナデ、突帯キザミ	黒褐色 黒褐色	○	○	○			289～291は同一個体
	294	不明2	胴部	深鉢	A-9	974	Ⅳ	147.5	不良	内・ナデ 外・条痕後ナデ、突帯キザミ	淡灰褐色 淡褐色	○	○	○			289～291は同一個体
	295	不明2	胴部	深鉢	A-9	977	Ⅳ	147.49	良好	内・貝殻条痕 外・ハケナデ	黒褐色 黒褐色	○	○	○			
	296	不明2	胴部	深鉢	A-9 A-9	972 976	Ⅳ	147.47 147.46	良好	内・貝殻条痕後ナデ 外・ハケナデ	灰褐色 灰褐色	○	○	○			294と同一個体
	297	不明2	胴部	深鉢	A-9	973	Ⅳ	147.45	良好	内・貝殻条痕 外・ハケナデ	淡黄灰色	○	○	○			293と同一個体

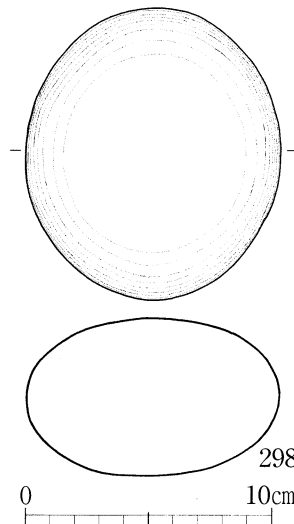
磨石 (第37図298)

C-7区のV層から出土した前期に属する唯一の石器である。石材は安山岩の円礫で、縦11.8cm 横10.3cm、厚さ6.6cm、重さ1,180gである。

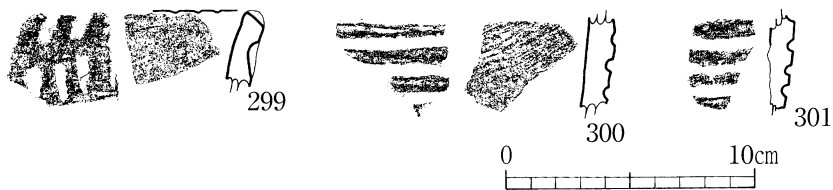
(2) 後期の出土遺物 (第38図299～301)

後期の遺物包含層はⅣ層である。Ⅳ層の堆積状況はおおむね良好であったが、出土した遺物はわずか9点の土器片だけであった。文様のある3点(299～301)だけを図示した。分布状況はB-6区とA-9区にまとまりが見られる。A-9区から出土したのは無文の胴部破片だけであった。

299～301はB-6区から隣接して出土した。文様、胎土、色調から同一個体だと判断される。299は口縁部である。口唇部には太いキザミが施され、口縁直下の外面には刺突気味の短沈線文が縦位に施される。300と301は胴部破片である。4条程度の太い平行沈線が巡らされている。内面は摩滅や剥落のために判然としないが、貝殻条痕調整後ナデ消されているようである。焼成は不良で、器面の剥落や端部の欠損が著しい。色調は黄褐色を呈し、胎土に多量の金雲母を混入しているのが特徴である。岩崎式土器の範疇に含まれるものと思われる。



第37図 前期の石器



第38図 後期の土器

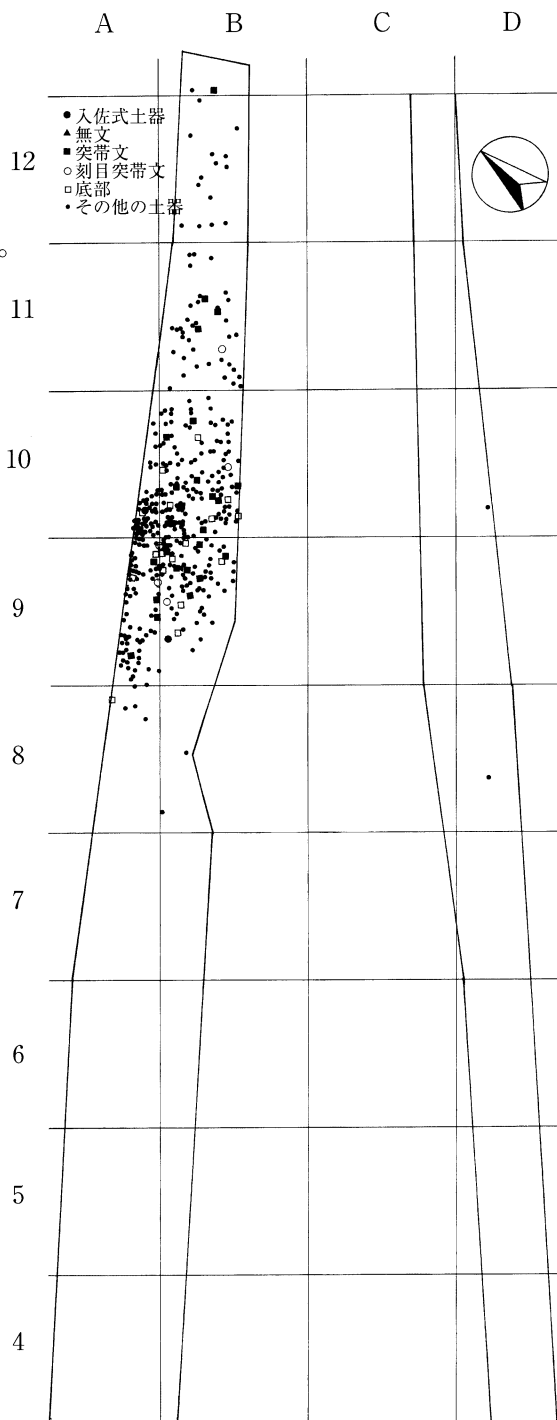
(3) 晩期の出土遺物 (第39図, 第40図302~338, 第41図339, 第42図340~344)

晩期の遺物包含層はⅢ層の暗褐色土である。遺物としては、土器片のほかに石斧などの石器が出土した。同じ層からは弥生時代の遺物も出土している。遺物の分布状況を見ると、A-9・10区とB-9・10区に集中していることがわかる。この部分より東側にも遺物は分布するが、量的には少なくなる。9・10区以東では遺物包含層が残存するものの、元来遺物の分布が少ないためである。また、8区から西側にはほとんど遺物の分布は見られない。8区以西では遺物包含層そのものが削平されてしまっているためである。遺物集中区の南にあたるC区とD区でも土器片が2点出土しただけで遺物の分布は見られない。この部分でも畑地整備事業によって遺物包含層が削平されていたためである。

土器 晩期に属する土器は総数で635点出土した。先述したとおり、出土した縄文土器の約37%を占めている。しかし、無文の胴部破片がほとんどであるために図面を提示できる資料は少なかった。接合の結果、資料数は629点となり、37点を図示した。以下、型式や文様で分類して説明する。

入佐式土器 (第40図302~308, 313)

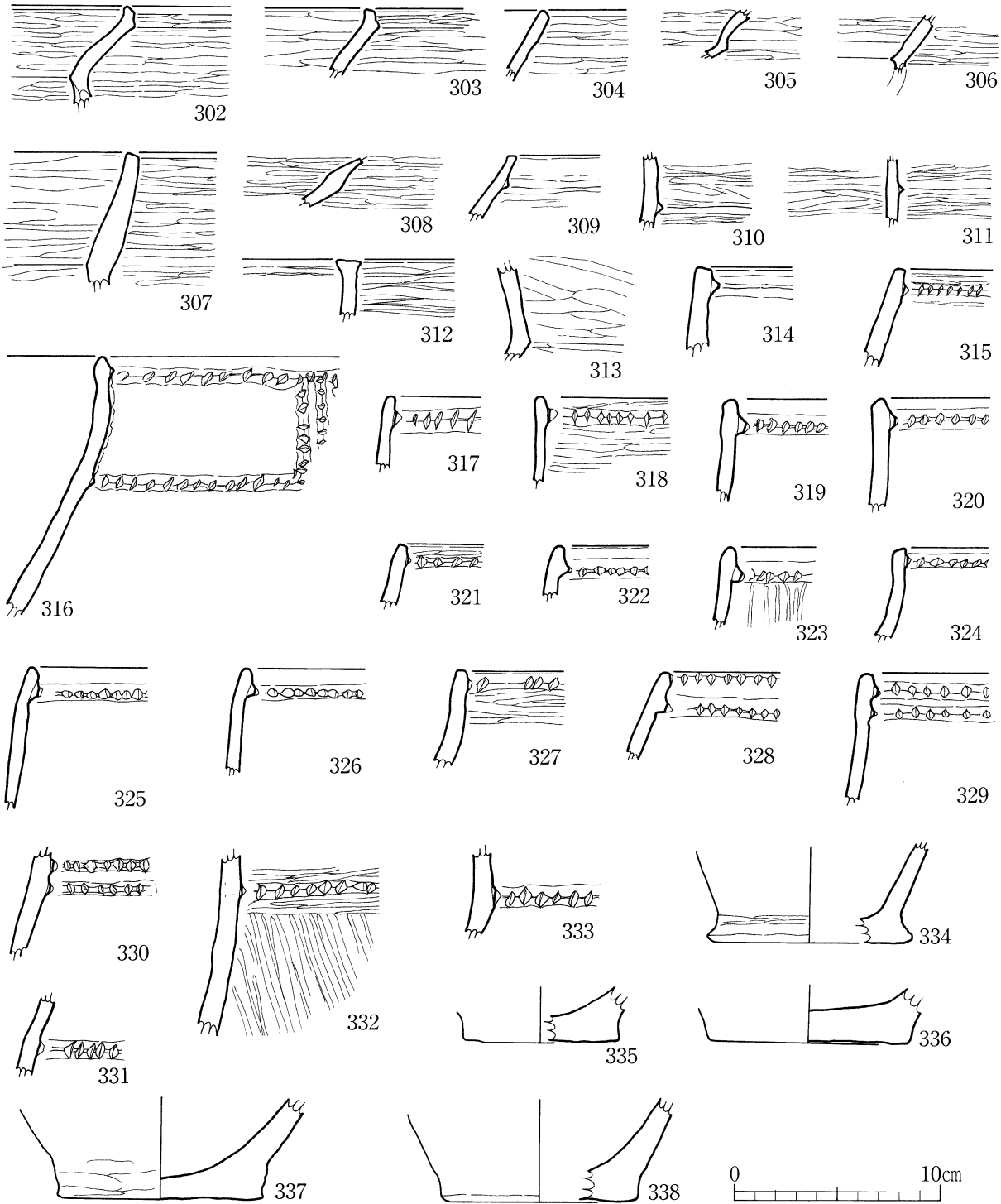
入佐式土器として抽出できたのは、302~308と313の8点だけである。302と303は断面形状が類似する浅鉢形土器の口縁部である。端部は内側にわずかに屈曲する。端部外面には2段の稜が形成される。内外面ともにヘラミガキされている。304は直線的に開く口縁部である。わずかではあるが胎土に金雲母を混入している。305は浅鉢形土器の頸部である。外面に鋭い1段の稜が形成されている。306は浅鉢形土器の頸部である。内面の屈曲部の直上には浅いくぼみが形成されている。内外面ともヘラミガキ調整である。胎土は精選されているが、白色の砂を混入している。307は排土から採集した深鉢形土器の口縁部である。口唇部は平坦面をなして外傾する。内外面ともヘラミガキ調整である。胎土は精選されている。308も排土から採集した資料である。外傾の角度が急角度であるが、浅鉢形土器の頸部付近の破片だと思われる。内外面ともヘラミガキ調整されている。313は排土から採集した深鉢形土器の胴部である。上半は内側に鋭く屈曲している。内面は工具ナデ調整、外面はヘラミガキ調整である。



第39図 晩期土器の分布 (S=1/500)

型式不明の土器（第40図309～312, 314）

突帯を貼付する資料を中心に型式不明な土器 6 点を取り上げた。309は直線的に開く浅鉢形土器の口縁部である。端部よりやや下がった位置に 1 条の突帯が貼付される。内面はヘラナデ調整, 外面はヘラミガキ調整される。310は深鉢形土器の胴部破片である。断面三角形の突帯が 1 条貼付される。内外面ともヘラミガキ調整である。311も深鉢形土器の胴部破片である。稜線が鋭い細めの突



第40図 晩期の土器

表19 土器観察表12 (縄文晩期1)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図	番 号	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文様・調整	色 調	胎 土					備 考
												石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂	
第 40 図	302	入 佐	口縁部	浅鉢	A-10	413	Ⅲ	147.57	良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラミガキ	黒褐色 黒褐色	○				○	胎土精選
	303	入 佐	口縁部	浅鉢	B-10	273	Ⅲ	147.55	良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラミガキ	黒褐色 黒褐色	○				○	胎土精選
	304	入 佐	口縁部	深鉢	B-9	161	Ⅲ	147.75	良好	内・ナデ 外・ヘラミガキ	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○	○	○		
	305	入 佐	頸 部	浅鉢	B-9	189	Ⅲ	147.58	良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラミガキ	赤褐色 暗黄褐色	○	○	○			
	306	入 佐	頸 部	浅鉢	B-9	74	Ⅲ	147.71	良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラミガキ	黒褐色 黒褐色					○	胎土精選
	307	入 佐	口縁部	深鉢	無し	無し	排 土		良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラナデ	黒褐色 暗褐色	○	○	○			
	308	入 佐	頸 部	浅鉢	無し	無し	排 土		良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラミガキ	黒褐色 黄灰色						胎土精選
	309	不 明	口縁部	浅鉢	B-10	358	Ⅲ	147.52	良好	内・ヘラナデ 外・ヘラナデ	暗褐色 黒褐色	○	○	○		○	
	310	不 明	胴 部	深鉢	A-10	387	Ⅲ	147.67	良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラミガキ	黒褐色 黒褐色	○	○	○			
	311	不 明	胴 部	深鉢	B-9	544	Ⅲ	147.57	良好	内・ヘラミガキ 外・ヘラミガキ	黒褐色 黒褐色	○	○	○			
	312	不 明	口縁部	深鉢	A-9	96	Ⅲ	147.62	良好	内・工具ナデ 外・ヘラミガキ	暗灰色 黒色	○	○	○		○	
	313	入 佐	胴 部	深鉢	無し	無し	排 土		良好	内・工具ナデ 外・ヘラミガキ	灰黄色 黒褐色	○	○	○			
	314	不 明	口縁部	深鉢	B-11	434	Ⅲ	147.32	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	淡茶褐色 黒褐色	○	○	○			
	315	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	A-9	86	Ⅲ	147.71	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	暗黄褐色 暗褐色	○	○	○			
	316	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	A-9 A-9 A-10	83 124 381	Ⅲ Ⅲ Ⅲ	147.76 147.69 147.72	不良	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	暗褐色 暗褐色	○	○	○			口縁部を巡る2条突帯 とそれを繋ぐ複数の縦 位の突帯
	317	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-10	360	Ⅲ	147.5	良好	内・剥落 外・工具ナデ、刻目突帯文	暗褐色 暗褐色	○	○	○		○	
	318	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-9 B-9 B-9	216 176 177	Ⅲ Ⅲ Ⅲ	147.76 147.67 147.64	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	黒褐色 暗褐色	○	○	○			
	319	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-10	303	Ⅲ	147.54	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	暗黄褐色 暗黄褐色	○	○	○			
	320	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-10	317	Ⅲ	147.58	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	茶褐色 黒褐色	○	○	○	○	○	
	321	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-9	218	Ⅲ	147.67	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	黄褐色 黒褐色	○	○	○			
	322	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-10	244	Ⅲ	147.68	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	黄褐色 黄褐色	○	○	○			
	323	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	A-10	420	Ⅲ	147.38	良好	内・工具ナデ 外・ミガキ、刻目突帯文	茶褐色 黒褐色	○	○	○			
	324	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-10	412	Ⅲ	147.48	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	淡黄灰色 暗黄褐色	○	○	○			
	325	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-9	187	Ⅲ	147.71	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	黄灰色 黒褐色	○	○	○			
	326	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-9	193	Ⅲ	147.71	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	暗黄褐色 暗黄褐色	○	○	○			
	327	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-11 B-13	448 475	Ⅲ Ⅲ	147.29 147.09	良好	内・工具ナデ 外・ミガキ、刻目突帯文	暗黄灰色 黄褐色	○	○	○		○	
	328	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	B-11 B-11	444 452	Ⅲ	147.33 147.31	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	黄灰色 黄灰色	○	○	○		○	
	329	刻 目 突帯文	口縁部	深鉢	A-9	120	Ⅲ	147.69	不良	内・摩滅 外・摩滅、刻目突帯文	暗黄灰色 暗黄灰色	○	○	○			
	330	刻 目 突帯文	胴 部	深鉢	B-9	185	Ⅲ	147.75	良好	内・ナデ摩滅 外・ナデ摩滅、刻目突帯文	暗黄褐色 暗黄褐色	○	○	○			
	331	刻 目 突帯文	胴 部	深鉢	A-9	515	Ⅲ	147.61	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	暗黄褐色 暗黄褐色	○	○	○			
	332	刻 目 突帯文	胴 部	深鉢	B-9	229	Ⅲ	147.69	良好	内・工具ナデ 外・ヘラナデ、刻目突帯文	暗黄褐色 黒褐色	○	○	○		○	

帯が1条貼付される。312は深鉢形土器の口縁部である。平坦な口唇部を内側と外側に拡張している。内面は工具ナデ調整，外面はヘラミガキ調整である。314は深鉢形土器の口縁部である。端部よりわずかに下がった位置に1条の突帯を貼付する。内外面とも工具ナデ調整である。

刻目突帯文土器（第40図315～333）

外面に突帯を貼付し，突帯にキザミを施す土器を取り上げた。総数で33点出土したが，接合の結果，資料数は27点となり，19点を図示した。315は直線的に開く深鉢形土器の口縁部である。端部よりもやや下がった位置に1条の細い突帯を貼付し，キザミを施す。内外面とも工具ナデ調整である。316はA-9区から出土した2点とA-10区から出土した1点が接合した口縁部である。深鉢形土器としたが，胴部が極端に内湾することから浅鉢形土器の可能性もある。口縁部よりわずかに下がった位置に1条の突帯を貼付し，間隔をおいて横位の突帯をもう1条貼付する。さらにこれらの突帯を繋ぐように3条以上の縦位の突帯を密接して貼付する。突帯には斜めのキザミが連続して施される。焼成がやや不良で，軟質な出来上がりとなっている。317～327も同様に端部よりわずかに下がった位置に突帯を貼付する口縁部である。すべてを深鉢形土器として取り扱ったが，324は胴部が内湾することから浅鉢形土器の可能性もある。ほとんどの土器の器面調整は工具ナデであるが，一部にヘラミガキ調整あるいはヘラナデ調整されたものもある。328は突帯を貼付し，突帯と口唇部外側にキザミを施す。329は2条の突帯を密接して貼付する。330も同様な口縁部直下の破片だと思われる。331～333は胴部の突帯部分である。332の突帯を挟んだ上下の部分は横方向のヘラミガキ調整，突帯より下は斜め方向のヘラミガキ調整である。

底部（第40図334～338）

底部資料は13点出土したが，底部径が復原できた334～338の5点を図示した。前述したどの口縁部資料の底部にあたるかは不明である。334の底部径は10cmである。接地面の端部が横に広がる点に疑問が残るが，晩期土器として取り扱った。335の底部径は約7.5cmで，ほかの4点よりやや小型である。336の底部径は約10cmである。底部の厚さはほぼ均一で，円盤状となる。337の底部径は約10cmである。内外面とも工具ナデ調整されるが，外面の最下部にはヘラナデ調整の痕跡が確認される。胎土に白色の砂粒の混入が認められる。338の底部径は約9.5cmである。底部からの立ち上がりは直線的である。内外面とも工具ナデ調整され，胎土に白色の砂の混入が認められる。

表20 土器観察表13（縄文晩期2）

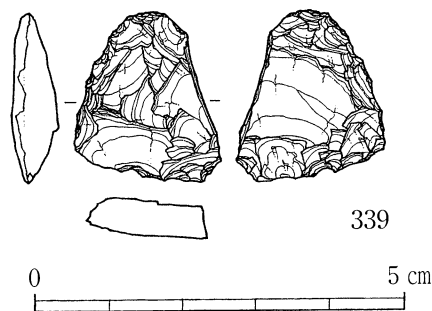
△少量 ○普通 ◎多量

挿 番 図	型 式	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考		
											石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫	
第 40 図	333	刻目 突帯文	胴部	深鉢	B-9	222	Ⅲ	147.7	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、刻目突帯文	暗黄灰色 暗黄灰色	○	○	○				
	334	不明	底部	深鉢	B-9	172	Ⅲ	147.78	良好	内・ナデ 外・工具ナデ	黒褐色 暗褐色	○	○	○				底径10cm
	335	不明	底部	不明	B-10	410	Ⅲ	147.45	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	茶褐色 暗黄灰色	○	○	○		○		底径7.5cm
	336	不明	底部	不明	B-10	287	Ⅲ	147.62	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	暗黄灰色 暗黄灰色	○	○	○				底径10cm
	337	不明	底部	不明	A-9	102	Ⅲ	147.78	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	暗褐色 暗黄灰色	○	○	○		○		底径10cm
	338	不明	底部	不明	B-10	297	Ⅲ	147.68	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	黄褐色 黄褐色	○	○	○		○		底径9.5cm

石器 土器の点数に比較して石器の点数は少なく、石鏃未製品 1 点、石斧 3 点、スクレーパー 1 点、砥石 1 点が出土しただけである。石器の分布はB-10区を中心としており、土器の分布域と重なっている。

石鏃未製品 (第41図339)

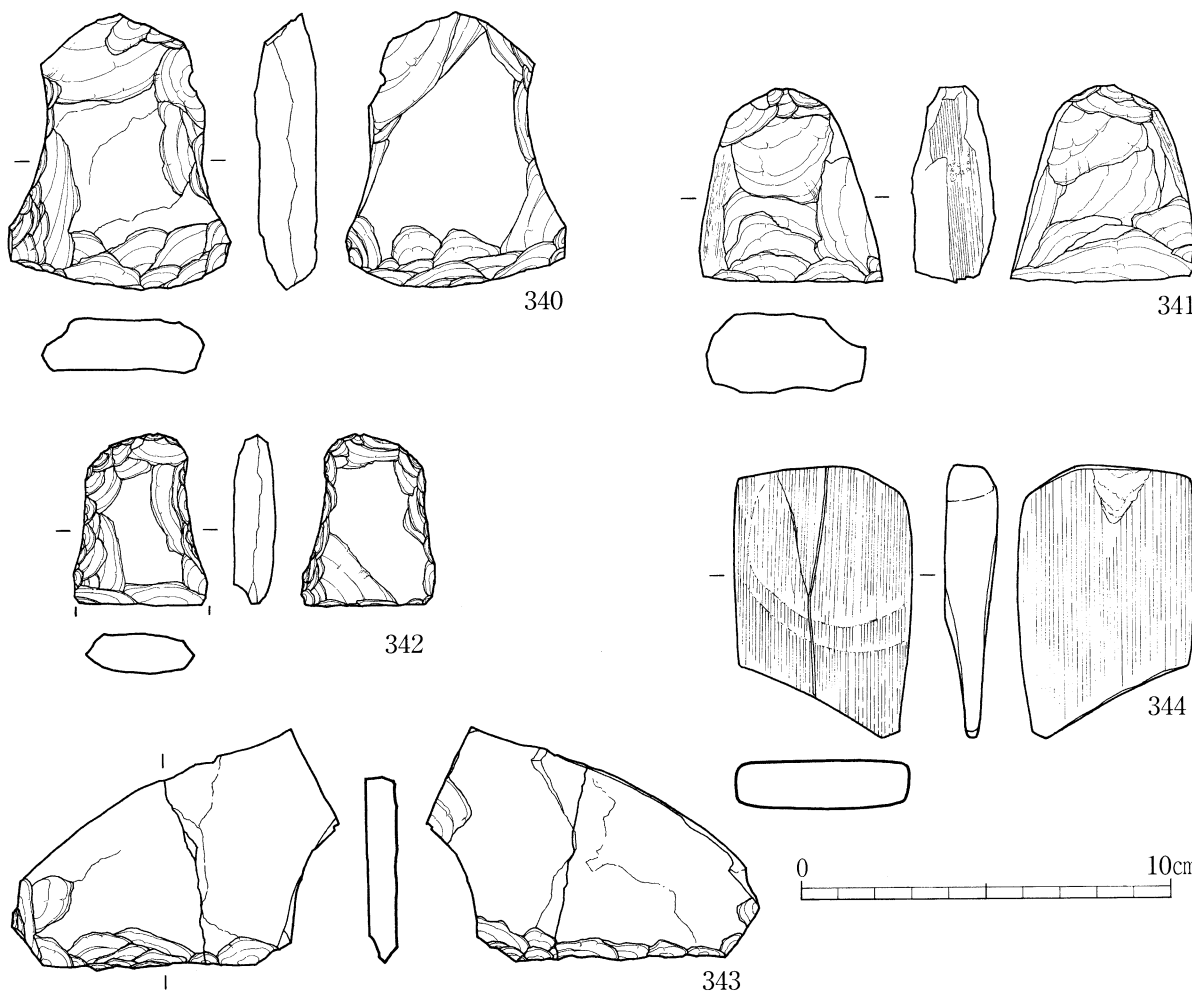
B-10区のⅢ層から出土した。ホルンフェルスの扁平な剥片が素材である。横断面の形状からわかるとおり、左側縁部は急角度の剥離によって調整されるが、右側縁部は未調整のままである。下縁部には表裏面ともに二次的な剥離が加えられている。裏面には主要剥離面が大きく残されたままである。これらのことからこの石鏃未製品は、形状調整段階の資料であると判断される。



第41図 晩期の石器 1

石斧 (第42図340~342)

3 点出土した。いずれも石材はホルンフェルスであり、刃部を欠損した基端部だけの資料である。



第42図 晩期の石器 2

340はA-9区から出土した。扁平な剥片が素材の打製石斧である。折断部分である下端には、表裏面ともに下方からの複数の剥離面が観察されることから、刃部が折損後に二次的な使用を意図したものと思われる。341は磨製石斧の基端部である。左側面に敲打痕と研磨による擦痕が観察される。表裏面には大きな剥離面が複数観察されるが、剥離の方向が判然としない。加撃による剥離ではなく、何らかの原因で表面が弾け飛んだような状況である。342は小型の石斧の基端部である。伐採用ではなく二次的な加工に用いられる磨製石斧の破片だと思われる。

スクレーパー（第42図343）

B-10区のⅢ層から出土した。扁平な砂岩の剥片の下端に表裏両面からの剥離によって直線的な刃部を作出する。

砥石（第42図344）

B-10区のⅢ層から出土した。暗灰色の砂岩製の砥石である。晩期の遺物として取り扱ったが、弥生時代に属する可能性もある。表裏面に使用に伴う擦痕が観察される。

表21 晩期石器観察表

挿図	番号	器種	区	取上 番号	層	標高 (m)	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	観察所見
第41図	339	石鏃未製品	B-10	559	Ⅲ	147.5	ホルンフェルス	2.35	2	0.65	2.91	形状調整段階の未製品
第42図	340	石斧	A-9	90	Ⅲ	147.79	ホルンフェルス	7.4	6	1.2	26	刃部欠損。再使用の可能性
	341	石斧	B-11	424	Ⅲ	147.27	ホルンフェルス	5.3	4	2.2	76	基端部だけの破片
	342	石斧	B-9	155	Ⅲ	147.77	ホルンフェルス	4.6	3.6	1.2	26	基端部だけの破片
	343	スクレーパー	B-10	338	Ⅲ	147.48	砂岩	8.8	6.3	0.9	65	扁平な剥片の下端に刃部作出
	344	砥石	B-10	1490	Ⅲ	147.32	砂岩	7.4	5	1.4	80	表裏両面と2側面を使用

第5章 弥生時代の調査

第1節 調査の概要

弥生時代の遺物はA-9区・10区とB-9区・10区を中心に出土した。遺物包含層はⅢ層であり、同層からは縄文時代晩期の遺物が大量に出土した。遺物包含層の残存状況については、縄文時代晩期の項で述べたとおりである。遺物としては前期と後期の土器片が出土しただけで、石器は出土しなかった。また、遺構も検出されなかった。

第2節 出土遺物

弥生時代に属する土器片は総数で30点出土した。内容は前期に属する甕形土器、壺形土器や中期以降の甕形土器等である。

前期の甕形土器（第44図345～347）

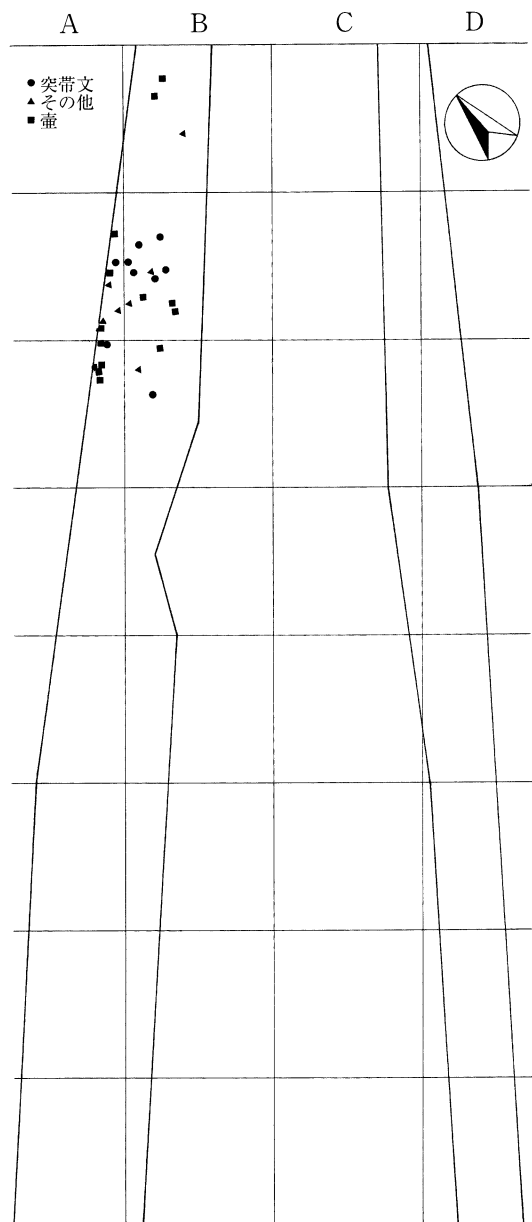
総数で10点出土し、接合の結果、資料数は3点となり、すべてを図示した。345と346は平坦な口唇部を外側に拡張し、端部にキザミを施す。口縁直下に1条の突帯を貼付し、突帯にキザミを施す。347はA-10区から出土した7点が接合した資料である。口縁部に粘土を貼り付けて外側に拡張し、連続した不規則なキザミを施す。胴部には断面三角形の突帯を貼付し、突帯にもキザミを施す。内面はナデ調整されるが、摩滅している。外面はミガキ調整で、煤が付着している。

前期の壺形土器（第44図348～353）

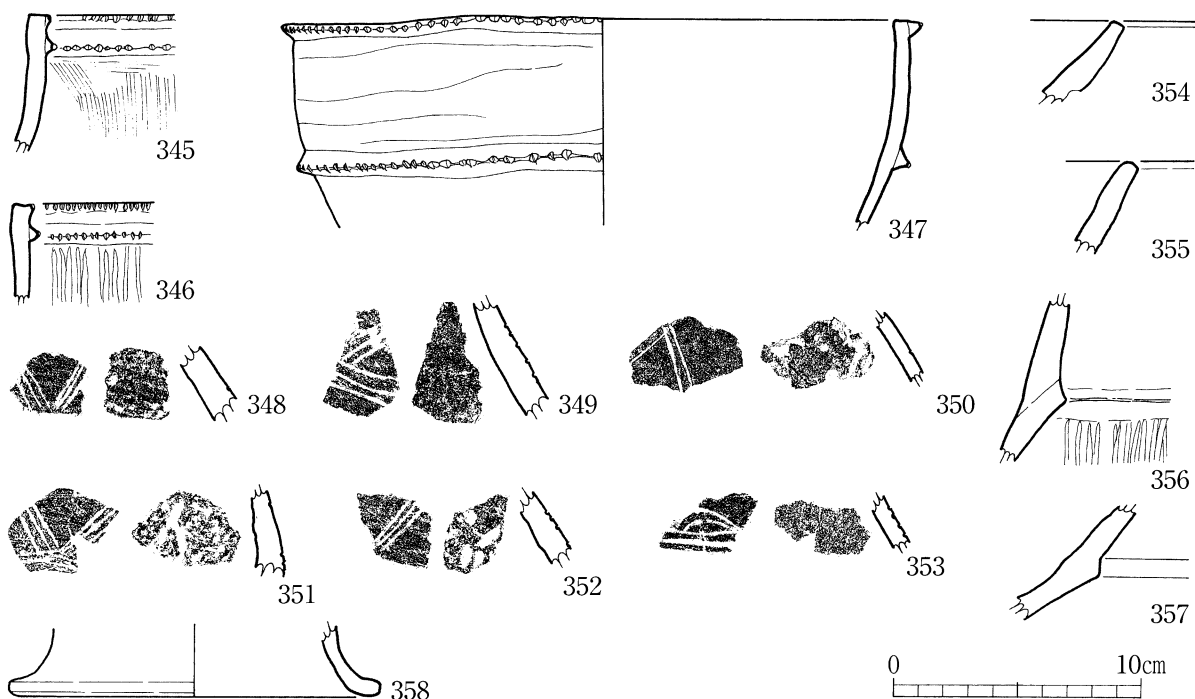
外面に細沈線で直線と曲線を組み合わせた幾何学的な文様を施す。小破片ばかりのために器形の全容は不明だが、小型壺形土器の胴部から肩部にかけての破片である。内外面とも工具ナデ調整されるが、器面の剥落や摩滅が目立つ資料が見られる。

中期以降の土器（第44図354～358）

354は中期の甕形土器の口縁部である。355も甕形土器の口縁部である。時期は不明である。356は鉢形土器の胴部であると思われる。357は鉢形土器の胴部あるいは、高坏形土器の坏部分の破片である。358は土器の脚台部分である。内外面との工具ナデによって丁寧に調整されている。径は約15cmである。後代の遺物である可能性もある。



第43図 弥生土器の分布 (S=1/500)



第44図 弥生時代の土器

表22 土器観察表14 (弥生)

△少量 ○普通 ◎多量

挿 図 番 号	部 位	器 種	区	取 上 番 号	層	標 高 (m)	焼 成	文 様 ・ 調 整	色 調	胎 土					備 考	
										石 英	長 石	角 閃 石	金 雲 母	白 色 の 砂		砂 礫
345	口縁部	甕	B-11	455	Ⅲ	147.12	良好	内・工具ナデ 外・ハケ、刻目突帯	黒褐色 暗黄褐色	○	○	○				
346	口縁部	甕	B-10	348	Ⅲ	147.58	良好	内・工具ナデ 外・ミガキ、刻目突帯	黄褐色 黒灰色	○	○	○				
347	口縁部	甕	B-10	326	Ⅲ	147.58	良好	内・工具ナデ摩滅 外・ミガキ、刻目突帯	淡黄褐色 淡黄褐色	○	○	○			径26cm	
			B-10	336	Ⅲ	147.6										
			B-10	341	Ⅲ	147.6										
			B-10	350	Ⅲ	147.67										
			A-10	399	Ⅲ	147.67										
			B-10	337	Ⅲ	147.46										
			A-10	582	Ⅲ	147.66										
A-9	136	Ⅲ	147.61													
348	胴部	壺?	A-9	122	Ⅲ	147.7	不良	内・剥落 外・工具ナデ、沈線文	赤褐色 赤褐色	○	○	○	○			
349	胴部	壺?	A-9	116	Ⅲ	147.76	不良	内・工具ナデ 外・摩滅、沈線文	茶褐色 茶褐色	○	○	○	○			
350	胴部	壺?	B-11	135	Ⅲ	147.63	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、沈線文	淡褐色 淡褐色	○	○	○	○			
351	胴部	壺?	A-10	384	Ⅲ	147.64	不良	内・工具ナデ 外・工具ナデ、沈線文	茶褐色 暗褐色	○	○	○	○			
352	胴部	壺?	A-9	402	Ⅲ	147.63	良好	内・剥落 外・工具ナデ、沈線文	赤褐色 暗黄灰色	○	○	○	○			
353	胴部	壺?	B-11	456	Ⅲ	147.24	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ、沈線文	赤褐色 暗黄灰色	○	○	○	○			
354	口縁部	甕	A-10	381	Ⅲ	147.62	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	淡黄褐色 暗黄褐色	○	○	○				
			A-10	395	Ⅲ											
355	口縁部	甕	B-10	561	Ⅲ	147.49	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	暗灰色 暗灰色	○	○	○				
			B-10	579	Ⅲ											
356	胴部	鉢?	B-11	445	Ⅲ	147.3	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	暗灰色 暗灰色	○	○	○				
357	胴部	鉢?	B-10	346	Ⅲ	147.61	良好	内・工具ナデ 外・摩滅、沈線文	暗黄褐色 赤褐色	○	○	○				
358	脚部		B-9	220	Ⅲ	147.68	良好	内・工具ナデ 外・工具ナデ	黄褐色 黄褐色	○	○	○		径15cm		

第6章 古代の調査

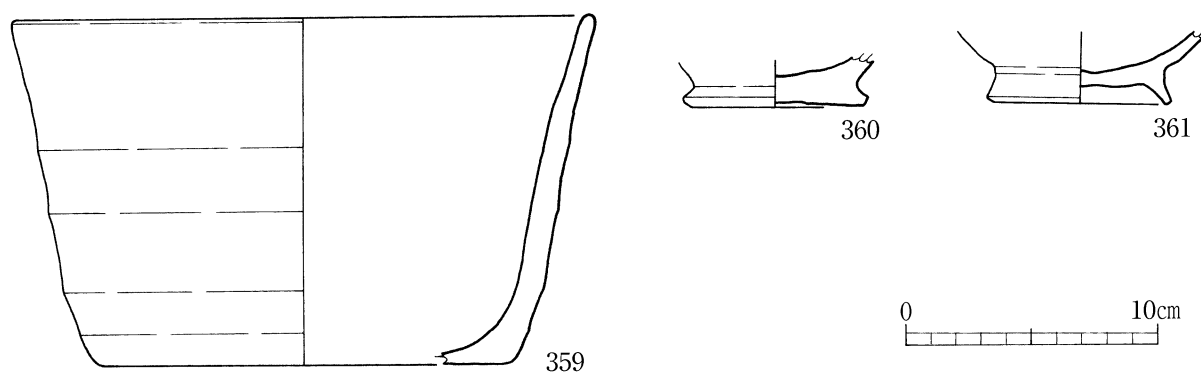
第1節 調査の概要

遺物包含層はⅡ層の黒色土である。縄文時代晩期と弥生時代の遺物包含層と同様に畑地整備事業によって削平されている部分がほとんどであった。遺物包含層が良好に残存していたのは、B-10区以東の部分で、大半の遺物はこの調査区から出土した。遺構の検出に努めたが、遺構は存在していなかった。

第2節 出土遺物 (第45図359~361)

土師器の破片が総数で33点が出土した。遺物はいずれも細片であり、実測可能な3点だけを図示した。

359は土師器の大型の鉢形土器である。胴部は底部から直線的に急角度で立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。底径約16.5cm、口縁径約23.5cm、高さ約14cmである。360は平底の碗形土器である。底の端部は外側に広がっている。底径は約7.5cmである。361は高台付きの碗形土器である。高台端部は外側に広がっている。高台径は約7.5cmである。



第45図 古代の遺物

第7章 自然科学分析

鹿児島県出水遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	8号集石掘込内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2. 測定結果

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No.
No.1	-26.1	8160 ± 40	交点: cal BC 7175, 7170, 7135	NUTA2-3748
			cal BC 7100, 7085	
			1σ: cal BC 7295~7270, 7240~7225	
			cal BC 7180~7075	
			2σ: cal BC 7320~7060	

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

2) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

3) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサングのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ(68%確率)・2σ(95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

文献

Stuiver, M., et. al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40(3).

中村俊夫(1999)放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p. 1-36.

第8章 調査のまとめ

押型文土器

縄文時代早期の土器で点数的に最も多いのは4類の押型文土器である。押型文土器は383点出土し、楕円文(4a類)が287点、山形文(4b類)が95点、格子文(4c類)が1点となっている。先述したとおり、早期土器の出土点数の約38%をしめる。破片資料から推測される器形は「口縁部が外反し、頸部がわずかに締まる。胴部の張りは小さく、底部は平底」というものである。施文方向は、口縁部内面が横位、口縁部外面が縦位、胴部が縦位または右下がりの斜位であり、口唇部にも横位に押型を転がしている。この特徴は4類全般に通じるものであるが、山形文の一部には、口縁部外面が横位となるものや胴部外面が横位となるものがみられる。類似する資料としては、鹿児島県薩摩町中津川城跡から楕円押型文土器の完形品が報告されている。中津川遺跡の完形品は、底部は安定した平底で、胴部の張りは小さく、頸部で締まり、口縁部は屈曲して外反し、口径は胴部径とほぼ同じである。口縁内面には横位に、口縁外面には縦位に楕円押型文が施され、口唇部にも押型文が施されている。

南九州における押型文土器の研究は、検討の対象とすべき良好な資料の出土が少ないために進んでいないのが現状である。

東九州地方で発達した押型文土器が鹿児島県内に波及した時期について、新東晃一は、溝辺町桑ノ丸遺跡と枕崎市奥木場遺跡における押型文土器と在地系土器である桑ノ丸式土器の共伴例や、鹿屋市打馬平原遺跡における桑ノ丸式土器と共通する器形を持つ押型文土器の存在に着目し、「外来系の押型文土器の移入の時期は、桑ノ丸式土器の段階と考えられる」としている(新東1990)。

乗畑光博・上田耕・雨宮瑞生も早期中葉の在地土器である貝殻文円筒形土器と押型文土器との関係を論じた中で「貝殻文円筒形土器の石坂式土器と下剥峰式土器には、稲荷山式や早水台式を含む横方向施文を基調とする比較的古い段階の押型文土器が伴う可能性がある。そして、貝殻文円筒形土器の桑ノ丸式土器にまで、横方向施文を基調とする比較的古い段階の押型文土器が伴う可能性がある」と述べている(乗畑・上田・雨宮1993)。

水ノ江和同は、西北・中九州地域に分布する円筒形平底で横位施文の押型文土器を、長崎県吾妻町所在の弘法原遺跡を標式遺跡とする弘法原式土器として型式設定し、九州全体の押型文土器について論じ、その中で南九州の状況についても触れている。西北・中九州での弘法原式土器の出土状況をもとに稲荷山式土器と併行関係にあったとし、鹿児島県では出水市牟田尻遺跡、市来町仮牧段遺跡、宮之城町甫立原遺跡などの西北部の遺跡で出土しているとしている(水ノ江1998)。近年の出土例としては、鹿児島県国分市上野原遺跡(第10地点)でも9点が報告されている。新東・乗畑らが指摘した打馬平原遺跡の円筒形平底の山形押型文土器については「南九州でも(分布は)東半分に限られ、弘法原式とは分布領域が異なることを含めて、南九州では最も古い押型文土器の一種と考えたい」と述べている(水ノ江1998)。

以上のように各研究者とも鹿児島県を中心とする南九州への押型文土器の波及は複数回にわたっていたと推測している。波及の時期は以下の3段階に整理できよう。

最初の波及は、貝殻文円筒形土器の終わりの頃である。水ノ江のいう弘法原式がストレートに伝播したか、南九州に分布していた貝殻文円筒形土器の影響のもとに独自に成立したかについては今後も検討が必要であろう。そしてこのことは、南九州の東部に分布する縦位施文の円筒形押型文土器の成立とも関連づけて考える必要がある。

次の波及は大分編年の早水台式の段階にあたる。横位施文の押型文と口縁部内面の原体条痕で特徴づけられる早水台式は、桑ノ丸遺跡・鹿児島県加治木町三代寺遺跡・中津川城跡などの例に見られるように口縁部が大きく開き、胴部は張り出さずそのまま底部に至るといった器形は受容されるが、底部は頑ななまでに南九州の伝統的な平底のままである。

三番目の波及は下菅生B式の段階にあたると思われるが、南九州では下菅生B式の影響を受けたと確実に判断できる資料は見られないようである。おそらくこの時期から南九州の押型文土器は独自の展開をし始めたものと思われる。器形は中津川城跡の資料に見られるように、口縁部が外反し、胴部が張り出すことによって頸部が明瞭となった。口縁部が外反し、頸部が締まった器形には横位の施文は不向きであり、縦位施文の方法が選択されることとなった。本遺跡から出土する押型文土器のほとんどがこの時期の属する。

なお、同時期の所産と考えられる8号集石内の炭化物の¹⁴Cを加速器質量分析（AMS）法で分析した結果、補正¹⁴C年代 $8,160 \pm 60$ (y.B.P) という数値が得られた。

妙見式土器

妙見式土器は、宮崎県えびの市妙見遺跡出土の土器を標式として、岩永哲夫により提唱され（岩永1995）、吉本正典によってまとめられている（吉本1998）。妙見式土器の特徴としては「口縁部は緩やかに外反し、胴部は多くに痕跡程度のわずかな屈曲、張りが認められる。ただし、胴部の張らない個体もある。口縁部は波状を成す場合が多く、口縁上部や頸部を中心に多条の貼付突帯を巡らせる。また、しばしば瘤状の突起が付される。胴部付近には縦方向あるいは曲線を描く貼付突帯が施されることが多い。完形の資料がないため底部の形状は明確にし得ないが、手向山式のそれと同じくわずかに上げ底になると推測している。文様は地文として縄文（単節のものが多い）が縦方向に施文されるほか、突帯の上に刺突列点文が施文される」とされている。

本遺跡例では、145・146の口縁部資料があり、地文である縄文や器壁を巡る貼付突帯、突帯に施されたキザミ（刺突列点文）が観察される。

手向山式土器と平楯式土器を結ぶ土器型式として位置づけられるとされるが、資料数も少なくまだ研究段階の土器である。

平楯式土器

深鉢形土器では、175・176・177のように口縁端部が肥厚し文様帯となるものと、178のように口縁部が幅広の断面三角形となり文様帯となるものの2種類が存在する。これらは時期差であると考えられる。胴部以下の資料がほとんど出土していないので、地文である縄文が施されているかどうかは不明である。壺形土器は、187にみられるように口縁部が肥厚し、沈線文と刺突文を主体とした文様帯となっている。長頸の胴部の張り出した器形で、胴部は無文であろうと推測される。

手向山式土器

分類後、手向山式土器の範疇として取り扱うのが適切でない資料が含まれていることが判明した

のでここで若干の修正を加えたい。

7 b類の変形撚糸文土器は、口縁部内面の施文がなく、胴部の屈曲の有無が不明であり、手向山式として取り扱うのは適切でない資料であろう。類似する資料は、鹿児島県溝辺町石峰遺跡や上野原遺跡などで散見される。石峰遺跡では、変形撚糸文単独の施文ではなく、楕円押型文と変形撚糸文を組み合わせたほぼ完形の資料が出土している。この土器は河口貞徳によって石峰式土器と型式設定されたが、その後同型式の資料は報告されていない。器形は口縁部が外反し、頸部は締まり、胴部は砲弾型となり、南九州の新しい時期の押型文土器の器形に類似する。特徴的なのは施文具の組合せで、口縁部内面に変形撚糸文、口縁部外面に楕円押型文と変形撚糸文、胴部に変形撚糸文、底部付近に楕円押型文を施し、口唇部にも楕円押型文を施す。これらのことから、変形撚糸文土器は押型文土器との関係が深い土器であることがわかる。これまでの調査では、器形の全容がわかる資料が出土していないので、実態は不明である。本遺跡では210のように手向山式に共通する緩やかな立ち上がりの底部が出土しており、手向山式土器との近縁性が窺われる。

7 e類とした山形押型文が施された土器のうち、218と219は手向山式土器の範疇に含まれると思われるが、220はその範疇から外れる可能性がある。手向山式土器の押型文は縦方向に施文されるのが通例であることから、手向山式土器というよりも横方向施文の古い段階の押型文土器として取り扱うのが適切であろう。

耳栓状土製品

8 a類の塞ノ神A a式土器に伴うものである。南九州では滑車形を呈する「耳栓」は平楕式土器の段階から塞ノ神A a式土器の段階にかけて出土する。表の直径は裏側の直径よりいくぶん大きく、表面にだけ沈線文や刺突文による文様が施される。これら滑車形の土製品は、これまで十分な検討をされることなくすべてが「耳栓」として取り扱われてきた。本遺跡であえて「耳栓状土製品」としたのは、以下の理由による。

第一は装飾品としての耳栓にしては、成形や調整が粗雑であるという点である。同時期の塞ノ神A a式土器の深鉢内面はミガキ調整により平滑に仕上げられている。器面は沈線文、網目状撚糸文、微隆起突帯文が施され、口唇部には幾何学的な刻みが施されている。一方、本遺跡の耳栓状土製品は、ナデ調整された器面に沈線によって曲線的な文様が描かれるだけの質素なものである。土器と耳栓状土製品との間には、歴然とした文様・調整手法の差が見られるために、装飾品として取り扱うことにはためらいがある。

第二にひとつの遺跡内から出土する量が土器に比較して極めて少ない点である。南九州の縄文時代耳飾りについては、新東晃一によってまとめられているが、これまでの調査例では1遺跡からせいぜい数点しか出土していない(新東1993)。南九州で出土するこの種の土製品が耳栓として位置づけられたのは、関東地方の縄文時代後半の遺跡から出土する耳飾との類似性が根拠とされる。晩期の遺跡である群馬県茅野遺跡では577点の透かし彫りの耳飾りが出土し、未調査部分を考慮すると2,000点以上の耳飾の存在が推定されている(土肥1997)。量的な少なさの根拠を特殊な立場の人間が装着していた点に求める議論もありあえるが、第一に述べたような理由により威信材としては粗雑すぎると考えた。

第三に耳たぶにあけた孔に装着したことを推測させる資料が出土していない点である。先に触れ

た茅野遺跡では小さなものは径1.3cmから大きいものでは径8cmを超えるものまで様々な大きさの耳飾りが出土しており、徐々に耳飾りを大きくしていったことが推測できる。また、同時期の土偶には耳飾りを装着している様子を表現したものが出土している。ところが、南九州では耳たぶにあけた孔を段階的に大きくしていった過程を示すような資料は出土していない。もっとも、粘土以外の素材で作られた耳栓が存在していた可能性も考慮する必要がある。

今後、南九州の「耳栓」については、東日本で出土する耳栓との類似性だけでなく、多方面から検討する必要があると考える。

石器

剥片石器の石材が多様であることは先述したとおりである。土器型式も多様なためにどの石材がどの土器に対応するのか不明である。最も多用されたチャートは押型文土器の時期に好まれる傾向があり、一連のチャート製石器は、この時期の製品と思われる。器種としては、石鏃とその未製品、石匙以外にはほとんど見るべきものがない。土器型式ごとの出土量も少ないことから、きわめて短期間の生活しか営まれなかった結果であろう。

縄文時代晩期の土器

入佐式土器と刻目突帯文土器がほとんどである。晩期土器は出土点数では多いのだが、検討の材料となる資料は少ない。

【参考文献】

上野原遺跡（第10地点）第四分冊 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28） 2001年3月 鹿児島県立埋蔵文化財センター

中尾田遺跡 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15） 1981年3月 鹿児島県教育委員会

石峰遺跡 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（12） 1980年3月 鹿児島県教育委員会

中津川城跡 鹿児島県薩摩郡薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書（2） 1999年3月 鹿児島県薩摩郡薩摩町教育委員会

【引用文献】

岩永哲夫 1995 「宮崎県の縄文早期土器」 旧石器から縄文へ 鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会合同研究大会資料 鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会

柴畑光博・上田耕・雨宮瑞生 1993 「貝殻文円筒土器と押型文土器の関係」 南九州縄文通信 7 南九州縄文研究会

新東晃一 1990 「縄文早期土器の補修孔」 - 南九州の場合 - 南九州縄文通信 3 南九州縄文研究会

新東晃一 1993 「縄文時代の二つの耳飾り」 - 南九州の耳栓と球状耳飾り - 南九州縄文通信 7 南九州縄文研究会

土肥孝 1997 「縄文時代の装身具」 日本の美術 2 369 至文堂

水ノ江和同 1998 「九州における押型文土器の地域性」 九州の押型文土器 - 論攷編 - 九州縄文研究会

吉本正典 1998 「妙見式土器の検討」九州縄文土器編年の諸問題 - 早期後半土器編年の現状と課題 - 資料集 九州縄文研究会

版 圖



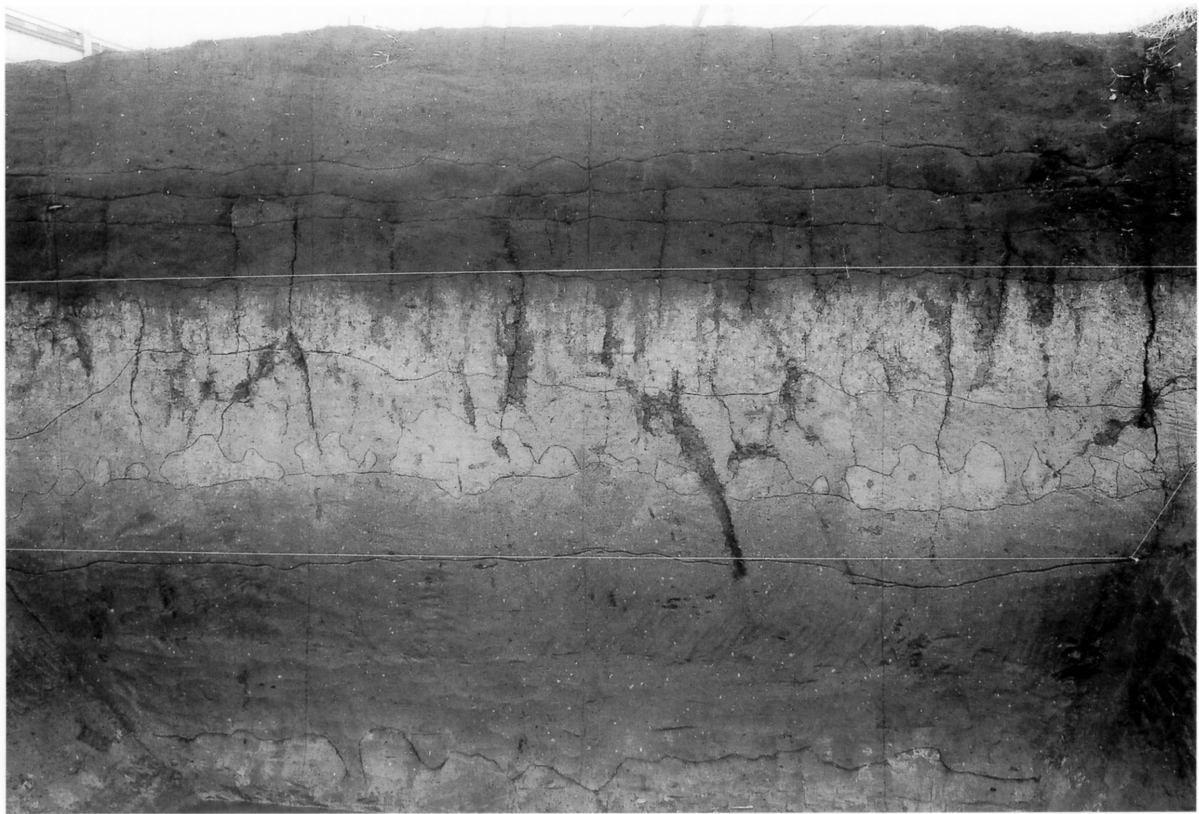
発掘作業風景



Ⅲ層遺物出土状況



A-4~6区 VIII層遺物出土状況



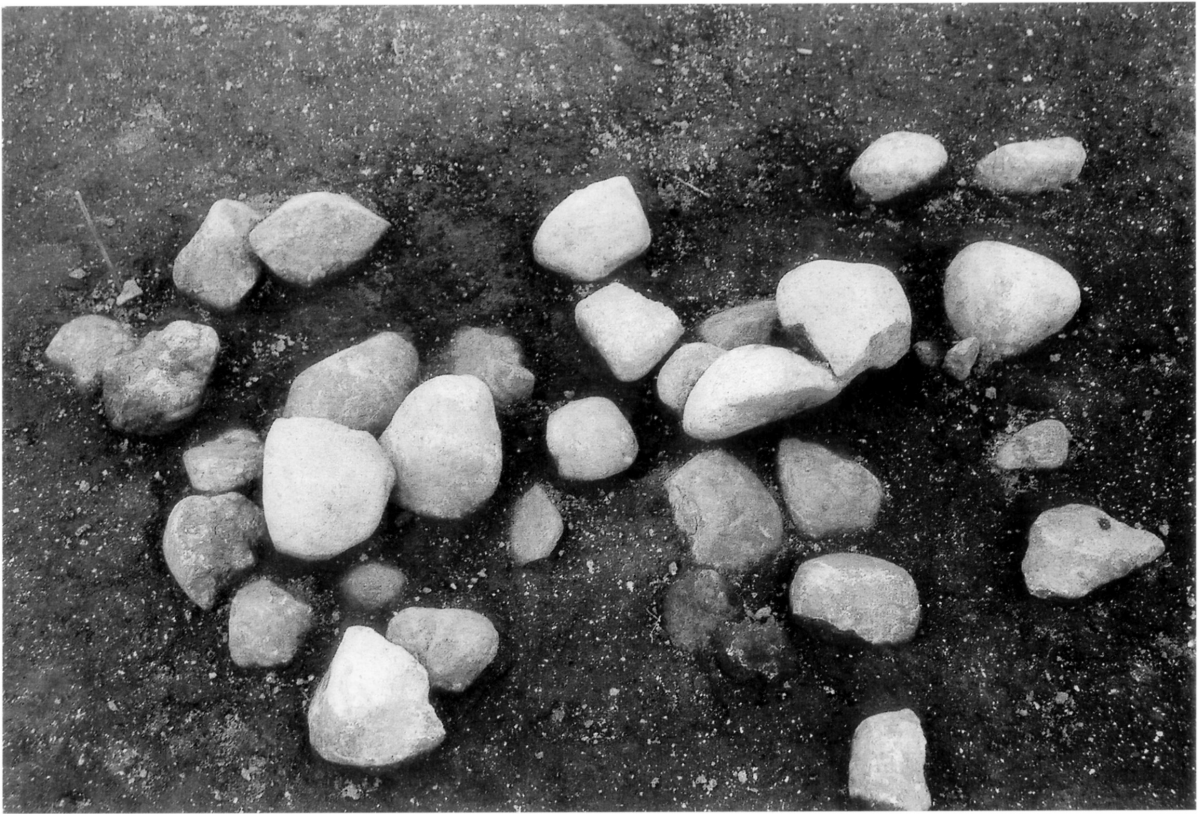
土層断面



3号集石



4号~6号集石



6号集石



7号集石



5



7



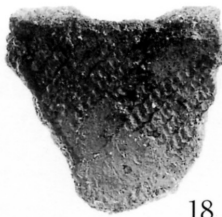
9



10



16



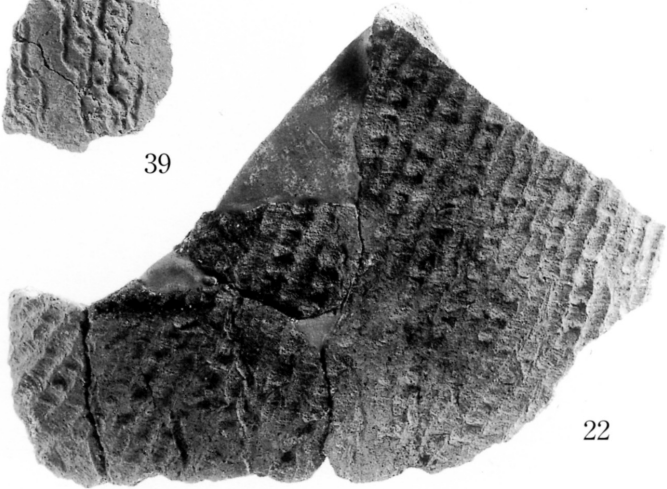
18



26

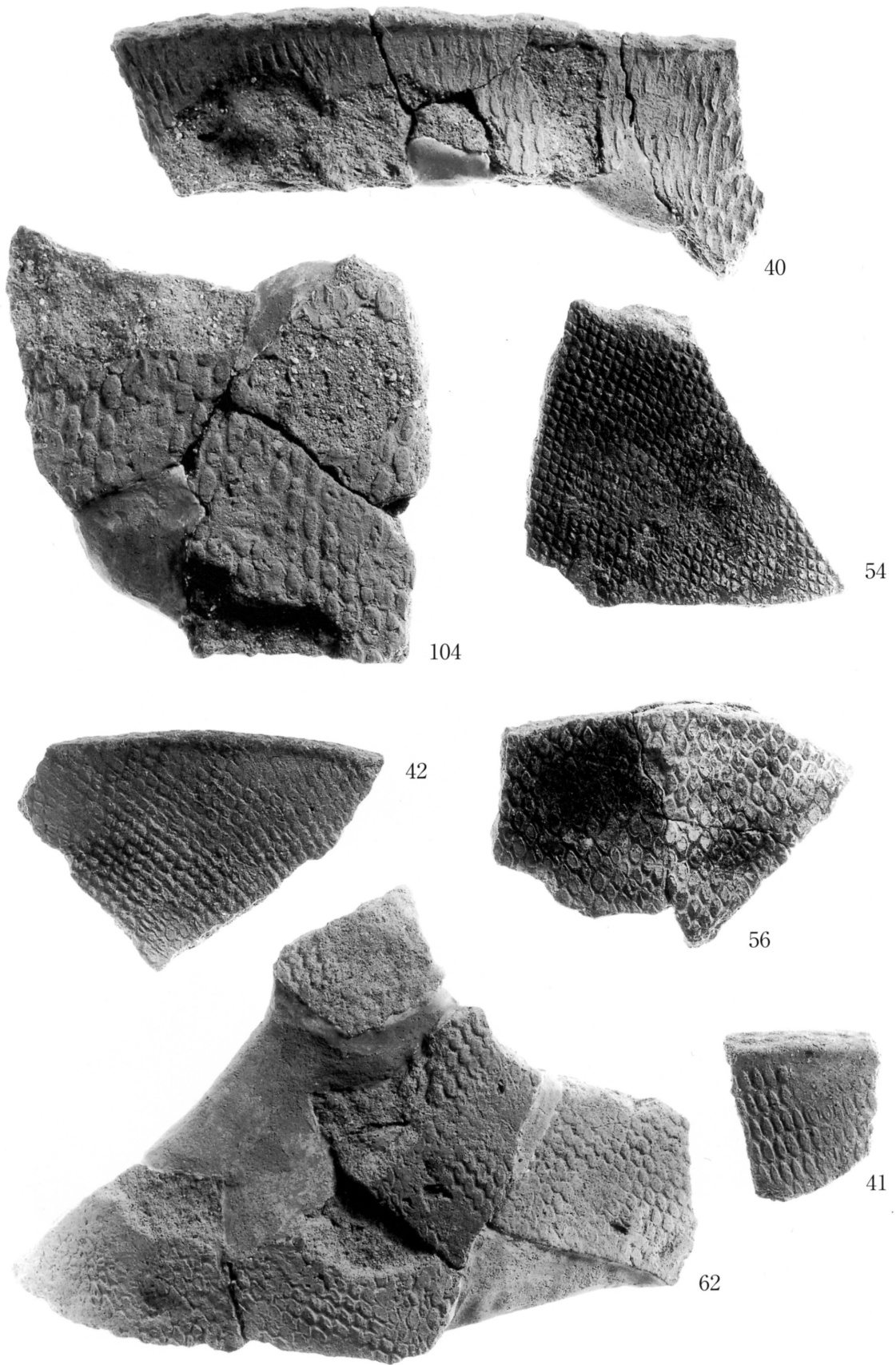


39

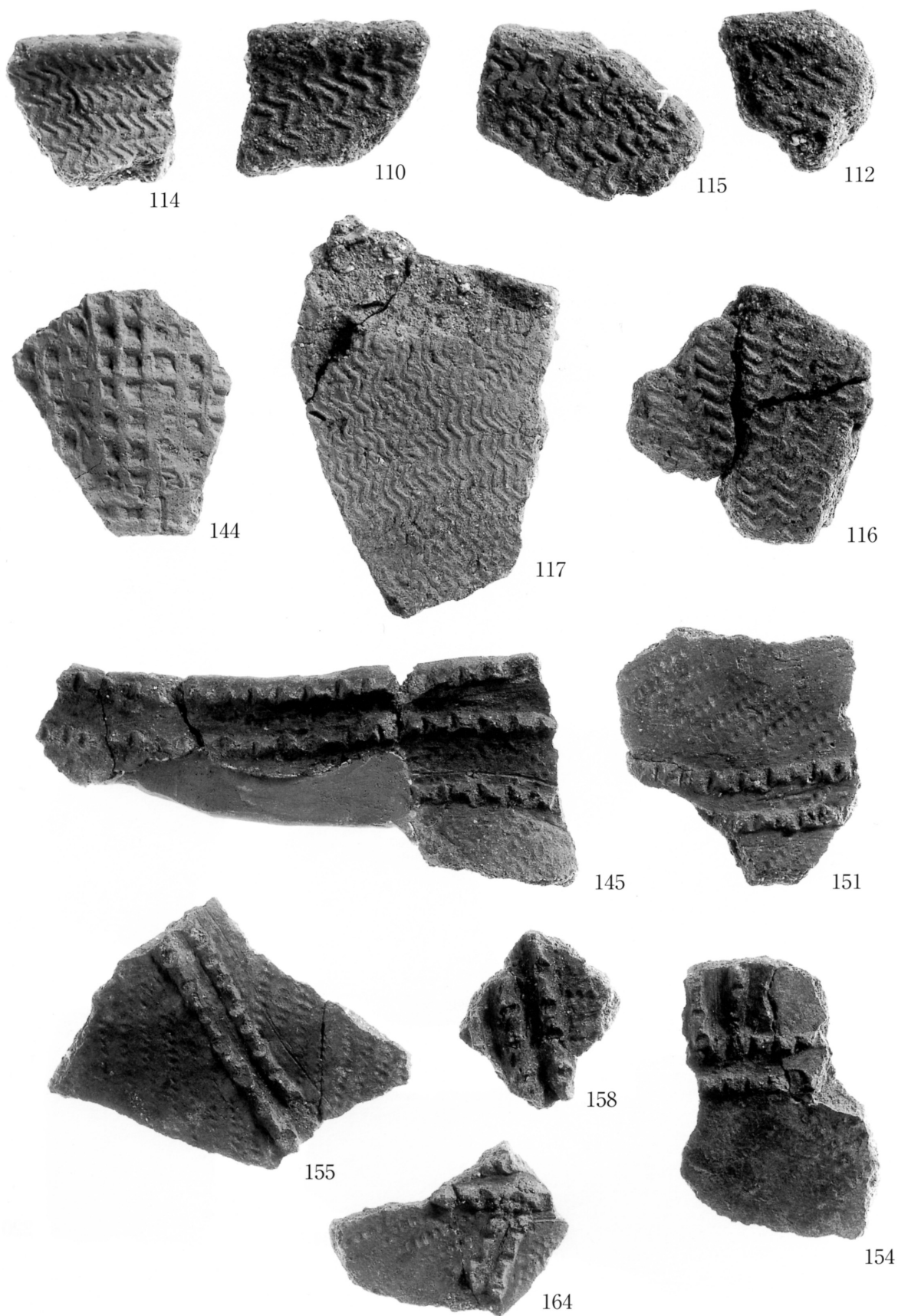


22

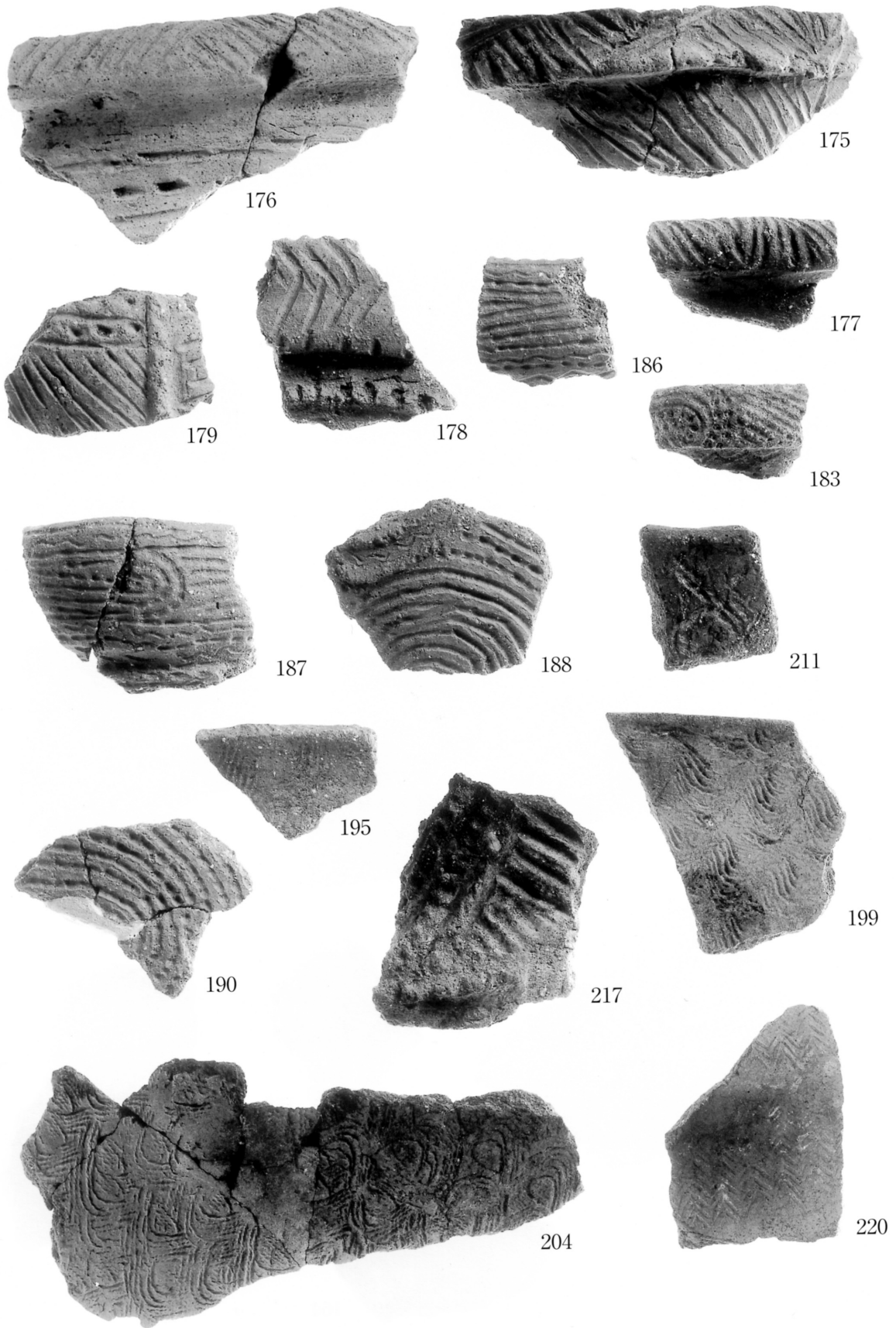
縄文時代早期の土器 1 (1類~3類)



縄文時代早期の土器 2 (4 a 類)



縄文時代早期の土器 3 (4 b 類・4 c 類・5 類)



縄文時代早期の土器4 (6類・7類)



229



230



234



233



245



240



235



250



252



239



248



246



241

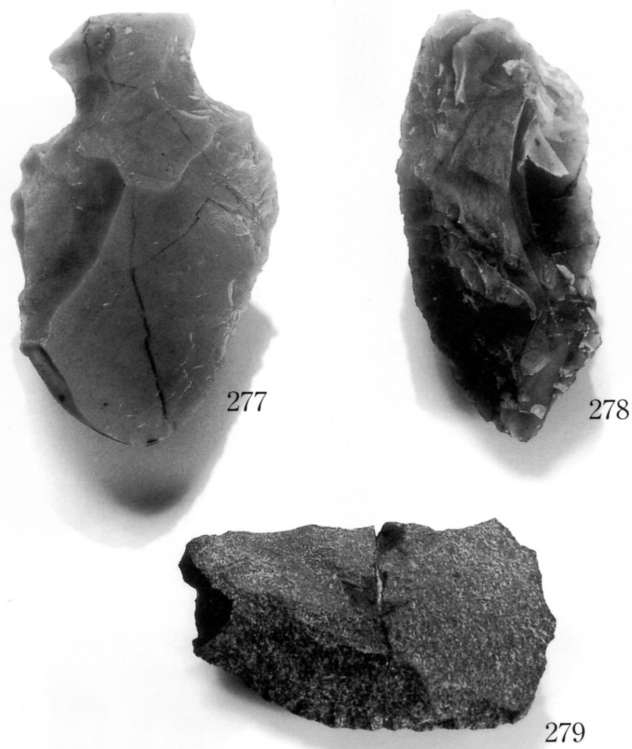
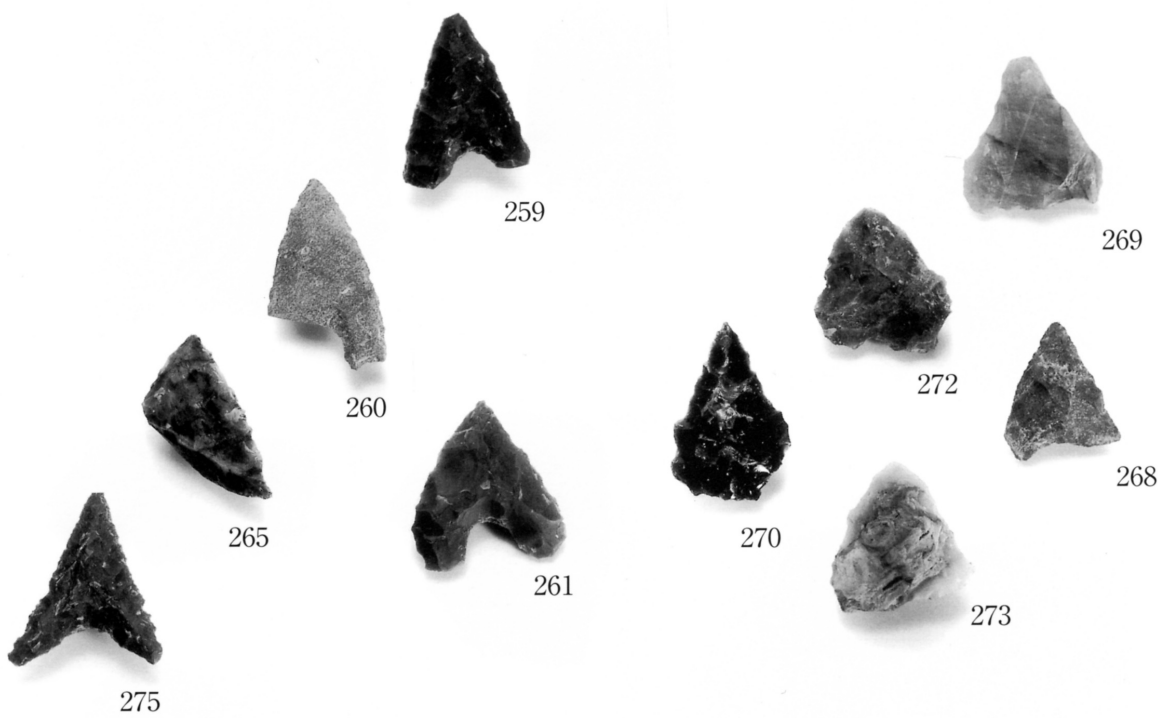


253

縄文時代早期の土器5 (8類~12類)



耳栓状土器製品



縄文時代早期の石器



290



286



288



296



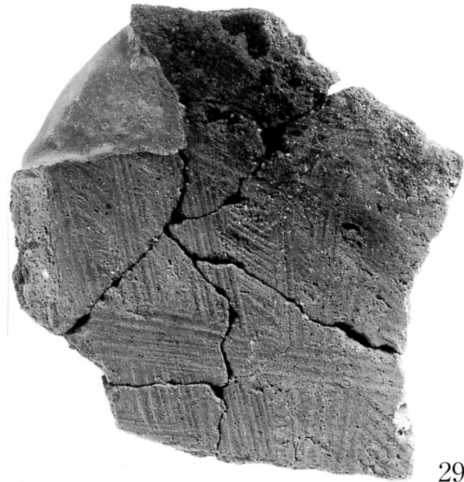
293



292



294



297



301

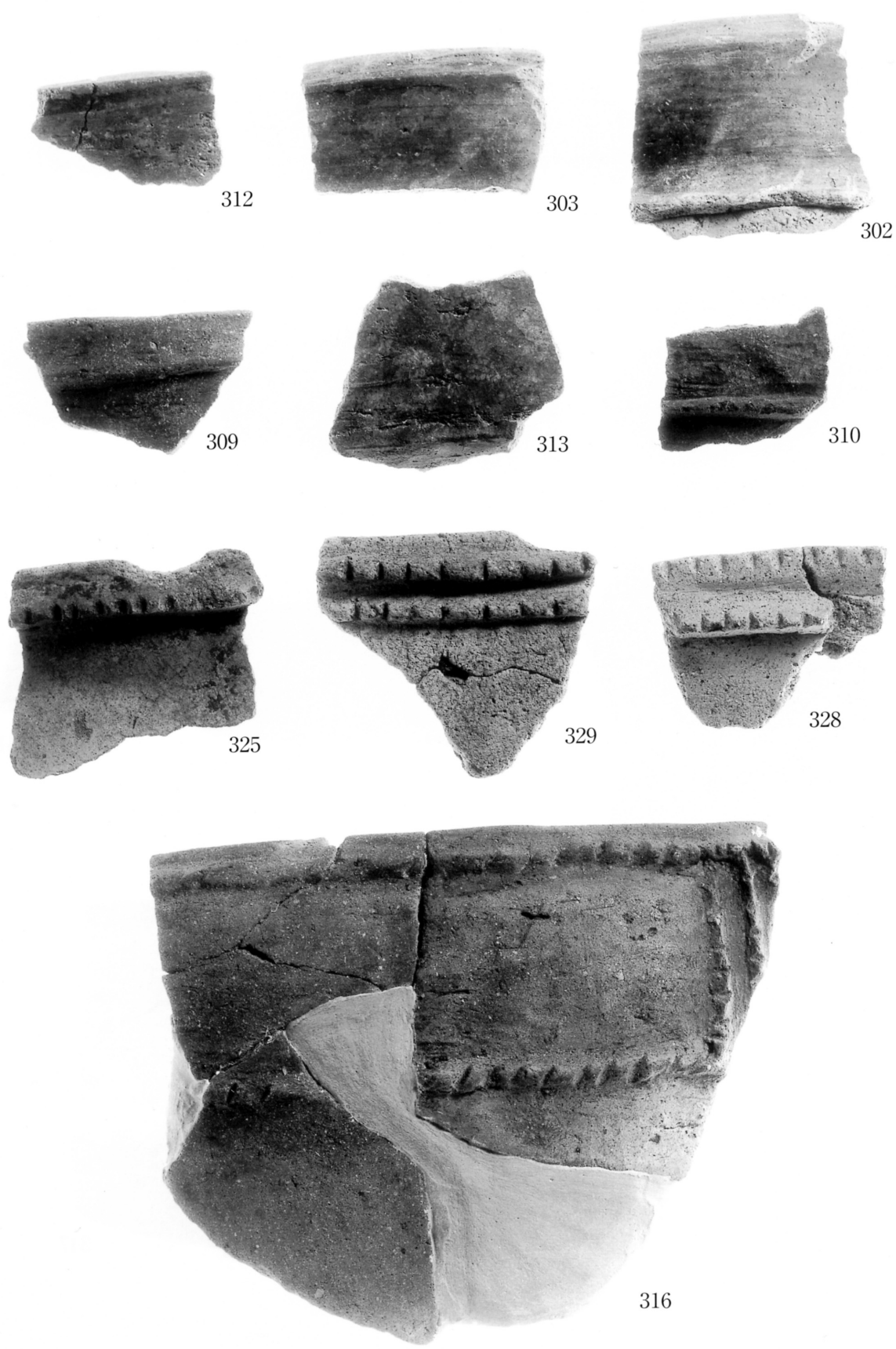


300

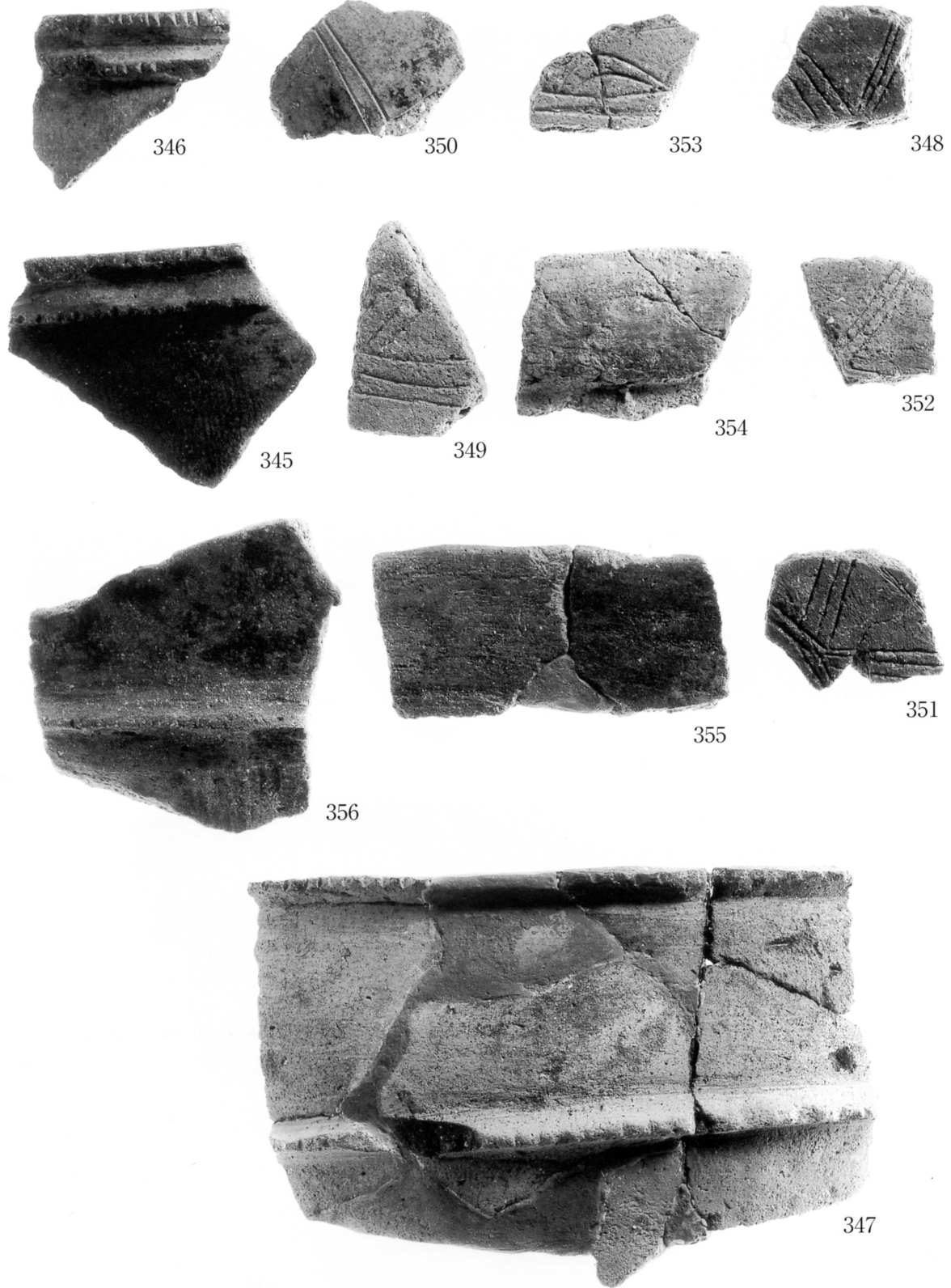


299

縄文時代前期・後期の土器



縄文時代晩期の土器



弥生時代の土器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（43）

一般地方道 志柄・宮ヶ原・福山線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

出 水 平 遺 跡

発行日 平成14年 3月31日

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地

Tel 0995-65-8787

印刷所 有限会社あすなろ印刷

〒899-0216 鹿児島県出水市大野原町1982

Tel 0996-62-2034